

# 如意谷遺跡

1982年3月

如意谷遺跡調査団

# 如意谷遺跡

1982年3月

如意谷遺跡調査団

## 序 文

箕面市の後背にある北摂山地のうち、萱野山の南麓にひろがる一帯の台地は、古く「那国」の故地であり、延喜式内社の為那都比古神社も今に鎮座している。中世になると、十指を数える集落がそこに発達し、萱野郷という郷村をつくっていた。台地の南部には、旧西国街道、古くは都と大宰府を結ぶ大路の山陽道が走っていた。

今回調査の発端になった如意谷銅鐸も当地域の出土であるが、『和名類聚抄』に見える攝津国豊島郡「駅家郷」<sup>えきやこう</sup>の地に比定されている。そこには『延喜式』の諸国駅伝馬条に載せる攝津国三駅の一つ「草野駅」<sup>くさのえき</sup>が置かれ、當時「馬十三疋」を配して、官使公用の便に供したのである。

草野駅の駅戸の村々である駅家郷は、年次が不詳であるが、のち攝津家藤原氏の所領となり、益野郷と称して垂水西牧に属した。だが十二世纪に入ると、藤原氏はこの牧を一門の氏神である春日神社に寄進したことから、その後は当地方もこれに屬した。

こうしたなかで、都に近く交通至便の当地方では、後背の山地に自生する豊富な山林資源に頼る経済活動が展開されていった。なかでも鎌倉時代の益野郷では、郷民による壳木・市木などの山林経済が盛行した。この時期は、地域の長い歴史の上でも、すぐれて活況に満ちた時代ともいえ、それらの史実は、中世古文書の隨所で知られるのである。

ところで、今回調査の如意谷跡は、鎌倉時代の中末期から室町期にかけてのものである。そのため、文書史料で得られた知見の幾つかを、考古学的な遺物・遺構をとおして裏づけることもできた。そのことでも、まことに意義ある調査であったと思っている。

なお調査にあたっては、箕面市ならびに豊中市の各教育委員会の関係各位にお世話になった。また現地での発掘調査や示後の整理作業、引き続いての本書作成について、終始努力いただいた主任調査員各位、調査員ならびに学生諸君に対し、深く感謝の意を表し、刊行の言葉としたい。

昭和57年3月

古文化調査会代表

如意谷遺跡調査団

団長 烏越憲三郎

## 例　　言

- 1 本書は箕面市立仮称新野北部小学校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は箕面市開発公社から委託を受けた古文化調査会（代表　鳥越憲三郎博士）が、如意谷遺跡調査団を組織し、1980年7月1日から10月3日まで実施した。整理および概報作成作業は、1980年10月4日から1982年2月末日まで実施した。
- 3 本書は執筆は第Ⅰ章を島田竜雄、第Ⅱ章を柳本照男、第Ⅲ章の出土遺物を高橋正則、第Ⅳ章、第Ⅴ章を福田薫が担当し、第Ⅵ章は主任調査員の島田竜雄、藤井直正、青山賢信の諸先生方に寄稿していただいた。
- 4 本書の作成について、遺物実測を主に福田薫、徳田彦次、上田桂子、花岡かよが進行させ、製図を主に橋本正幸、木下旦、岡本利秋、田上雅則、遺構写真を福田薫、遺物写真を柳本照男、木下旦が行なった。また、谷川博史、山元達、橋本郁也、森久美子、沢田理香の援助を受けた。
- 5 調査にあたっては、村川行弘（大阪経済法科大学 教授）、大阪府文化財保護課の関係各位から御指導、御教授をいただいた。また、調査補助員として、田中孝典、丸岡昭法、小嶋久夫、金沢哲人、橋本郁也、佐藤義明、東江比敏、塚本廉次（大阪経済法科大学）、菊川英政、須藤宏、首藤陽一、堀金靖（国学院大学）、山本達（関西大学）、上山桂子、花岡かよ、兼田伊子、西村孝子（大手前女子大学）をはじめ、多くの学生の協力を受けた。なお、発掘作業にあたっては株式会社三原組の協力を得た。  
本書作成にあたっては、橋本久和（高槻市教育委員会）、宇治田和生（財・枚方市文化財研究調査会）、野島稔（四条畷市教育委員会）、上川秀夫（和歌山県教育委員会）、原田昌則（八尾市教育委員会、文化財室嘱託）諸氏の御教示を得た。記して感謝の意を表します。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査の契機..... 1

第Ⅱ章 位置と環境..... 3

第Ⅲ章 調査の経過

- 1 目的と方法..... 6
- 2 調査日誌抄..... 6

第Ⅳ章 調査の概要

- 1 第一調査区..... 9
- 2 第二調査区東..... 26
- 3 第二調査区西..... 40
- 4 第三調査区..... 49
- 5 調査のまとめ..... 75

第Ⅴ章 まとめ

- 1 益野の略史..... 島田 竜雄..... 111
- 2 如意谷遺跡の出土遺物..... 藤井直正..... 120
- 3 如意谷遺跡の建物遺構..... 青山賢信..... 139

## 挿図目次

第1図 調査風景	2
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 調査地域全体図	7
第4図 調査風景	8
第5図 第1調査区基本土層図	9
第6図 井戸内出土曲物蓋・底 実測図	9
第7図 第1調査区遺構 平面図	10
第8図 土塙1、土塙5・6、配石土塙 平面図・断面図	12
第9図 第1調査区南側 遺構平面図	14
第10図 第1調査区埋没谷 平面図	15
第11図 第1調査区井戸 出土遺物実測図	20
第12図 第1調査区土塙・溝状遺構 出土遺物実測図	21
第13図 第1調査区上塙・溝状遺構、その他出土 遺物実測図	22
第14図 第1調査区土師質土器・瓦質土器・陶器 実測図	23
第15図 第1調査区瓦器椀・陶磁器 実測図	24
第16図 第1調査区磁器 実測図	25
第17図 捜立柱建物跡Ⅰ 平面図	26
第18図 第2調査区遺構 平面図・断面図	27
第19図 捜立柱建物跡Ⅱ 平面図	28
第20図 第2調査区東 上面遺構平面図	29
第21図 土塙1 平面図	29
第22図 土師質皿 実測図	33
第23図 瓦器皿・瓦器椀 実測図	34
第24図 瓦器椀 実測図	35
第25図 磁器 実測図	36
第26図 羽釜形土器 実測図	37
第27図 土師質土器・陶器 実測図	38

第28図	須恵質鉢 実測図	39
第29図	第2調査区西 堀立柱建物跡Ⅲ 平面図	40
第30図	土塙2 平面図・断面図	41
第31図	第2調査区西 上面遺構平面図	42
第32図	井戸状遺構 平面図・断面図	43
第33図	上師質皿 実測図	49
第34図	上師質皿・瓦器椀 実測図	50
第35図	上師質皿 実測図	51
第36図	土師質皿・瓦器皿・瓦器椀 実測図	52
第37図	瓦器椀 実測図	53
第38図	瓦器椀 実測図	54
第39図	瓦器椀 実測図	55
第40図	瓦器椀 実測図	56
第41図	須恵器・陶器・磁器 実測図	57
第42図	磁器 実測図	58
第43図	須恵質鉢 実測図	59
第44図	須恵質鉢 実測図	60
第45図	羽釜形土器 実測図	61
第46図	陶器・上師質土器 実測図	62
第47図	陶器・土師質土器・滑石製品 実測図	63
第48図	第3調査区第1トレンチ 平面図	64
第49図	暗渠 平面図・断面図	64
第50図	第4・第6併合トレンチ 平面図	65
第51図	石器 実測図	67
第52図	石器 実測図	68
第53図	サスカイト原石 実測図	68
第54図	楔形石器 刺離方向 実測図	69
第55図	軒丸瓦・軒平瓦・拓影図	72
第56図	軒平瓦・平瓦 実測図	73
第57図	瓦類 実測図	74
第58図	遺構検出全体図	76

## 表 目 次

第1表 楔形石器の長幅比率表.....	68
第2表 第一調査区出土土器 観察表.....	78
第3表 第二調査区東出土土器 観察表.....	86
第4表 第二調査区西出土土器 観察表.....	95

## 図 版 目 次

### 図版 1 第1調査区

- (1) 北半部遺構検出状況
- (2) 南半部遺構検出状況

### 図版 2 第1調査区

- (1) 井戸
- (2) 水路状遺構(北側より)

### 図版 3 第2調査区東

- (1) 遺構検出状況(西寄り)
- (2) 遺構検出状況(東寄り)

### 図版 4 第2調査区西

- (1) 遺構検出状況(上面)
- (2) 遺構検出状況(上面掘り下げ)

### 図版 5 第2調査区西

- (1) 井戸状遺構
- (2) 井戸状遺構(掘りかた)

### 図版 6 第2調査区西

- (1) 鉢 出土状況
- (2) 瓦器碗 出土状況

### 図版 7 第2調査区西

- (1) 上師質皿 出土状況
- (2) 滑石製品 出土状況

図版8 第3調査区

- (1) 喰渠検出状況
- (2) 喰渠木組検出状況

図版9 第1調査区 出土土器 土師質土器

図版10 第1調査区 出土土器 土師質土器

図版11 第1調査区 出土土器 磁器

図版12 第1調査区 出土土器 陶磁器類

図版13 第2調査区東 出土土器 土師質土器

図版14 第2調査区東 出土土器 土師質脚台付皿・瓦器椀

図版15 第2調査区東 出土土器 瓦器皿・瓦器椀

図版16 第2調査区東 出土土器 磁器

図版17 第2調査区東 出土土器 磁器

図版18 第2調査区東 出土土器 鉢・土釜・磁器

図版19 第2調査区西 出土土器 土師質土器

図版20 第2調査区西 出土土器 土師質土器

図版21 第2調査区西 出土土器 土師質土器

図版22 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版23 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版24 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版25 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版26 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版27 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版28 第2調査区西 出土土器 瓦器椀

図版29 第2調査区西 出土土器 磁器

図版30 第2調査区西 出土土器 磁器

図版31 第2調査区西 出土土器 鉢・土釜・甕・火舍

図版32 第2調査区西 出土土器 滑石製品

図版33 第3調査区 石器類

図版34 出土瓦類 軒丸瓦・軒平瓦

図版35 出土遺物 瓦類・古錢・曲物蓋底

位置図



## 第Ⅰ章 調査の契機

昭和41年1月1日、住宅公団（現住宅・都市整備公団）関西支社如意谷第1団地建設地造成工事中、三世紀末の大型銅鐸一口が出土した。そのため、同公団如意谷第2団地の建設が計画されるに伴い、開発予定地の全域ならびに工事用大型車両の進入道路敷予定地内における、遺跡分布と試掘調査が、財団法人大阪府文化財センターによって行なわれた。調査は昭和52年3月に実施されたが、進入道路予定地のうち、平坦部の水田下から鎌倉中期～室町期にかかる柱穴・柱根などが検出され、建物遺構の所在することが確認された。

そこで、遺構の性格や規模などを明らかにするため、道路予定地のうち約800mを全面発掘調査することになった。調査は、同公団の委託で古文化調査会（代表鳥越憲三郎博士）が担当し、昭和52年7月から8月にかけて実施した。その結果、試掘調査で検出されていた建物遺構は、進入道路予定地のみならず、その両側、つまり東西の両域に及ぶことが判明した。また、本調査で検出された井戸状遺構の主要部も、道路予定地の西側水田下に所在するかと目されるなど、この地域一帯が遺跡地であることがわかった。

進入道路予定地の調査で、遺跡地であることが判明した西側の水田地帯は、箕面市立小学校建設用地となり、造成工事が行なわれることになった。そのため、工事に先き立って、校舎用地の発掘調査を要することになった。

昭和56年3月、箕面市開発公社は、小学校建設用地のうち、平坦水田地4800mの全面発掘調査を行なうべく、これを古文化調査会（代表鳥越憲三郎博士）に委託した。同会では、委託業務を実施するため、如意谷遺跡調査團を編成したが、構成は下記の如くである。

### 調査團組織

團長 鳥越憲三郎 文学博士・大阪府文化財保護審議会委員・古文化調査会代表

主任調査員 青山賢信 大阪工業大学教授

藤井直正 大手前女子大学助教授 (日本考古学協会員)

瀬川芳則 大阪経済法科大学講師 (日本考古学協会員)

島田竜雄 箕面市文化財保護専門委員

柳本照男 豊中市教育委員会職員

調査員 福田 薫 大阪経済法科大学考古学研究会 (現箕面市教育委員会社会教育嘱託)

木下 亘 国学院大学大学院生

徳田彦次 大阪経済法科大学考古学研究会

高橋正則 大阪経済法科大学考古学研究会  
森口訓男 大阪経済法科大学考古学研究会  
阪本正幸 大阪経済法科大学考古学研究会  
堤 朋子 大手前女子大学考古学研究会  
事務局 坂上潔司 箕面市教育委員会社会教育係長  
角山公朗 箕面市教育委員会社会教育職員

先年の調査結果を踏まえて、建物遺構の性格・規模、さらには中世村落遺構を想定しながらそれらの解明に留意しながら計画し、昭和56年6月下旬から10月上旬にかけて実施した。



第1図 調査風景

## 第Ⅱ章 位置と環境

如意谷遺跡は箕面市如意谷360番地付近に所在し、北摂山地の山麓海拔約110mに立地する。遺跡の位置は行政区画でいうならば北摂地域西部にあたるが、地理的条件を加味するならば、西摂地域の北東部にあたる。西摂平野は武庫川・猪名川を含む大小の河川によって形成された沖積平野で、この地域は猪名川の支流箕面川の中流域地帯にあたる。北を北摂山地・南を千里丘陵に挟まれ、東西方向に延びる低地部分と山麓部分とからなっている。また東は三島平野に抜け、西は西摂平野に望む要衝の地である。

周辺の遺跡に目を転じてみると、縄文時代においては池田市にかけての山麓沿いと箕面川、千里川沿いに点散し、多くの遺跡は石器類の散布地である。箕面市域に限定すれば、箕面川の支流石澄川左岸上海拔80m~90mの台地上に新編遺跡が約200mの範囲に広がり、縄文時代後期頃に比定されている。また石澄川右岸池田市畠町にも京中遺跡が所在する。もう一つは箕面川中流域左岸海拔約30mほどの台地上に瀬川遺跡が所在する。瀬川遺跡は縄文時代前期から後期・晩期の遺跡として知られているが特に後期の中でも後半に属する元住吉山式土器と、若干の宮滝式土器が出土して注目される。このように多くの遺跡が存在するが、ほとんどが散布地であり、遺跡の実態解明は今後に持たなければならない地域である。その中でも、唯一の調査例は豊中市野畠遺跡である。この遺跡は猪名川の支流、千里川の上流域左岸海拔45mの河岸段丘上に位置する。昭和51年から52年にかけての調査で、縄文時代中期末から後期中葉の遺跡となることが判明した。晩期においては猪名川の下流域の両岸の沖積平野上に多く存在していく。弥生時代においては田能遺跡・勝部遺跡という西摂平野東部の中心的遺跡が猪名川中~下流域左岸に位置し、池田市宮の前遺跡、川西市加茂遺跡が猪名川両岸の台地上に位置する。特に箕面地域においては宮の前遺跡の存在に注目しなければならない。三島平野から山間部をぬい、西摂平野にさしかかる位置に所在し、いわば古道の要衝の地である。このことは弥生時代の遺構のみならず、古墳時代から奈良・平安時代にかけての検出されている遺構が如実に示している。また西摂平野東部においては多くの銅鐸が出土して注目される地域であるが、箕面地域においても、新段階の突線錐式銅鐸一口が、今回調査地区西側で出土している。この如意谷出土銅鐸は昭和41年に住宅公団建設に伴なって発見されたもので、山麓海拔150m付近で出土している。近辺で弥生時代の遺跡は発見されていないが今回の調査で後期の土器片が2・3点出土することにより遺跡の存在を想定させる。また近年、箕面駅付近で弥生時代中期の土器が市教委の立

会調査で確認されている。したがって、近い将来、弥生時代の遺跡が発見されることは疑う予知もないであろう。しかし、問題はどのような場所で発見されるか、銅鐸ともからむ事であるので多いに注目したいところである。

古墳時代においては、前期古墳が宝塚市長尾山に万葉山古墳、池田市五月山を茶臼山古墳、豊中市待兼山に待兼山古墳、豊中市刀根山に御神山古墳と前方後円墳が低地を望む丘陵に点散している。その位置をみると、その地域に遙拠していることはもちろんあるが、大和東南部を中心とする畿内中枢の前期連合政権との結びつきを示すかのように要所々に位置している。中期古墳は豊中台地に北摂最大といわゆる桜塚古墳群に代表され、後期古墳は、それぞれの地域に点散する。箕面市域に限定すれば、中尾塚古墳、桜塚古墳、大谷塚古墳、稻荷社古墳が通称六筒山で知られる丘陵状の台地に点散している。おそらくは、もっと多くの古墳があったであろうといわれている地域である。律令時代に入ると山陽道筋にあたることなどから一層重要な地城になったものと考えられる。

また千里丘陵の頂点、熊山や待兼山が風光明媚の景勝の地として万葉人によって多く詠まれていることからも窺える。「和名類聚抄」によると、この地域は豊島 上郷の一部、秦下郷、駅家郷、島下郡宿人郷の一部にあたる。豊島郡の郡家や豊島牧、「延喜式」兵部省諸国駅伝馬の条にみる草野駅の所在などから豊島郡の中心地域であることが窺える。以後古代末から中世にかけて、箕面寺、勝尾寺を中心として形成されていく地城であるが、考古学的調査は尾がついたばかりであり、したがって、今回の調査はこの地域史解明の先駆的役割を果たすものである。

#### 参考文献

箕面市史第1巻

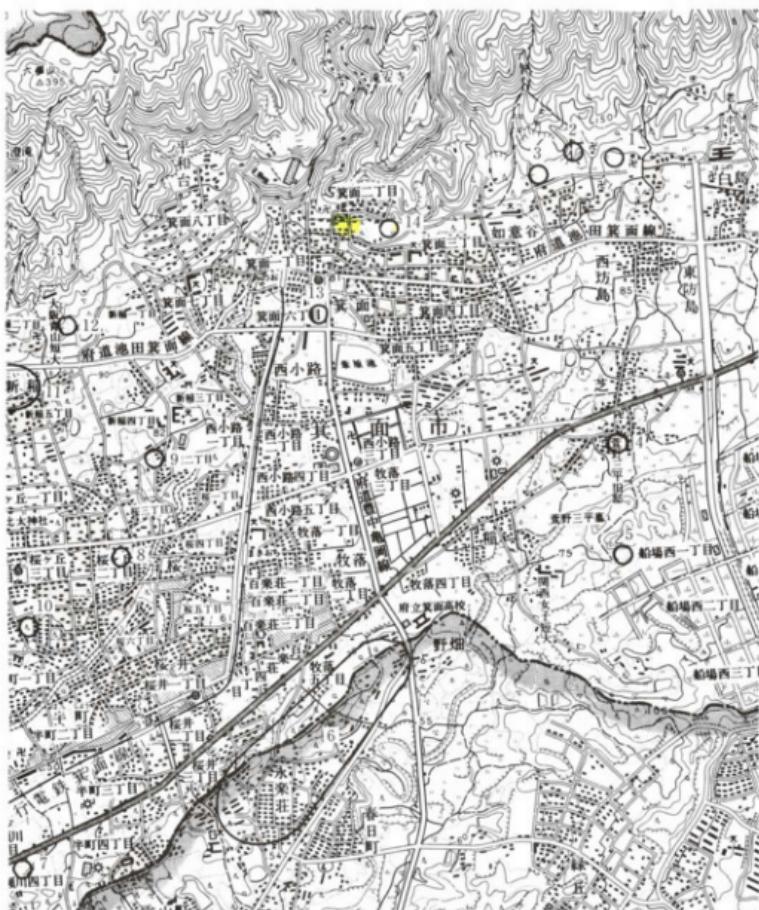
箕面市行政史料目録Ⅱ

大阪府史第1巻

渡板漢子「山嶽の高宮斎塙—箕面市如意谷町

『しおんじ山』石塙の性格—』『大阪文化誌』

第14号 1982年3月



- |             |              |               |
|-------------|--------------|---------------|
| 1. 如意谷遺跡    | 6. 太鼓塚古墳群    | 11. 新稻遺跡      |
| 2. 如意輪觀音堂   | 7. 青木家・平尾陣屋跡 | 12. 大谷塚古墳     |
| 3. 如意谷銅鐸出土地 | 8. 櫻古墳       | 13. 箕面遺跡      |
| 4. 芦野三平田邸   | 9. 稲荷社古墳     | 14. 青木家・平尾陣屋跡 |
| 5. 芝古窯址     | 10. 中尾塚古墳    |               |

第2図 周辺遺跡分布図

### 第 III 章 調査の経過

#### 1 目的と方法

今回の調査は小学校建設工事に伴うものである。第1調査区と呼称した地区の東側で住宅公園建設に伴う進入道路の調査が行なわれた。その際に検出した遺構が今回の調査地に広がっている可能性があり、遺跡の広がり、性格、時期を調べるために実施したものである。

調査対象範囲が約4700m<sup>2</sup>と広く、また地形的に北側が山、調査地中央に谷が入り込み、東西が段々な田畠という状況である。したがって便宜上第1・2・3の調査区に区分し、さらに第2区を東・西に分割した。またそれとは別に調査地全体を5m方眼に割り、南北角を基点とし、西へa b c …、北へ1・2・3…とし、これを組み合わせ北東抗を基準にし a-1、c-5などと表示した。基準抗は52年度調査の抗とあわせてある。第1調査区は調査地の東部5面の田畠と昭和52年度調査地を対象とした。第2調査区は西部北半の一段高い田畠と、さらに一段高くなつた田畠の2面を対象として、最も高い西側を第2調査区西、一段低い東側を第2調査区東とした。第3調査区は西部南半の、南東方向へゆるい傾斜をもつ5面の田畠を対象とした。本調査に入る前に各地区に数ヶ所のトレンチを設定し、遺構、遺物の有無と範囲の確認を行なった。その結果、第1、2調査区はほぼ全城を調査対象とし、第3調査区は部分的に遺構らしきものが認められるため、トレンチを拡張し捕捉調査を行なった。

#### 2 調査日誌抄

7月1日	本日から調査を開始する。第1調査区にトレンチ2ヶ所を設定する。午後から雨天のため、改めて調査の打ち合わせを行なう。	7月28日	第1調査区で遺構を検出する。
2日	第2調査区東、西にトレンチを設定する。	31日	昭和52年度調査区の、埋め砂を除去する。
5日	る。	8月1日	各地区の掘り下げを続行する。
6日	第3調査区にトレンチを設定する。	4日	第1調査区西端の埋没谷を掘り下げる。
7日	第1調査区の表土を機械掘りで除去する。	5日	第1調査区の遺構の掘り下げを行なう。
10日	調査区全体の抗打ちを行なう。	8日	埴器、土師器等が出土する。
11日	第1調査区、第2調査区東の本調査を開始する。	9日	第1調査区埋没谷の、平面、断面実測を行なう。
13日	第3調査区第1トレンチから石器が出	11日	第2調査区東・西の現代の石垣を除去する。
14日	上したのでトレンチの拡張を行なう。	12日	第1調査区の水路状造構を掘り下げる。
15日	第3調査区第4トレンチと第6トレンチを拡張して併合する。	13日	第2調査区東にサブトレンチを設け、層序の確認を行なう。
16日	第1調査区の掘り下げ	15日	第1調査区の井戸を掘り下げる。
17日	各調査区の掘り下げを続行する。	16日	第2調査区西、東の遺構を掘り始める。
20日	第2調査区西の本調査を始める。	20日	第3調査区の調査を完了する。
21日	第3調査区第1トレンチから石器数点が出土する。	21日	第1調査区の全景撮影を行なう。
25日	各調査区の掘り下げを続行する。	25日	第2調査区東の平面実測を始める。
26日		26日	第1調査区の平面実測を始める。
27日		28日	第2調査区東の調査を完了する。



第3図 調査地域全体図

8月29日	連日の降雨のため、遺物、図面の整理	9月16日	第1調査区の実測を完了する。
↓	を行なう。	↓	第2調査区西の斜面埋め土の掘り下げ
9月1日	第1調査区の平面実測を続ける。	20日	を続行する。
↓	第2調査区西の上面遺構を掘り下げる。	21日	第1調査区の全景撮影を行ない、第1
5日		24日	調査区の調査を完了する。
6日		25日	第2調査区西の下面遺構を掘り下げる。
↓		↓	
7日	雨天のため、遺物整理を行なう。	27日	
8日	第1調査区の平面実測を続行する。	28日	現地説明会を行なう。
↓		29日	第2調査区西の平面実測を行ない、全
12日	第2調査区西の上面遺構を撮影する。	↓	
13日	第1調査区、52年度調査区の再実測を	10月3日	調査を完了する。
↓	行なう。		
15日	第2調査区西の斜面埋土を掘り下げる。		



第4図 調査風景

## 第Ⅳ章 調査の概要

### 1 第1調査区

調査前の第1調査区は、北から南へ低い段々な畠地で、比較的平坦な地形の様相を呈していた。しかし調査の結果、北東部はほとんど平坦な地形であるが、南西部では急な傾斜で下っていく事が確認された。

#### 基本土層

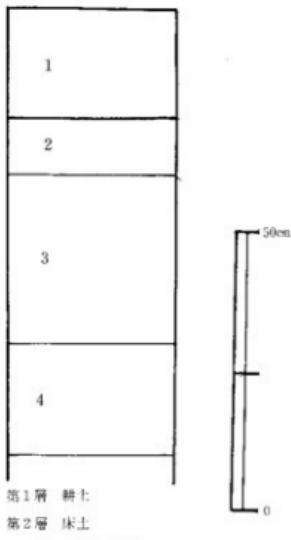
北東部の平坦な地域の基本的な土層は、耕作土、床土、灰褐色砂質土、地山と続き、南側の傾斜地は地山の上を埋め土で平坦に整地している。また南西部の急な傾斜面は多量の埋め土によって谷状の地形をほとんど平坦な地形に埋め立て、現在の田畠としている。

#### (1) 造構

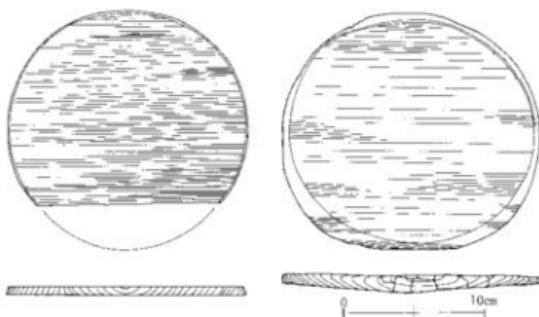
造構は、不定形な形状を呈する土塙群と、規則性を持たないピット群、水路状造構、溝状造構、井戸、池状造構からなる。また第1調査区の西端で埋没谷が確認された。造構は後世の削平をかなり受けていると考えられ、特に地形の高い北側においては、造構が極端に浅いものとなっている。造構は地山面から検出されたものがほとんどであるが、南側の地域においては傾斜面を埋め土で整地しており整地面から造構が検出された。

#### 井戸

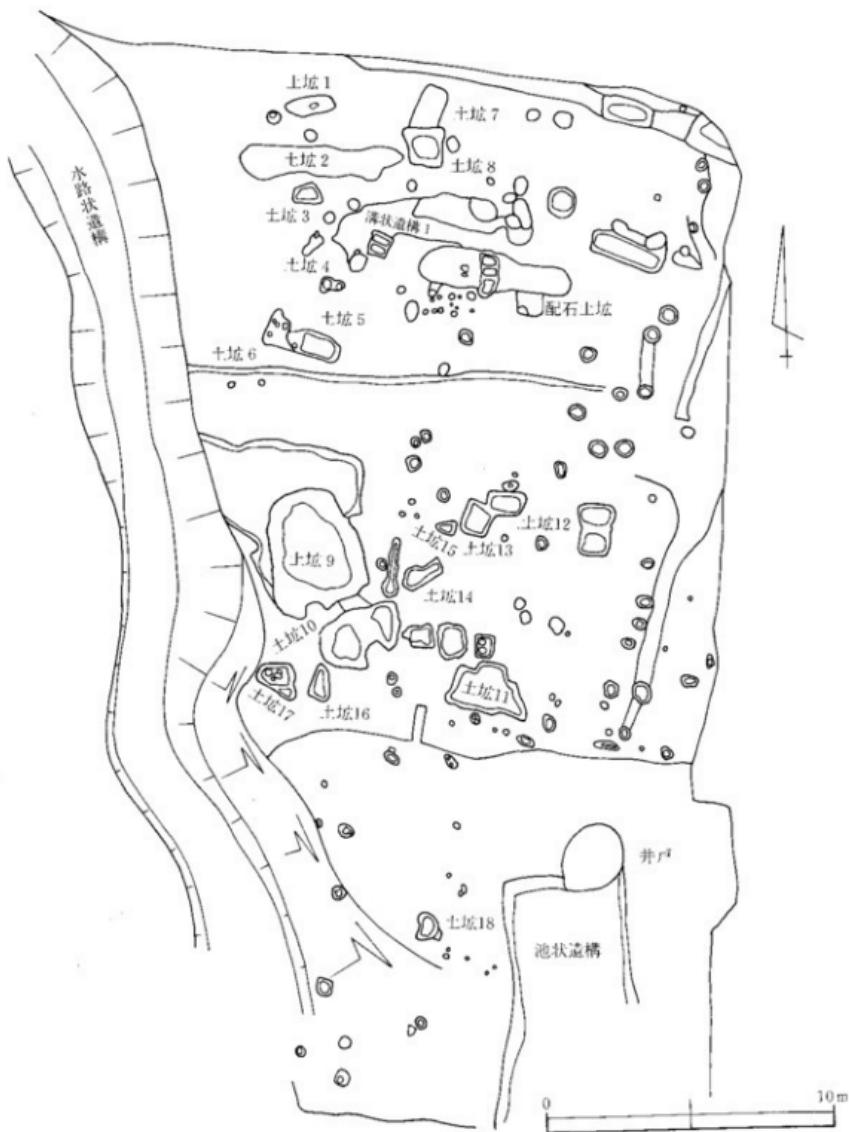
昭和52年度調査区域内に位置する井戸で、約1.8mの深さまで掘り下げられていた。今回の調査でさらに下層を掘り下げ底



第5図 第1調査区基本土層図



第6図 井戸内出土曲物蓋・底 実測図



第7図 第1調査区遺構 平面図

面を検出した。長径約2.4m、短径約1.9mの梢円形の形状を呈する素掘りの井戸で、約5.0mの深さを持つ事を確認した。今回の調査で出土した遺物は瓦器碗、土師質皿、羽釜形土器、備前焼擂鉢等の土器類の他、曲物の蓋板と底板が出土している。蓋板（第6図）は、径約17.2cm、厚さ約0.6cmを計る。底板（第6図）は、径18.2cmで、厚みは中心部に向って肥厚し、中心部で約1.3cmである。内面と考えられる面の外縁は幅約1cm前後で薄く削られる。

#### 池状遺構

西端部を除くほとんどが、52年度調査区域内に位置する。東西径約4～5m、南側が削り取られているため、南北は現長4m強を計った。52年度調査時に西側の肩部に礫がめぐらされているのが確認されている。

#### 土塙 1

長径約1.75m、短径0.6mのややくずれた梢円形の土塙である。後世の削平を受けていると考えられるため、深さは浅く、約0.3mである。遺物は巴文軒丸瓦が完形で1点出土するのみで、他は径20cmと10cmの礫が2点検出されているのみである。

#### 土塙 2

東西南方向に細長い不定形の土塙である。長径約5.8m、短径約0.7m、深さは約0.3mである。埋め土は3層からなり、一部で4層になる。出土遺物は土師質の皿数点がある。

#### 土塙 3

長径約0.9mのほぼ円形の形状を呈する深さ約8cmの深い土塙である。埋土は明灰青色砂層の單層である。出土遺物は瓦器碗の小片が1点ある。

#### 土塙 4

長径約0.8mのほぼ円形の土塙で深さは約6cmと浅い。埋土は径10cm位の礫を多く含む明灰青色砂質上層の單層である。出土遺物は備前焼擂鉢片1点がある。

#### 土塙 5

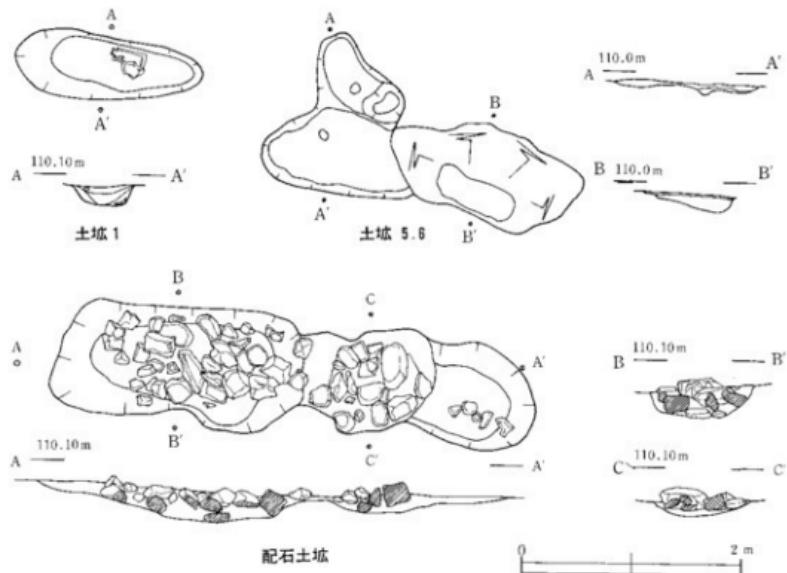
長径約1.8m、短径約0.8mの長円形の形状を呈する。深さは最深部で約17cmを計る。埋土は明灰青色砂質上層と暗灰褐色土層の2層である。出土遺物は青磁碗の小片と土師質の皿がある。土塙6を切る。

#### 土塙 6

長径約1.5mの不定形な形状を呈する。深さは約8cmを計る。遺物は出土しなかった。土塙5に切られる。

#### 土塙 7

細長い土塙で土塙8に切られる。残存長1.7m、幅約0.8mである。深さは約6cmである。遺物は出土していない。



第8図 土塙1、土塙5・6、配石土塙 平面図・断面図

### 土塙 8

長径約1.8m、短径約1.3mのややくずれた楕円形の形状を呈する。深さは約20cmである。出土遺物は土師質の皿を多量に含む。土塙7を切っている。

### 土塙 9

径約4m、深さ約0.5mのはぼ円形の形状を呈する比較的大きな土塙である。出土遺物には青磁椀片、羽釜形土器、平瓦等がある。青磁椀片の1つは土塙10出土の資料と同一個体である。

### 土塙 10

長径約3m、短径1.7mの楕円形の形状を呈する。底には2ヶ所の落ち込みが認められ、東側で深さ約35cm、西側では約30cmである。出土遺物には青磁椀片がある。

### 土塙 11

長径約2.8m、短径約1.9mの不定形な形状を呈する。深さ約30cmで底はほとんど平坦である。遺物は出土しなかった。

### 土塙 12

長径約1.4m、短径0.7mのやや丸味を有する長方形の土塙である。深さは約20cmで底はほとん

ど平坦である。土塙13に切られている。遺物は出土しなかった。

#### 土塙 13

径約1.2mのほぼ円錐の形状を呈する。深さは約0.7~0.8mで、底は平坦である。埋土は3層からなる。

#### 土塙 14

長径約1.4m、短径0.7mの不定形な土塙である。深さは最深部で約18cmである。遺物は出土しなかった。

#### 土塙 15

長径約0.8m、短径約0.6mの不定形な土塙である。深さは約10cmで、遺物は出土しなかった。

#### 土塙 16

長径約1.3m、短径約0.7mの楕円形の形状を呈する土塙である。深さは約35cmである。遺物は出土しなかった。

#### 土塙 17

長径約1.8m、短径約1mの楕円形の形状を呈する土塙である。深さは最深部で約25cmを計る。遺物は出土しなかったが、径40cm以下の中、数点が含まれていた。

#### 土塙 18

長径約0.9mのほぼ円形の形状を呈する。深さは最深部で約30cmである。遺物は出土しなかった。

#### 配石土塙

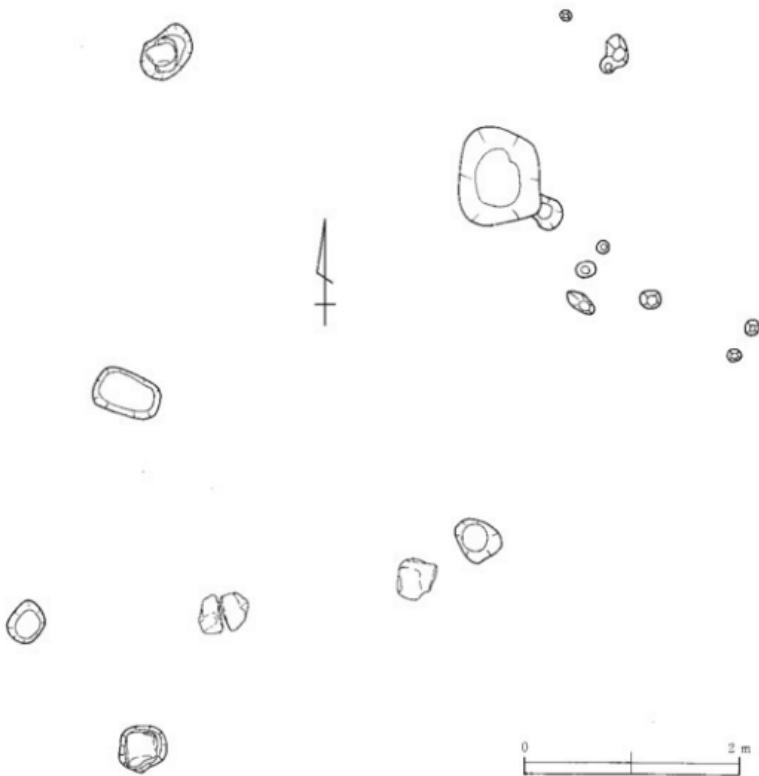
長径約5m、短径約1.5mの細長い不定形の形状を呈する。土塙内には、径20cm前後の礫がほぼぎっしりと配されていた。深さは約30cm前後である。礫を除去した後、土塙底面から1列に並ぶ、3個のピット状遺構を検出した。ピット状遺構は、3個とも径約50cmである。この土塙の西部1/3は、第1次調査により確認されていた。

#### 溝状遺構 1

現存長約7m、幅は1m強で、深さは最深部で約10cmである。東へ向って徐々に浅くなり消滅する。溝状を呈するが、溝として使用されたかどうかは不明である。配石土塙に切られる。出土遺物は土師質の皿が数点ある。

#### ピット状遺構

規模、形状、深さと様々なピットを多数検出しが、建物としての規則性はみいだせなかつた。ほとんどのピットは地山面からの検出であるが、調査南西部のピット群は第4層上面からの検出である。上部は削平されており、現状は浅いピットとなっている。ピット36、38、51、52からは根石が確認された。また根石と考えられる石が2ヶ所で検出された。根石に使用され



第9図 第1調査区南側 遺構平面図

る石は、径30cm~40cmで花崗岩である。

南西方向へ傾斜する地形と水路状遺構を埋め土で整地した後に残された遺構である。

#### 水路状遺構

遺構群の西侧を北西方向から南東方向へと続く水路状の遺構である。幅4m前後、深さは最深部で約1.5mである。この水路より西侧は傾斜面となり、遺構は検出されなかった。

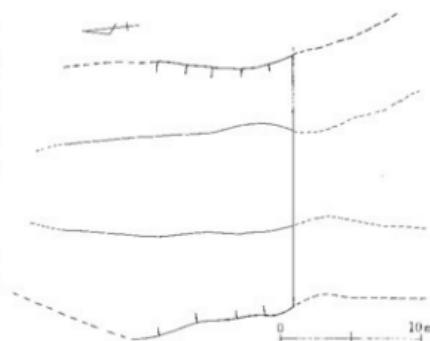
#### 埋没谷

第1調査区の西端に設定したトレッチで、急激な傾斜面を有する落ち込みの存在が確認された。機械掘りで埋め土の除去を行ない、上辺幅約20m、底辺幅約7m、深さ約2.6mの落ち込みを検

出した。人為的な造構とは考えられず、自然の谷が埋没したものであると判断した。出土遺物は、底に近い土層（暗灰黒色粘質土）から瓦器碗が出土した。また出土層は不明であるが、瓦器碗数点が出土した土層よりやや上層で白磁皿1点が出土した。

出土遺物により、第1調査区と、第2、3調査区は、中世においてはこの谷によって隔てられていた事になる。

## (2) 出土遺物



第10図 第1調査区埋没谷 平面図

### 井戸出土遺物（第11図1～30）

前回の調査の未掘部分より出土した遺物である。1～26は土師質の皿である。1～11は口徑10cm未満の小皿である。1は器高の低い皿で、内窓気味に立ち上った後、ほぼ直立気味におわる口縁部をもつ、5・6は、いわゆるヘソ皿と呼ばれる皿で、底部の中央が上方に突出するものである。2～4も同じタイプであると思われる。2～5は比較的薄い器壁を有し、やや外反気味に立ち上る体部をもつ。6は、薄く仕上げられる底部に反して、肥厚しながら内窓気味に立ち上る体部を有する。7はやや上げ底気味の底部から外反して立ち上る体部をもち、11縁端部を尖り気味にする。口縁部外面は軽くヨコナデされる。10・11は平底の皿である。10はやや内窓して立ち上がり、口縁部外面をヨコナデされる。11は斜め上方にまっすぐ立ち上がる。

18～26は口徑10cm以上の皿である。12～14はまっすぐ、ゆるやかに立ち上がり、12は口縁端部でやや内傾する。15は尖り底気味の底部から大きく外反して立ち上る体部をもつ。16・17は斜め上方に外反気味に立ち上がる。18～26は口縁端部をやや内窓させ、尖り気味にしたものである。22の口縁部外面は強くヨコナデされ、口縁部と体部の境を明瞭にする。

27は瓦器皿である。平坦な底部から丸味をもって立ち上がる、口縁部外面はヨコナデされ、端部は丸く收める。暗文は風化のため不明である。

28は瓦器碗である。体部は、斜め上方に、まっすぐに立ち上がる。口縁部外面は2段にヨコナデされ、端部は外反して、丸く收められる。

29・30は檜前焼の榙鉢である。29は口徑20.9cmを計り、丸味を有しながら斜め上方に延びる体部をもち、口縁部は逆「く」の字形に内傾する。体部内面にカキ目が施される。30は、斜め

上方に、まっすぐに延びる体部を有する。口縁部は「く」の字形に内傾しており、端部は直立する。体部内面に6本単位のカキ目が施される。口径は28.0cmを計る。

#### 土塙・溝状遺構出土遺物（第12図1～33、第13図1～12）

第12図（1～24）は、土塙8からの出土遺物で、すべて土師質の皿である。1～13はヘソ皿、もしくはヘソ皿であると考えられる皿で、口径は10cm以下である。内寄気味に丸味を有して立ち上がる体部を有し、口縁部で外反する。8・10は口縁端部を内傾させ、丸く收める。9は口縁部をほぼ水平に外反させ端部を直立させる。14～16は中央の突出度の低いヘソ皿である。14は口径9.5cm、器高1.7cmを計る。体部を肥厚させて斜め上方に立ち上がり、口縁部は外面をヨコナデして薄く仕上げる。15は口径7.6cm、器高1.75cmを計る。底部はゆるやかに内部へ突出する。体部はやや肥厚させて外反気味に立ち上がる。16は口径10.4cm、器高2.05cmを計る。底部はゆるやかに内側へ突出する。体部はやや急な角度をもって外反気味に立ち上がる。器壁の厚みはほとんど一定である。17は口径8.4cmを計り、内寄気味に丸味を有して立ち上がり、端部は丸く收める。18は口径15.3cmを計り、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。端部は尖り気味になる。19は口径12.0cmを計り、口縁部外面にヨコナデ調整を施す。端部は内傾して尖る。20は口径12.5cmを計り、体部は丸味を有して急な角度で立ち上がり、口縁部で外反する。端部はやや内傾する。口縁部外面は軽くヨコナデされる。21は口径13.0cm計り、体部は丸味をもって内寄して立ち上がり、口縁部で外反する。端部は内傾して尖り気味に終わる。22は口径13.6cmを計り、丸味を有して内寄気味に立ち上がる。体部から外反気味の口縁部が続く。口縁部外面にヨコナデ調整を施すため、体部との接点の器壁は肥厚する。口縁端部は直立する。23は口径16.5cmを計り、口縁部外面は強くヨコナデされ、体部との境が明瞭となる。端部は直立して尖り気味に終わる。24は口径21.2cmを計り、内寄して立ち上がる体部から大きく外反する口縁部が続く。端部は直立して尖る。

第12図25～33は溝状遺構1から出土した遺物である。25～30は、すべて底部を欠損するが、ヘソ皿と考えられる。内寄する体部から外反する口縁部へと続く。端部を肥厚させ、直立させるもの（28・29）と斜上方に延ばすもの（25・26・27・28）がある。31は口径12.1cmを計り、外反気味の口縁部は肥厚しており、端部は丸く收める。32は口径13.2cmを計り、器壁は比較的厚く、口縁部は短かく外反する。端部は直立して尖り気味に終わる。33は口径14.7cmを計り、口縁部は外反気味で端部は尖る。胎内に砂粒を含む。

第13図1～7は土塙2からの出土遺物である。1は口径8.2cm、器高1.85cmを計り、平坦な底部から、内寄して立ち上がる体部をもつ。口縁部は緩やかに外反して、端部を丸く收める。口縁部外面にヨコナデ調整を施す。2～4はヘソ皿と考えられる口径は9cm未満である。2は

外反気味に立ち上がり、口縁部を肥厚させる。3は内湾気味に立ちあがる体部から外反する口縁部が続くもので、端部は直立する。4は口縁部外面にヨコナデ調整を施す。体部は指頭圧成形を施され、口縁部で外反する。5は口径12.8cmを計り、口縁部外面は横ナデ調整を施され外反する。6は口径10.7cmを計り、体部は外反して立ち上がり、口縁部で直立気味になる。7は口径14.2cmを計り、内湾して立ちあがる体部から、比較的まっすぐ斜め上方に延びる口縁部が続く。端部は直立させ、尖り気味に終わる。

8は土塙5から出土した土師質の皿である。口径6.5cm、器高1.1cmを計り、平坦な底部から内湾気味に立ちあがる体部をもつ。口縁部は外反して、端部は尖り気味になる。10は土塙9から出土した。口径22.0cmを計る瓦質の火舎と思われる。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く取める。外面はタテ方向、内面はヨコ方向にヘラ磨きを施す。9・11・12は土10からの出土遺物である。9は灰釉のおろし皿で、底径7.6cmを計り、底部内面は格子にカキ臼を施す。底部外面に糸切り跡を残す。11は土師質の鉢である。口径28.2cmを計り、体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は肥厚させて直立気味に立ち上がる。表面の腐蝕が著しく、調整は不明である。12は羽釜形土器である。口径23.2cm、器径28.4cmを計り、鉢はほぼ水平に付き、端部はやや上がり気味になる。内傾する口縁外面には凹線状の段がつき、内面はていねいなハケ調整を施す。

### 土師質III（第13図13～25）

第13図13～25は包含層から出土した土師質の皿である。13～16は口径10cm未満でヘソ皿と考えられる。端部が外反する13・14と直立気味になる15・16にわけられる。17～19は口径10cm前後を計り、体部を屈折させて立ちあがる17、外反気味に立ちあがる18、ほぼまっすぐ斜め上方に立ちあがる19がある。20～22は口縁部外面をヨコナデされる。20は内湾気味に、角度をもって立ちあがる。23は口径14.6cmを計り、体部は内湾気味に立ちあがる。24は口径15.1cmを計り、体部はほぼまっすぐ斜め上方に立ち上がり、口縁部で外反する。焼成は軟質である。25は口径15.0cmを計り、口縁部は大きく外反して斜め上方に延びる。

### 土師質土器・陶器・瓦質土器（第14図1～10）

1・2は近世の土管と思われる。1は口径22.8cmを計り、体部はほぼまっすぐ上方に延び、口縁端部は平坦にされる。2はほぼまっすぐ上方に延びる体部を有しており、口縁部で外反する。端部は尖り気味に終わる。3・4は瓦質の土器で火舎と思われる。3は底径16.0cmを計り、比較的薄い底部から肥厚気味に立ちあがる。4は口径30.9cmを計り、体部外面を削って突帯を付ける。口縁端部はほぼ水平に外反して上端を平坦にする。内外面共にていねいにヘラ磨きさ

れる。6は土師質の鉢と考えられる。口径34.2cmを計り、口縁部は肥厚して内傾する。7は常滑焼の鉢と考えられる。底径7.0cmを計る。8～10は備前焼揃鉢である。8は底径11.3cmを計る。色調は淡赤褐色で、9・10に比べて時期が下るものである。9は口径26.2cmを計り、口縁部は肥厚して内傾する。内面のカキ目は5本以上の単位で施される。10は底径17.4cmを計り、6～8本単位のカキ目を施す。

#### 瓦器椀（第15図1～9）

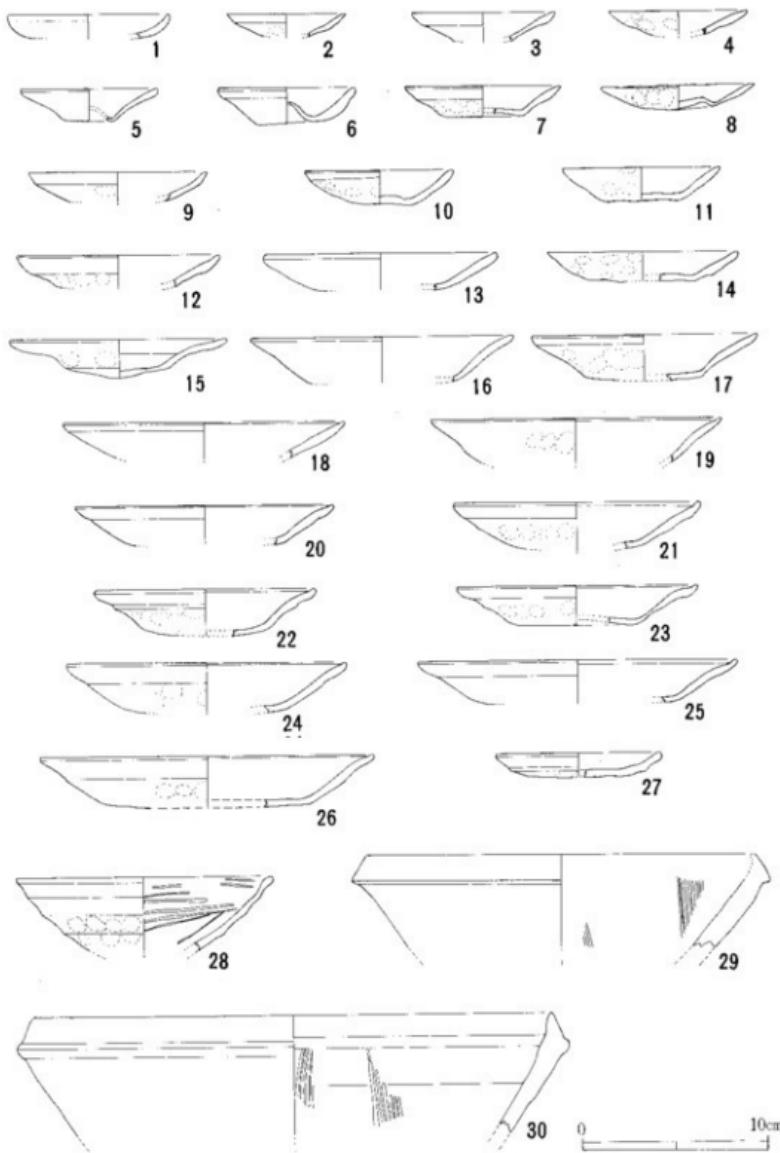
1～4は不定形な貼り付け高台である。見込みの暗文は平行線状のもの（1～3）、鋸歯状のもの4がある。5～9は口縁部外面をヨコナテ調整し、体部に指頭圧痕を残すものである。暗文は風化が著しく明瞭ではないが、太い暗文が粗雑に施される。9は口径4.1cm、器高4.0cmを計り、器高指数25.4を計る。

#### 陶器・磁器（第15図10～17、第16図1～12）

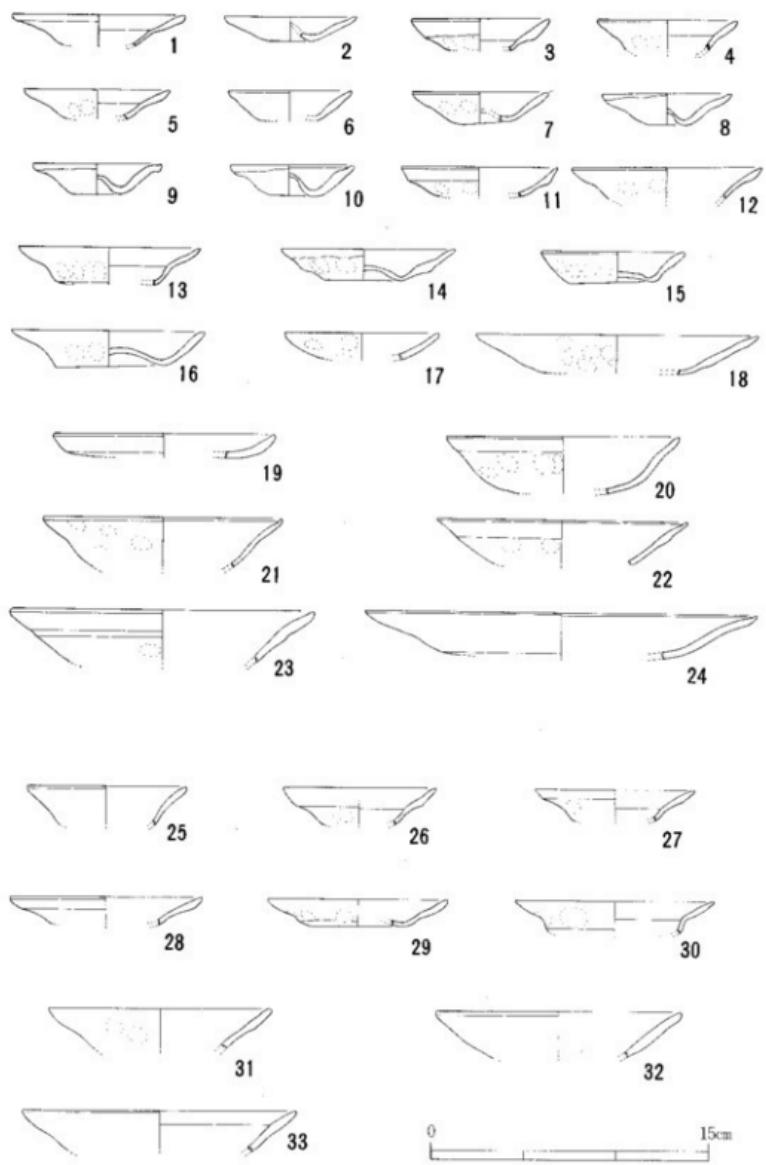
第15図10は天目茶碗である。高台は径3.5cmを計り、シャープに削り出される。胎土は密で、焼成も良好である。中国製品と考えられる。11は瀬戸焼の香炉である。口径10.1cm、器径11.2cmを計り、体部は内窵して立ち上がり、口縁部で角度を変えて直立する。端部は水平に外反する。胎土は精良で、外面と内面口縁部は淡黄緑色を呈する。12は白磁皿である口径11.8cm、高台径6.4cm、器高3.1cmを計り、体部は内窓気味に斜め上方に延び、口縁部は外反する。端部は屈曲させて下方に下がる。高台は薄く削り出される。13は龍泉窯系の青磁皿である。口径12.2cm、器高3.0cmを計り、体部は薄く仕上げられ、斜め上方にまっすぐ上がる。底部外面は焼成前に釉がカキ取られる。内面見込みにヘラと櫛搔による草花文が施こされる。14は同安窯系の青磁皿である。底径4.1cmを計り、内面見込みにはヘラの片割りと、ジグザグ文が施こされる。15は枢府系の白磁皿である。口径16.2cmを計り、体部は内窓気味に立ち上がり、口縁部を肥厚させる。内面に龍文が施こされる。16・17は白磁碗の高台部である。16は高台径8.2cmを計り、高く直立した高台である。17は高台径7.8cmを計り、浅く削り出した厚い高台である。下部外面は釉を施さない。

第16図1～12はすべて青磁碗である。1～7・9～12は龍泉窯系である。1・2は内面に草花文を施し、内面は無文である。3・4は体部外面に蓮弁の文様を有するものである。5・6は体部外面に雷文が施されるものである。7は外面に雷文、内面に草花文が施される。8は、内面見込みの部分を輪状に削り取るもので、高台内は釉を施これない。細く高い台状の削り出し高台つく。9は細く内傾する削り出しの高台が付く。高台内面にまで釉が施こされる。内面の見込みは無文である。10は肥厚する底部から丸味をもって立ち上がる体部をもつ。口縁

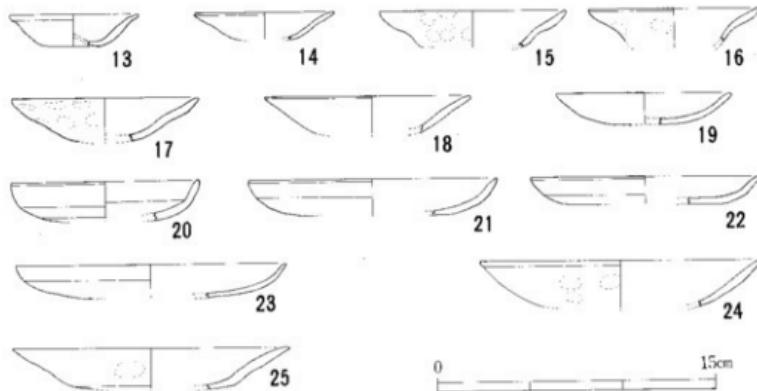
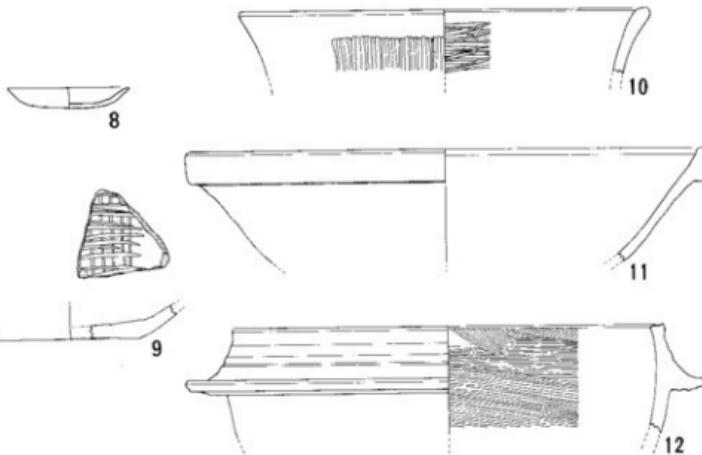
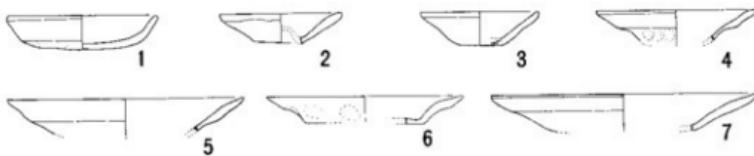
部はわずかに内傾して、端部を丸く收める。高台は高く安定しており、高台輪内は輪状に削り取られる。体部外面に雷文が施され、内面の見込みの部分には草花文のスタンプが押される。11はやや外反気味の高台を有する。内面の見込みにスタンプが押されるが、文様は不明瞭である。12は低く薄い高台を有する。内面の見込みに草花文のスタンプが押される。



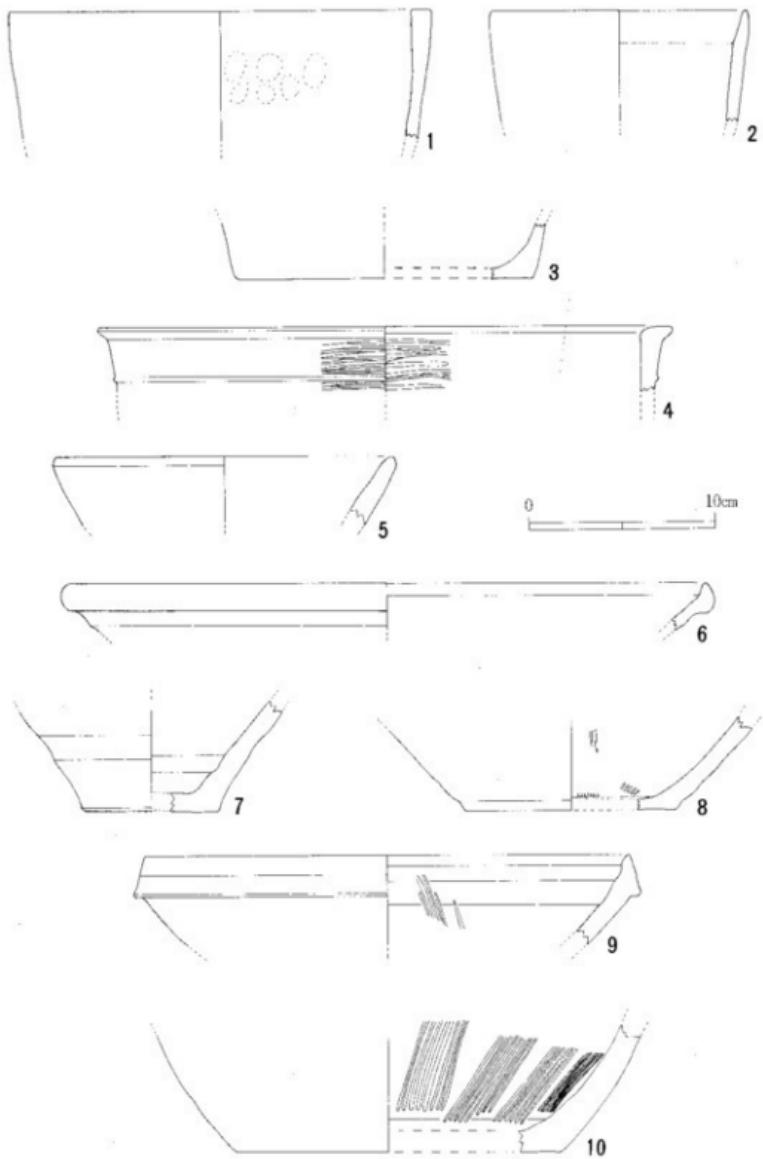
第11図 第1調査区井戸 出土遺物実測図



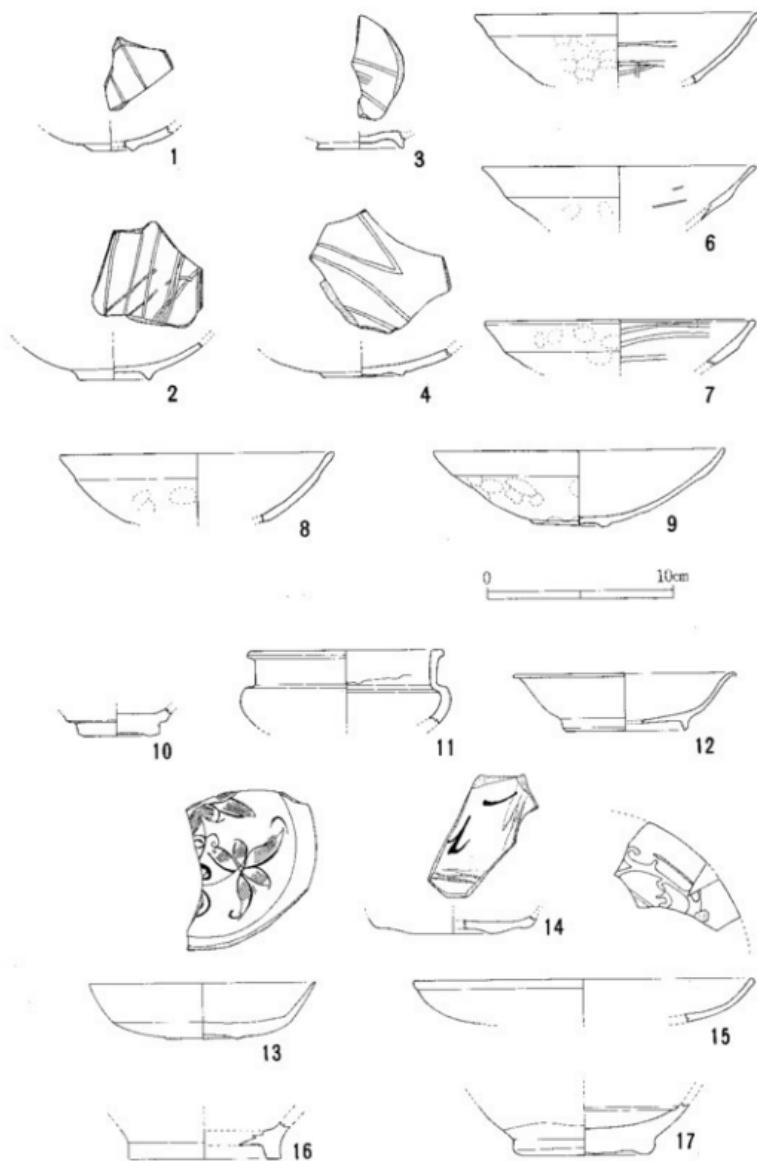
第12図 第1調査区土塙・溝状造構 出土遺物実測図



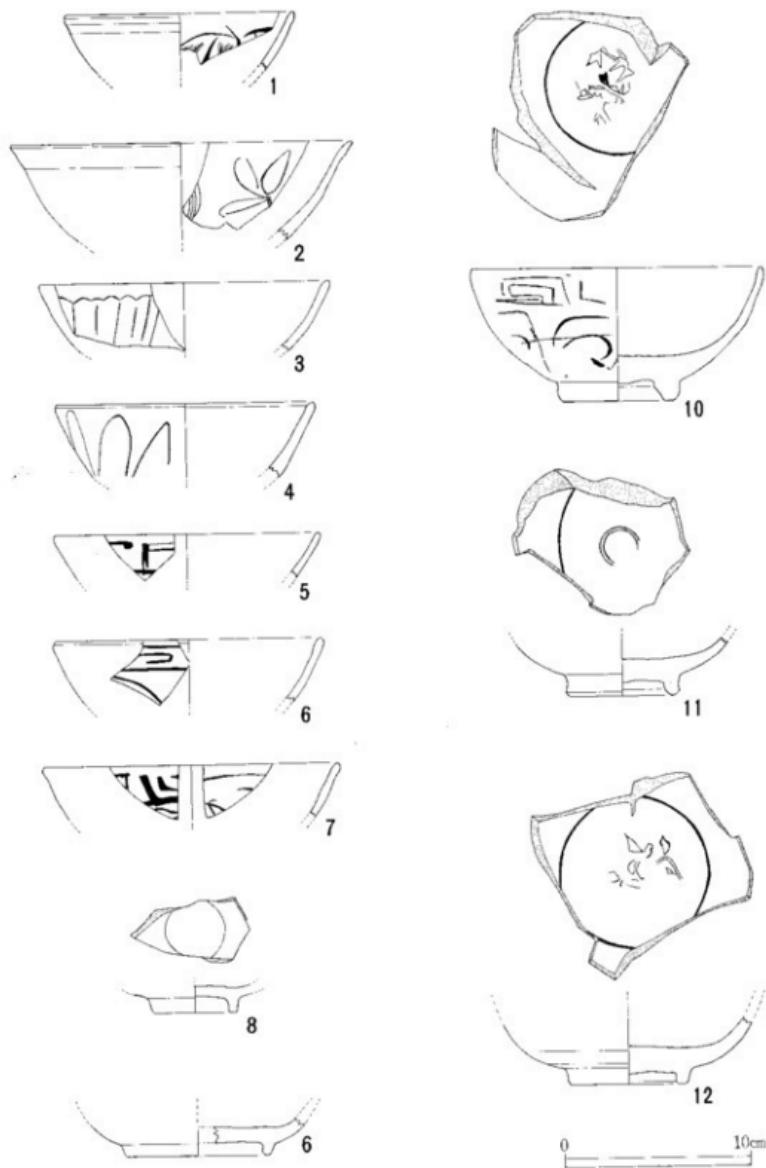
第13図 第1調査区土塙・溝状造構・その他出土 造物実測図



第14図 第1調査区土師質土器・瓦質土器・陶器 実測図



第15図 第1調査区瓦椀器・陶磁器 実測図



第16図 第1調査区磁器 実測図

## 2 第2調査区東

### 基本土層

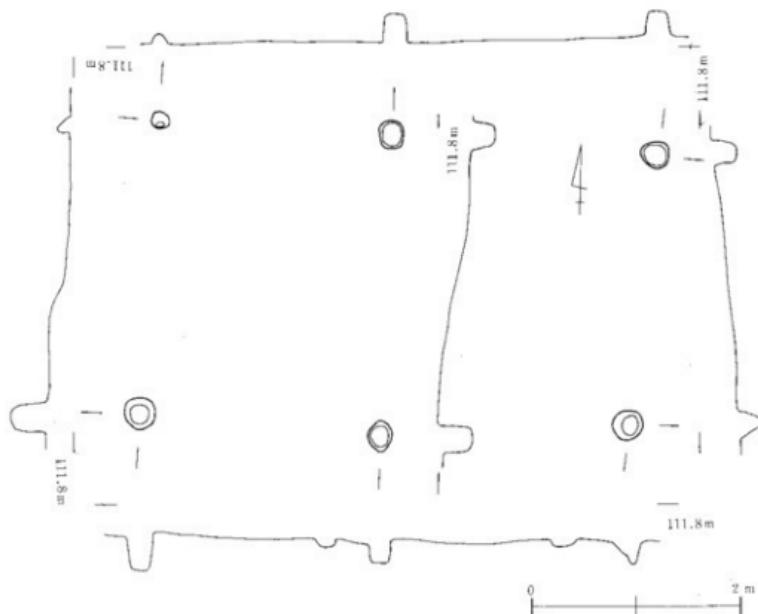
第2調査区西から続く北側の一段高くなった平坦面と、南側の斜面の上部を削平して畠地としたため、層序は上から、耕土、床上、灰黄褐色粘質土と続き、北側ではその下層に地山、南側では埋め土層になる。

#### (1) 造構

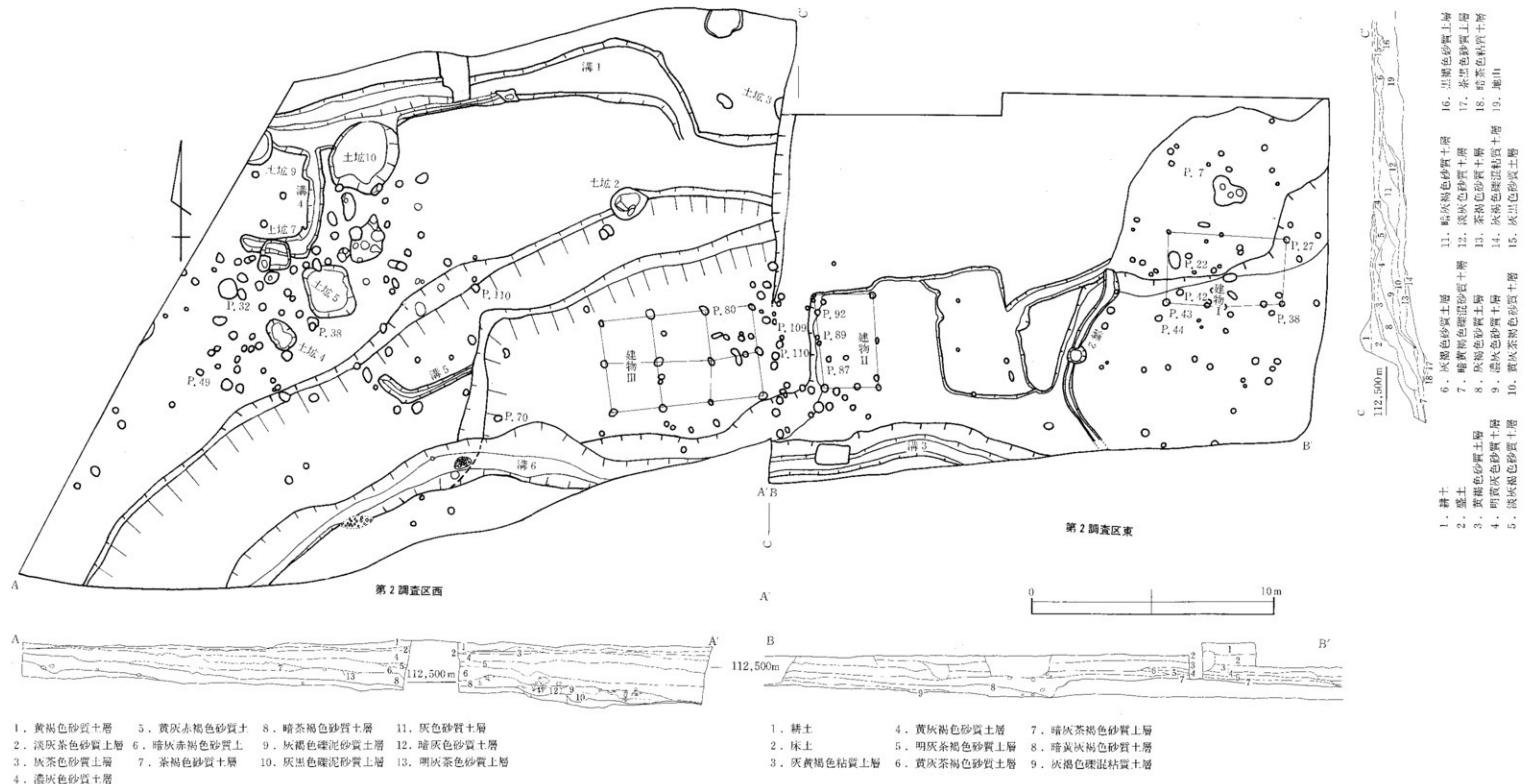
検出された造構は、掘立柱の建物跡二棟、溝状造構、土塙、ピット群である。造構面は、第2調査区西の造構面と続くものであるが、北側の高くなった部分は削平され、造構は南側に片寄って検出された。

#### 掘立柱建物跡 I (第17図)

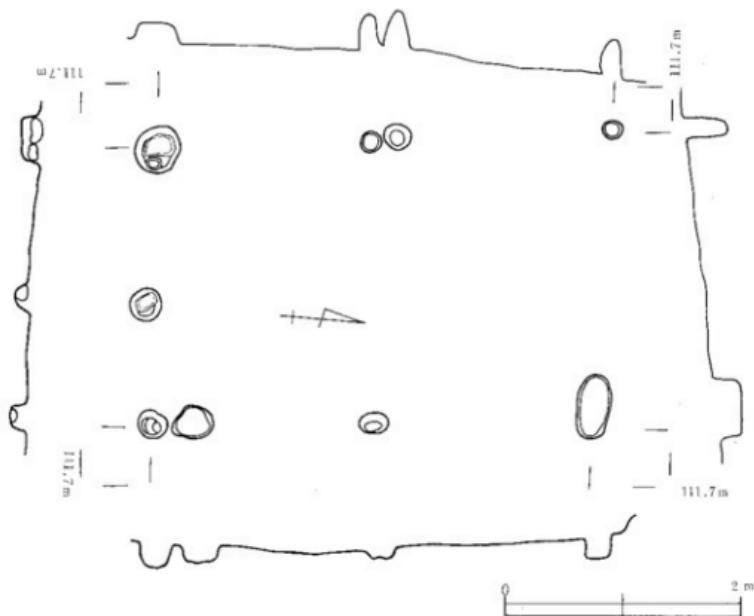
南北1間×東西2間の掘立柱の建物跡で、主軸の方向はN・2°・Eである。南北約9.8m、東西約4.6mを計り、面積は約12.9m<sup>2</sup>である。掘り方は円形で、径20cm~30cm、深さ20cm~35cmである。建物の立地面は北側から南側へ下る、緩い斜面地形である。



第17図 掘立柱建物跡 I 平面図



第18図 第2調査区遺構 平面図・断面図



第19図 掘立柱建物跡II 平面図

#### 掘立柱建物跡 II

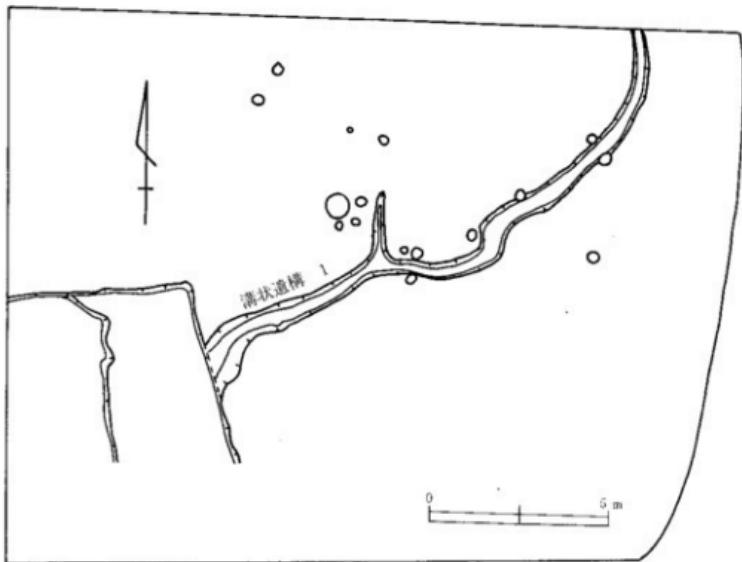
南北2間×東西1間の掘立柱の建物跡で、主軸の方向はN-4°-Wである。南北約3.9m、東西約2.4mを計り、面積は約9.4m<sup>2</sup>である。掘り方は、円形もしくは椭円形で、径約50cm~20cmである。深さは約30cmを計り、2ヶ所で根石が検出された。

#### 溝状遺構 1

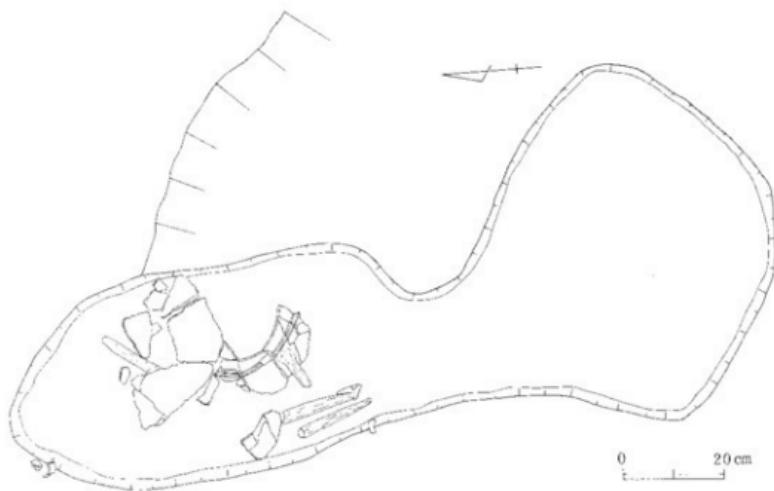
調査区のはば中央を、北東から南西へ横切る遺構である。幅約0.6m~0.8m、深さ0.1mを計る。灰黄褐色粘質土上面で検出されており、建物の時期より下るものである。遺物は出土しなかった。

#### 溝状遺構 2

北から南へと屈曲しながら続く浅い溝状遺構で、幅約0.4m~0.7m、深さは最深部で約0.1mである。検出した長さは約7mで、両端で除々に浅くなり消滅する。地山上面から検出したもので、溝状遺構1を切る。



第20図 第2調査区東 上面遺構平面図



第21図 土塙1 平面図

### 溝状遺構 3

第2調査区西の溝状遺構6と続いていると考えられる遺構で、詳細は後述する。

#### 土塙 1

埋め土の上面で検出した浅い土塙で、長径約1.6m、短径約40cm～25cmの不定形な形状を呈する。深さは最深部で約10cmを計るに過ぎず、上部は削平されていると考えられる。内部から羽釜形土器が出土した。

#### ピット群

検出されたピットは、総数105個を数える。そのほとんどが、径20cm～50cmの円形状を呈し、深さ30cm前後を計る。確実に建物跡と考えられるものは2棟であるが、根石が検出されたものや、柱穴と考えられるものもあり、他に向等かの施設が存在した事も考えられる。

### (2) 出土遺物

#### 土師質皿 (第22図1～26)

1～6は口径10cm以下の皿で、内窓気味に斜め上方へ立ち上がる体部を有する。2・4は口縁部を直立させる。7は器壁の厚味が一定でなく、体部はゆるやかに立ち上がる。8・9は底部に丸味を有する。8の口縁部外面は入念なヨコナデ調整を施す。10～17は口縁部外面が横ナデ調整されるもので、12・17は2段のヨコナデが施される。18は立ち上がりの低い皿で、底部中央を内側へ突出させる。19～23は口径10cm以上の皿である。20は屈曲しながら斜め上方にのびる体部を有し、口縁部を外反させる。22は内窓気味に立ち上がる体部をもち、口縁部を内傾させる。23は短かく直立する口縁部を有する。24～26は脚付皿である。24は脚部外面に顯著に指頭圧痕を残し、器壁も厚く粗雑に成形される。25は細く低い脚部を有する。端部はわずかに外反する。26は緩やかに斜め上方へ立ち上がる体部を有する。口縁部は2段にヨコナデされ、端部は尖り気味におわる。脚部は直立気味に下方向へ延びたのち角度を変えて、斜め下方へ開く。脚部外面は顯著に指頭圧痕を残す。

#### 瓦器皿 (第23図1～24)

出土した瓦器皿のほとんどが小片で、然も風化が著しいため暗文が確認出来るものは微量である。全て和泉型のものである。口縁部外面は入念なヨコナデ調整が施され、体部外面には顯著に指頭圧痕を残す。底部から体部にかけて丸味を有するものと、平坦なものの2つのタイプに分けられる。暗文が確認出来るものは2点ある。23は見込みの部分に平行線状の暗文、24は体部内面に粗い暗文が施される。

### 瓦器椀（第23図25～36・第24図1～19）

瓦器椀も、瓦器皿同様、風化が著しいものが多量を占め、暗文が不明瞭なものが多い。和泉型のものが大半を占めるが、楠葉型のものも数点出土する。

第2図25～36、第3図1～14は和泉型のものである。口縁部外面はヨコナデ調整され、体部外面は指頭圧痕が顕著に残る。高台は低く不定形であるが、第2図28はやや安定した細く高い高台を付ける。体部外面の暗文は、第3図12にわずかに施される以外は認められない。内面見込みの暗文は平行線状のもの他に鋸歯状のもの第2図36がある。器高指数の計測可能なものは2点のみである。第3図8は29.3、10は28.7である。14は体部外面に2条の沈線状の曲線が認められる。15～17は楠葉型である。口縁端部内側に沈線が施され、暗文は和泉型のものに比べて密に施される。

### 磁器（第25図1～23）

1～10は青磁である。1・2は、龍泉窯系の皿と考えられる。1は内弯気味に斜め上方に立ち上がる体部を有する。口縁部は外反する。体部と底部境は釉のりが特に厚い。2は底部から屈曲して外反気味に立ち上がる体部を有する。内面見込みには草花文が施される。3は龍泉窯系の盤と考えられる。器壁は厚く、断面三角の高台を有する。釉は特に厚く施される。4・5は同安窯系の碗である。4は台形の高台を有しており、高台輪内は削り取られる。体部外面にヘラの片彫が施される。内面の底部と体部の境に沈線をめぐらす。5はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部でやや角度を急にして立ち上がる。体部外面には縱方向の構構き文、内面には、ヘラの片彫とジグザグ文が施される。6は高台内外部は施釉されない。釉のりが悪く小片であり、窯は判断出来ない。7～10は龍泉窯系の碗である。7は体部外面に雷文を施す。8・10は比較的まっすぐに斜め上方に立ち上がり端部をやや外反気味にする。8の体部内面に草花文が施される。9は口縁部を外反させ端部を丸く収める。

11は白磁の皿である。内弯気味に立ち上がり端部を直立気味にする。内面の底部と体部の境に段を有する。12～16は玉縁状の口縁部を有する白磁碗である。12は比較的小さな玉縁状の口縁部をもつもので器壁も薄く仕上げられる。14は内面口縁部付近に浅い沈線を施すものである。16・17は玉縁状の口縁部をもつと考えられる白磁碗の底部である。高台は低く削り出される。16は幅の薄い高台、17は幅の厚い高台で、両方とも内面の底部と体部との間に沈線が施される。18～23は口縁部が玉縁状にならないものである。19・20は口縁部がほぼ水平に外反するもので、体部内面に段を有する。21・22は口縁部を緩やかに外反させるものである。23は細く高い高台部から、内弯気味に外反する体部をもち、口縁部が緩やかに外反するものである。内面の底部と体部の境には沈線が施される。体部外面下半は施釉されない。

### 羽釜形土器（第26図1～8）

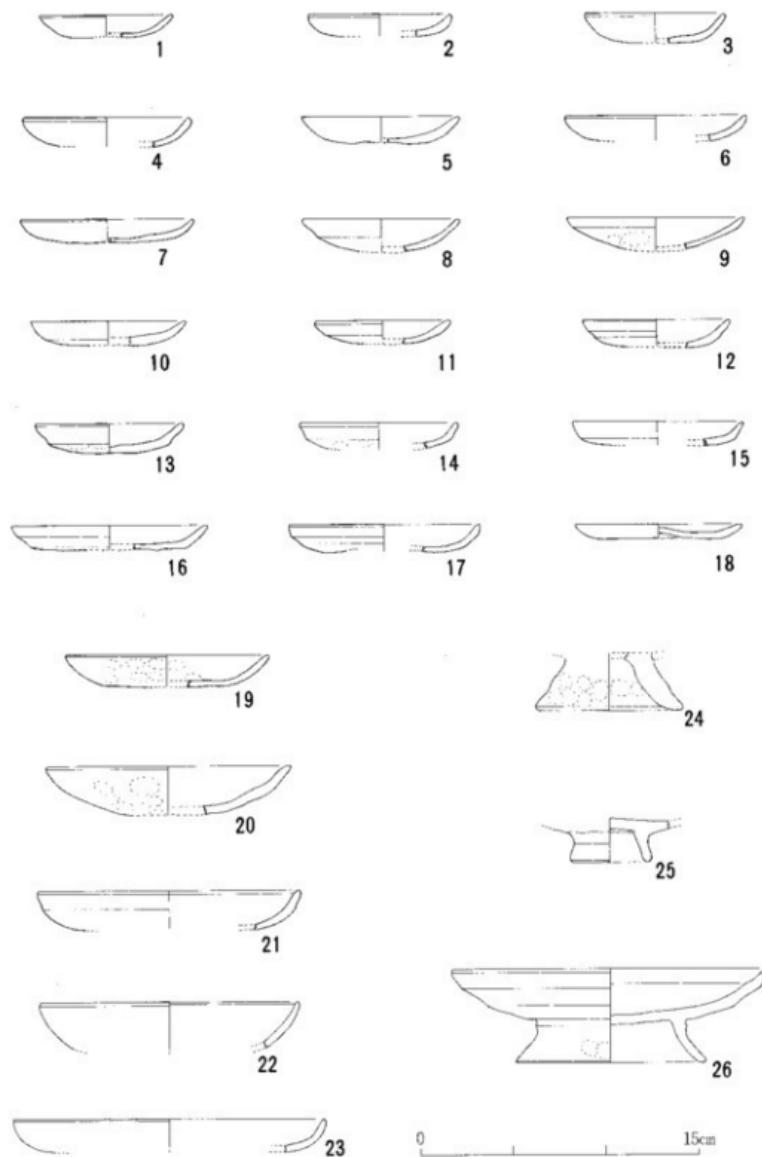
1は内傾する端部に段を有するもので、器壁は厚くつくられる。1～6は比較的短かく、内傾する口縁部を有するものである。2・3は鈎部がやや上向きにつけられる。口縁部の径は比較的小さい。4はやや下がり気味の短い鈎部を有するものである。体部外面に脚部の一部を残す。5・6は比較的水平方向に鈎部が付けられるものである。5は内面がハケ目調整される。7は口縁部外面がヨコナデされるため、段を有するものである。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、端部は直立しておわる。鈎は水平方向に付けられ、端部でやや上方に屈曲する。内面はハケ目調整が施される。8は内傾する短かい口縁部と、やや上向きの短かい鈎を有する。体部には3本の脚が貼り付けられる。底部は欠損しており、形態は不明である。

### 土師質土器・陶器（第27図1～7）

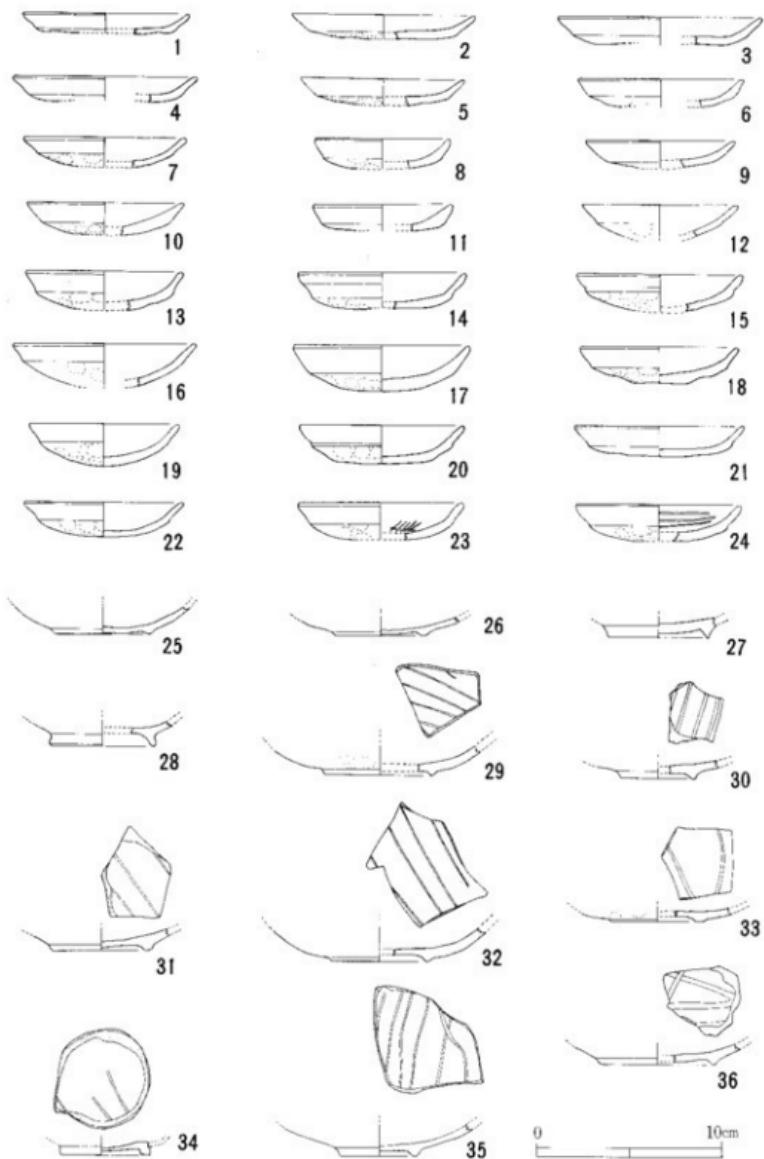
1～3は、土鍋である。口縁部は大きく外反して立ち上がる。口縁端部は平坦なもの1・3と、凹状になるもの2に分けられる。内面は3点共に、細いハケ目調整が施される。3は外面体部にやや粗いハケ目を残す。4は上師質の甌と考えられる。口縁部外面にヨコナデ調整、内外は粗雑なハケ調整を施す。口縁端部は凹状を呈する。5は上師質の火合の底部と考えられる。平坦な底部から肥厚気味の体部が斜め上方に延びる。6は上師質の拙鉢である。体部は内窓気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部で内傾する。片口の鉢で、内面に数条単位のカキ目が施される。7は備前焼の拙鉢で斜め上方にはばまっすぐ立ち上がる体部に幅の広い口縁部が内傾して続く。体部内面に8本単位のカキ目を施す。カキ目の長さは不統一である。

### 須恵質鉢（第28図1～13）

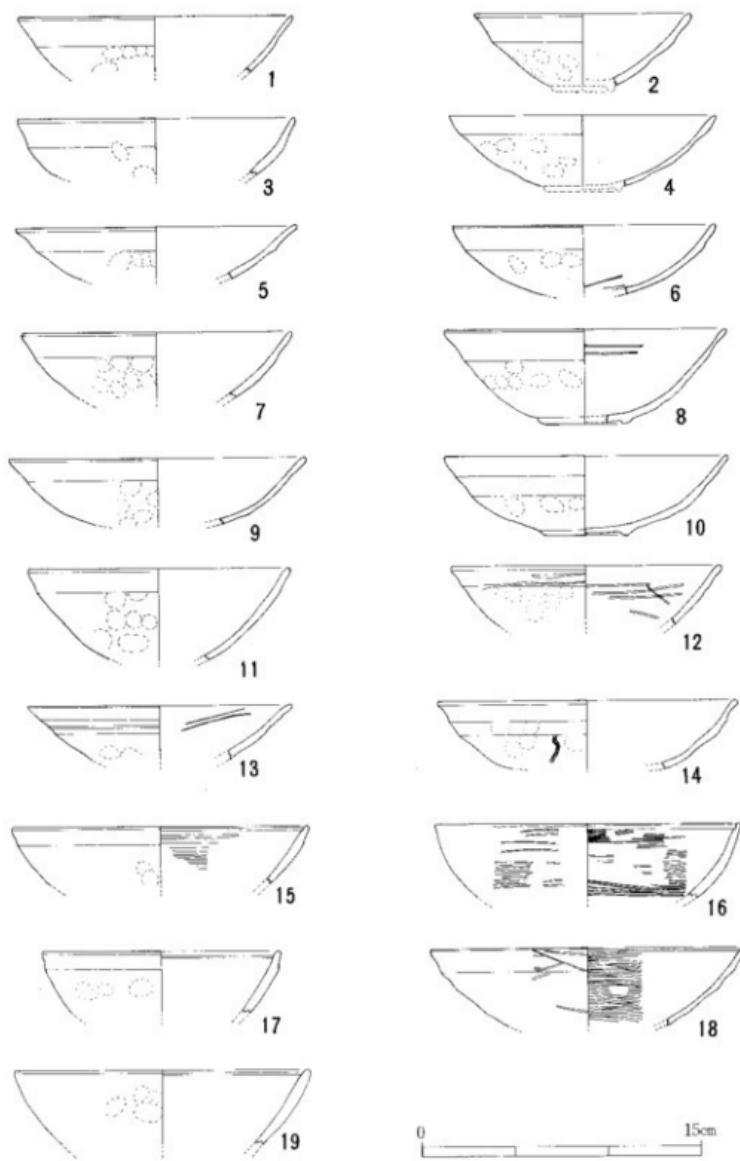
魚住古窯の製品と考えられる。成形は細上巻き上げによるものと考えられ、内外面はナデ調整が施される。1は他の遺物と異なる形態を呈する。体部は内窓気味に立ち上がった後に角度を変えて外反し、再び内窓して口縁部に続く。口縁部は上下に拡張させ端部を凹状にする。2～8は口縁部を上下に拡張させるもので端部に面を有する。3は端部に2条の沈線が施される。9～11は口縁部を肥厚気味にするもので、端部は凹状を呈する。12・13は平坦な底部から斜め上方へ延びる体部へと続くものである。底部外面に糸切り痕を残す。



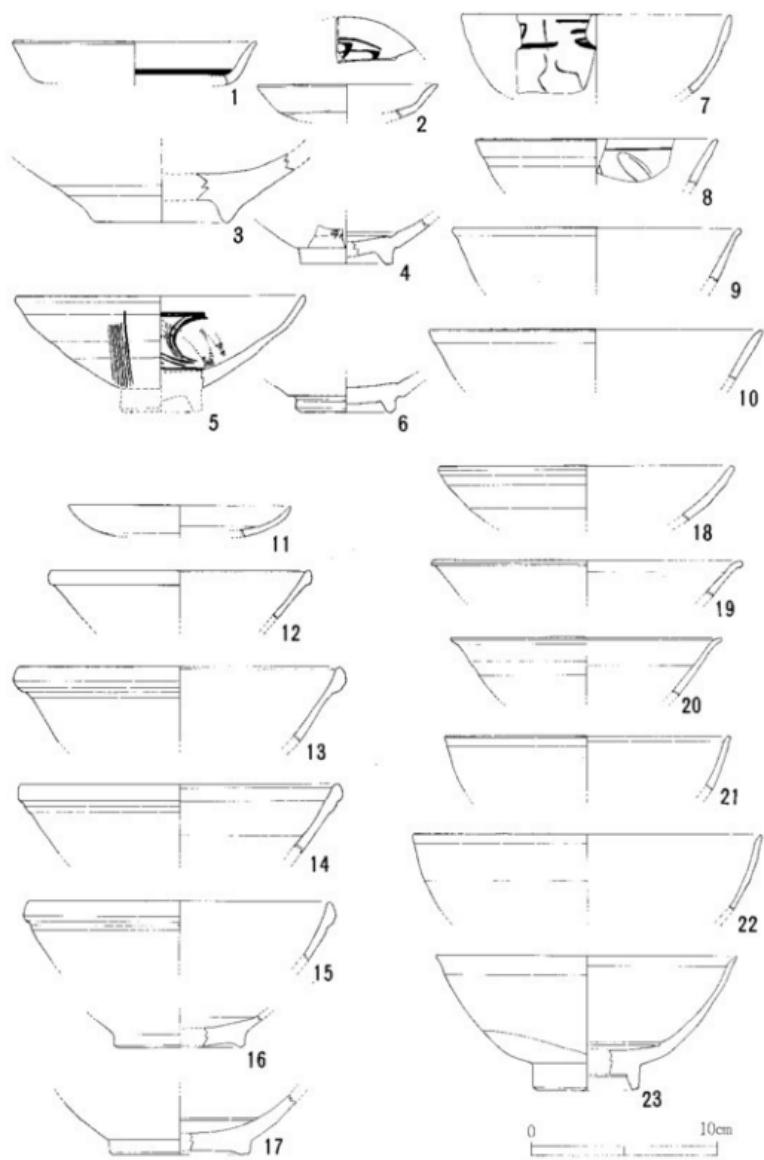
第22図 土師質皿 実測図



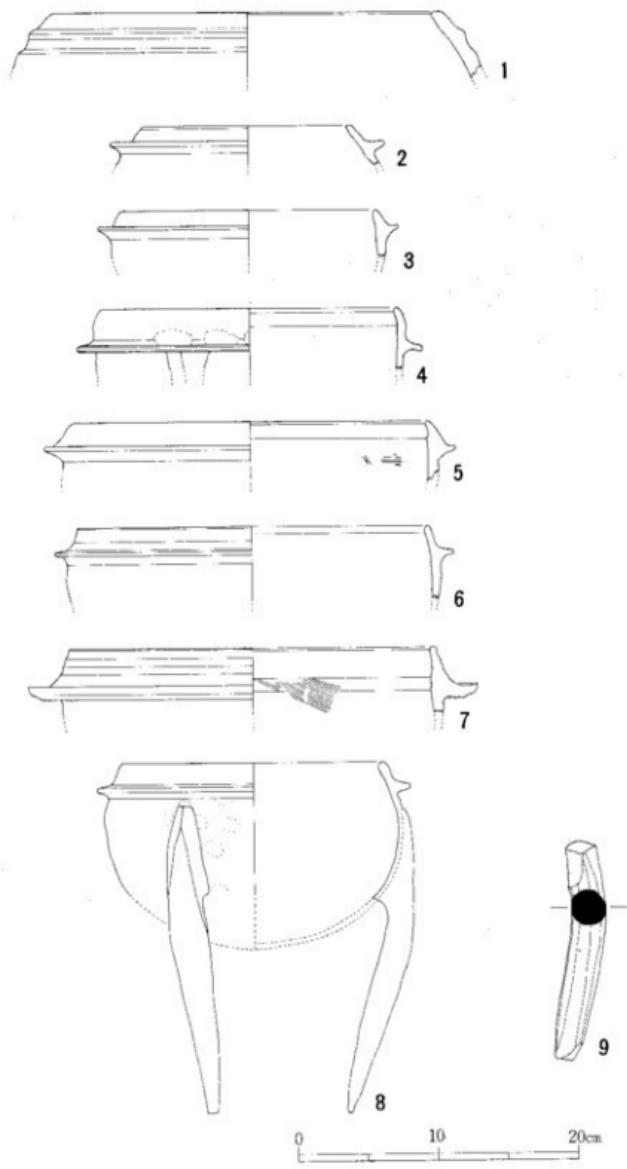
第23図 瓦器皿・瓦器挽 実測図



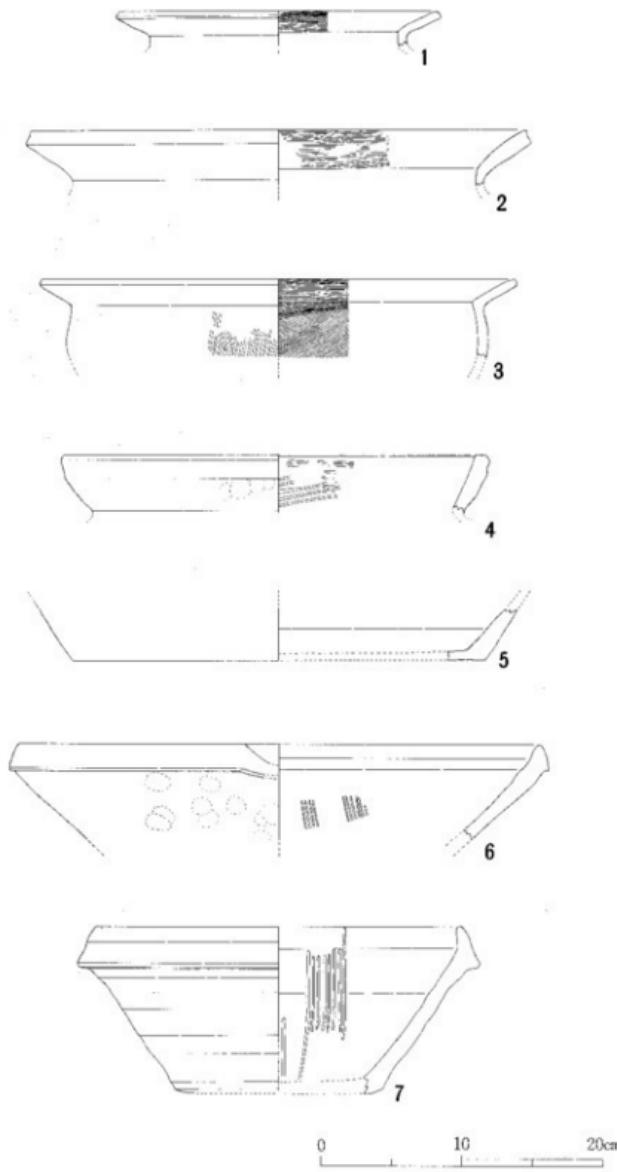
第24図 瓦器碗 実測図



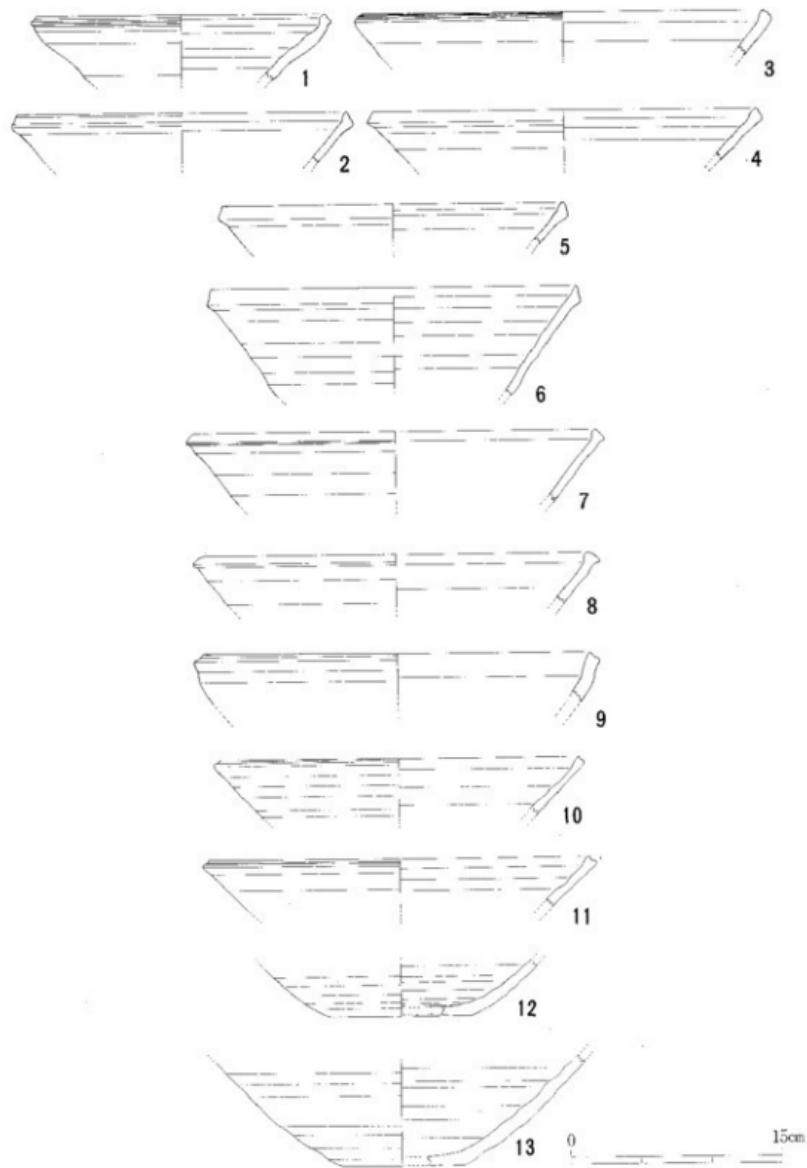
第25図 磁器 実測図



第26図 羽釜形土器 実測図



第27図 土師質土器・陶器 実測図



第28図 須恵質鉢 実測図

### 3 第2調査区西

調査区北西端の最も高所に位置する地区である。調査の結果、上下二面の遺構面を検出した。

#### 基本土層

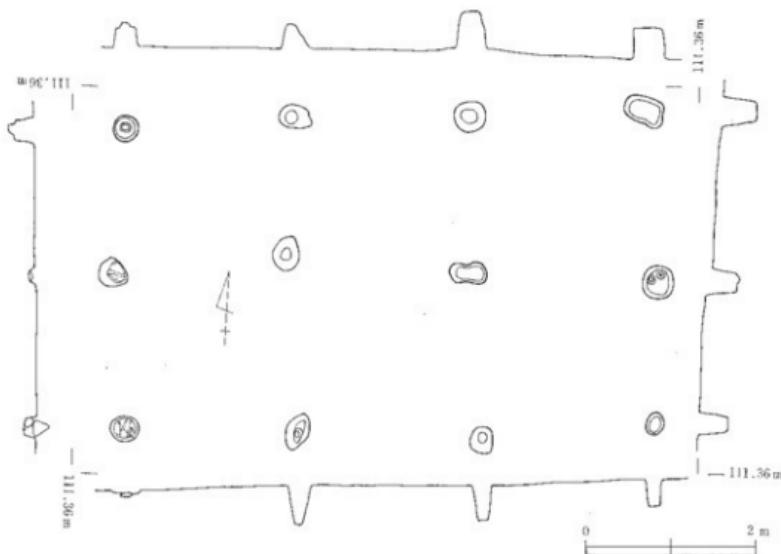
最終遺構面（地山）の南半部は緩い傾斜面となるため、傾斜面を埋め土で平坦に整地した面に、新たに遺構を残す。したがって傾斜面より北側は、地山からのみ遺構が検出され、傾斜面より南側は埋め上の土面と、地山の2面に遺構が残されていた。埋め上面までの基本的な層序は耕土、床土、黄褐色砂質土層、淡灰茶色砂質土層で、ほぼ平行に堆積している。斜面の埋め土は斜面にそって幾層にも分けて埋められている。埋め土の最大幅は、南端で約2mを計る。埋め土内から、土器類・瓦類・滑石製品等が多量に出上した。

#### (1) 遺構

上下2面の遺構面から検出した遺構は、掘立柱の建物跡1棟、土塹10基、溝状遺構6本、井戸状遺構1基と多数のピット群である。

##### 掘立柱建物跡 III

南北2間×東西3間の掘立柱の建物跡である。主軸方向はN-10°-Wである。南北約38m、



第29図 第2調査区西 掘立柱建物跡III 平面図

東西約6.3mを計り、面積は約23.9m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘方はほぼ円形で径約30cmである。深さは30cm前後のものが大半を占めるが、浅い掘方には根石を入れているものもある。立地面は北から南へのゆるい傾斜面である。

#### 土塙 1

埋め土上面で検出した土塙である。長径約3.5m、幅約1.5mの楕円形の形状を呈する。深さは最深部で約20cmを計る。内部から径20cm前後の礫を数点検出した。

#### 土塙 2

埋め土上面で検出した土塙である。径約1.3mの円形の形状を呈し、深さは最深部で約0.8mを計る。内部から径20cm前後の礫3点と、土師質の皿が多量に出土した。礫は土塙内部の底面よりやや上部で検出され、土師質皿は、碟よりもさらに上部から出土した。皿のほとんどが同じ形態でかつ多量に出土する事から皿は意図的に入れられたものと推量出来る。

#### 土塙 3

調査区の東端で検出した地山面の土塙で、東側は消滅している。現存部で長さ約0.8m、深さ約20cmを計る。出土遺物は土師質の皿数点がある。

#### 土塙 4

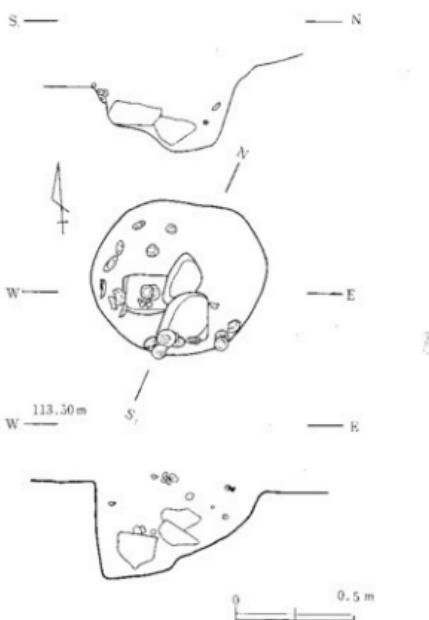
地山面で検出した土塙である。長径約1.7m、短径約1mの楕円形の形状を呈する。深さは約15cmと浅く、底はほぼ平坦である。

#### 土塙 5

地山面で検出した土塙である。一辺約1mの長方形の形状を呈する。深さは約15cmで、底はほぼ平坦である。肩の一部をピットに切られる。

#### 土塙 6

地山面で検出した土塙である。長径約1.6m、短径約1.3mのややくずれた楕円形の形状を呈する。深さは約10cmで、底は平坦である。数個のピットに切られる。



第30図 土塙2 平面図・断面図

### 土塙 7

地山面で検出した土塙である。一辺約1.0mの方形の形状を呈する。底は南側でやや深く、最深部で約15cmを計る。溝状遺構4を切る。

### 土塙 8

地山面で検出した土塙である。長径約1.1m、短径約0.6mの楕円形の形状を呈する。深さは約10cmを計り、底は平坦である。底面から径約10cm、深さ約15cmのピットを検出した。

### 土塙 9

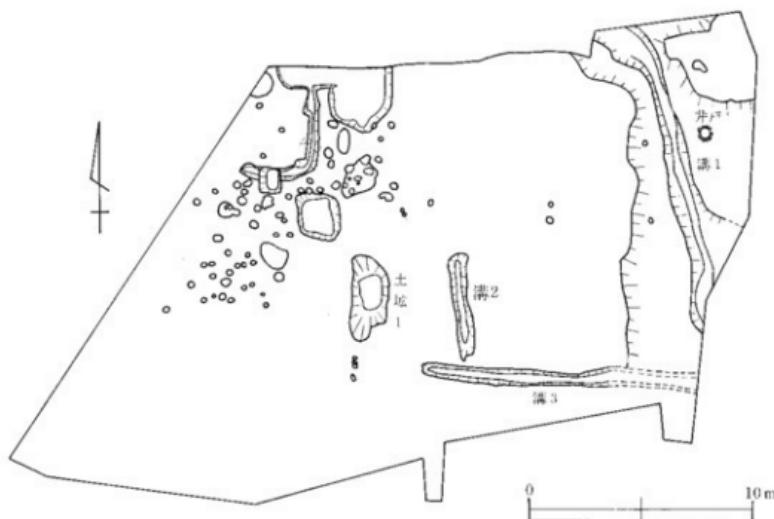
地山面で検出した土塙である。西端部に位置するため、東側のみを掘り下げた。検出した部分は長さ1.2m、深さ20cmを計る。出土遺物は土師質皿の小片がある。

### 土塙 10

地山で検出した土塙である。長径約2.6mのややくずれた円形の形状を呈する。南側で深さ約10cmを計るが、北側では徐々に浅くなる。出土遺物は、土師質の皿数点がある。

### 溝状遺構 1

北側では地山面、南側では埋め上上面で検出した。西から東へ続いた後、方向を変え、南へ下って行く溝状の遺構である。調査範囲内で検出した部分の全長約29m、最大幅約2.8m、深さは最深部で約30cmを計る。出土遺物は備前焼抹鉢・土師質皿・瓦器楌等がある。



第31図 第2調査区西 上面遺構平面図

#### 溝状遺構 2

北から南へ続く帯状の形を呈する遺構で埋め土上面で検出した。全長約5.0m、幅約0.8m、深さは最深部で約20cmを計る。

#### 溝状遺構 3

西から東へ続く溝状遺構で埋め土上面で検出した。全長約8.5m、幅約0.8m、深さは最深部で約15cmを計る。東側で徐々に浅くなり消滅する。

#### 溝状遺構 4

西から東へ続いた後、「く」の字状に方向を変え北へ続く溝状の遺構で、地山上面で検出した。全長7m、幅約0.7m~1.2m、深さは最深部で約15cmを計る。北側で段状の落ち込みに続き消滅する。

#### 溝状遺構 5

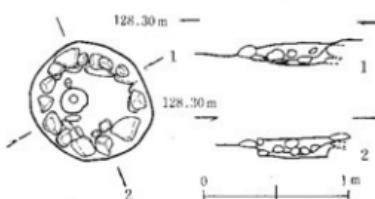
北から南へ続いた後、「く」の字状に屈曲し、段状の落ち込みへ続き消滅する遺構で、緩い傾斜面に位置する地山面で検出した溝状遺構である。全長約4.5m、幅約50cm前後、深さは最深部で約20cmを計る。

#### 溝状遺構 6

調査区の南端を西から東へ蛇行しながら続く溝状の遺構で、地山面で検出した。後世の削平で、西・東両端を欠くが、第2区東の溝状遺構3が、この遺構の続きと考えられる。検出部の全長は、第2区東のものを含めて、約35mである。幅、深さは共に一定ではなく、幅は約1m~2m、深さは約10cm~50cmである。流れの方向は地形から見て、西から東と考えられる。内部の2ヶ所で礫群を検出した。出土遺物は土師質皿、瓦器碗等がある。

#### 井戸状遺構

径約45cmの円形の形を呈する。上部は削平されており、深さは約15cmを計る。径10cm以下の自然石を1段、もしくは2段めぐらせる。内部から土師質の皿1点が出土した。



第32図 井戸状遺構 平面図・断面図

## (2) 出土遺物

### 土塙・ピット・出土遺物（第33図1～36、第34図1～19）

第33図1～23は上塙2から出土した遺物で、すべて土師質の皿である。1～21はヘソ皿である。内側へ突出する底部から斜め上方へ外反気味に立ち上がる体部を有する。法量、胎土、焼成、色調に大差がなく、ほとんど同じ形態を呈するが、口縁部端部に若干の差違が認められる。外反気味にするもの（1・2）、比較的まっすぐに収めるもの（3～7）、直立気味に内傾させ、内面に段を有するもの（8～21）がある。22・23は外反気味に立ち上がる体部にはほぼ直立する口縁部が統くものである。23はほぼ平坦な底部を有する。胎土、焼成、色調は1～21と共通する。

第33図24～34は土塙10からの出土遺物で、すべて土師質の皿である。24は手づくねの皿で内外面共に顕著に指頭圧痕を残す。25～31はヘソ皿、もしくは、やや上がり気味の底部を有するものである。27は外面に軽いヨコナデが施される。32・33は平底の皿と考えられる。34は緩やかに立ち上がる体部から、屈曲して肥厚する口縁部が統く。35・36は土塙9から出土した土師質の皿である。35はやや外反しながら斜め上方に統く体部を有する。口縁部外面は軽いヨコナデ調整が施される。36は上げ底の底部を有する。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部は直立気味にする。

第34図1～5はピット110からの出土遺物で、すべて土師質の皿である。1は内弯気味に斜め上方へまっすぐに立ち上がる体部を有する。2～4は短く外反して立ち上がる口縁部を有する。5は内弯気味に斜め上方に緩やかに立ち上がる。口縁部外面は2段にヨコナデされる。6～8は土塙3からの出土した土師質の皿である。6は内弯しながら立ち上がる体部を有する。口縁部は直立気味になり、端部は丸く収める。7は緩やかに斜め上方に立ち上がる体部を有し、口縁部はヨコナデ調整が施され、外反する。8はほぼまっすぐに斜め上方に立ち上がる。11～19は各ピット内から出土した遺物である。9は土師質の皿である。体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ調整が施される。10は瓦器椀の底部である。不定形で低い高台が貼り付けられる。体部下間に指頭圧痕を残す。11～15は土師質の皿である。11・12は平坦な底部をもつもので、口縁部を外反させる。13は屈曲する体部を有する。15は底部がやや上げ底になるとされるものである。16～19は瓦器椀である。16は内弯しながら斜め上方に立ち上がる体部を有する。口縁部外面はヨコナデ調整される。体部外面には指頭圧痕を残す。17は細く低い高台を有する。内弯しながら立ち上がる体部外面には指頭圧痕を残す。18は不定形な貼り付け高台から斜め上方へ延びる体部がつく。口縁部外面はヨコナデ調整される。内面の見込みの暗文は平行線状、体部には粗い暗文が数条施される。器高指数は25.0を計る。

### 土師質皿、その他の土師質土器（第34図22・21、第35図1～45、第36図1～9）

第34図20は器種不明の土師質の上器片である。外面と考えられる方から内面へ向って、径1cm弱の小孔があけられる。外面には指頭圧痕を残す。第34図21は脚台付皿の脚部である。脚部は外下方へほぼまっすぐに延びる。内面の調整はヨコナデ、外面は風化のため不明である。第35図1～28は口径10cm以下の皿である。1～12は上げ底、もしくは上げ底気味のものである。3・4は大きく外上方へひろがる体部をもつ。10は内弯気味に斜め上方へ立ち上がる体部をもつ。口縁端部には沈線が施される。13～28は比較的平坦な底をもつものである。13は緩やかに外上方へ立ち上がる体部を有する。19は短かく立ち上がる体部をもち口縁部を直立させる。23は器高が著るしく低いものである。口縁部を外反させ、端部は尖り気味にする。25は緩やかに外反して立ち上がる体部を有する。口縁部外面はヨコナデ調整が施される。28はやや丸味気味の底部から、内弯気味の体部が斜め上方へ延びる。口縁部は強いヨコナデにより外反する。端部に沈線が施される。29～30は口径10cm前後の皿で比較的浅いものである。ほぼ平坦な底部から短かく斜め上方へ立ち上がる体部をもつ。30～33は端部を丸く収め、口縁部外面にヨコナデ調整が施される。34は端部を尖り気味にするもので、口縁部外面には2段のヨコナデが施される。35～40は口径10cm前後の皿で、比較的深い器形のものである。36は丸底の底部から内弯気味に立ち上がる体部をもち口縁部外面は入念なヨコナデ調整が施される。38は緩やかに斜め上方へ立ち上がる体部をもつ。39は口縁部を直立気味にする。体部内面に軽い段をもつ。第35図41～43、第36図1～4は口径12cm以上の皿である。41・42は外反する口縁部を有する。口縁部外面はヨコナデ調整が施される。43～45は口縁部を内傾させるものである。45は体部内面にも指頭圧痕が残る。1・2は内弯しながら立ち上がる体部を途中で屈折させてゆるやかに外反させるものである。1は底部をやや上げ底気味にする。3・4は内弯しながら斜め上方へ立ち上がる体部をもつものである。4は口縁部を内傾させる。第36図5～9は5枚重ねた状態で出土したものである。胎上、色調、焼成が共通しており、口径も14cm前後でほとんど差がない。口縁部外面はヨコナデ調整が施され、体部外面には顎唇に指頭圧痕が残される。7・8は口縁部を外反させるもので、7は底部を上げ底気味にする。

### 瓦器皿（第36図10～15）

口縁部外面をヨコナデ調整され、体部に指頭圧痕が著しく残るもので、内面の暗文も粗し施される。11・13は丸底の底部から内弯気味に立ち上がる体部を有し、口縁部は外反する。10・14は短かく立ち上がる体部をもち、口縁部を外反させる。12は平坦な底部から内弯気味に緩やかに立ち上がる体部を有する。

### 瓦器椀（第36図16～27、第37図1～18、第38図1～13、第39図1～16、第40図10～8）

実測可能なもの67点を図示した。大半は和泉型であるが例外として少量の楠葉型と、不明1点がある。第37図1～4以外はすべて和泉型である。和泉型の瓦器椀は、口縁部にヨコナデ調整が施され、体部に指頭圧痕を顯著に残す。ほとんどのものが不定形で、低い高台が貼り付けられるが、例外として第36図16～18は比較的整った細い高台を有する。暗文は風化により消えているものが含まれるため、確認出来るものについてのみ記述する。体部内面には粗い暗文が無造作に施される。外側の暗文は第5図9～11を除いては認められない。内面見込みの暗文は平行線状、もしくは鋸歯状である。全体に雑なつくりである。器高指数の計測が可能なものは30点あり、最高値は33.8、最低値は23.1を計り、ほとんどが25～30の間に含まれる。第37図1～3は楠葉型の瓦器椀である。口縁部内面には沈線が施される。1は体部内面に比較的ていねいな暗文が施される。2・3は風化のため、暗文は明瞭ではない。第37図4は口縁部内面に一束の沈線が施される。口縁部から体部にかけて3段にナデ調整が行なわれ、内面には粗雑な暗文が施される。色調は明灰色を呈し、焼成は他の瓦器椀に比べ良好で硬質である。型は判断出来ない。

### 須恵器・陶器（第41図1～5）

1は須恵器の壺の底部と考えられる。平坦な底部から斜め上方へ立ち上がる体部をもつ。2・3は杯の底部である。平坦な底部に開き気味の低い高台が付く。高台はヨコナデ調整が施される。4は陶器の破片である外側にヘラ搔きと思われる文様が施される。備前焼の窓の可能性がある。5は灰釉陶器である。内窓気味に立ち上がる体部から外反する口縁部に続く。端部は丸く収められる。内面に灰緑色の釉を施す。

### 磁器（第41図6～17・第42図1～13）

第41図6～17は白磁碗である。6～9は玉縁状の口縁部を有するものである。8は口縁部外面に浅い沈線が施される。9は口縁部外面の一部に釉が厚く施される。8～17は底部である。低く、しっかりとした高台を有するもの11～15、やや高い高台のもの16、細く高い高台のもの17がある。10～12は内面の底部と体部の境に沈線が施される。

第42図1・2は伊万里焼の碗である。1は内窓気味に立ち上がり、口縁部は直立して端部を尖り気味にする。1・2共に外面に網目文が描かれる。第42図3は青磁の皿である。花びら状の口縁部を有する。底部には高台が付くものと考えられる。4～9は龍泉窯系の青磁碗である。4～6は口縁部外面に蓮弁の文様を施すものである。体部は内窓気味に立ち上がり、口縁部を外反させる（4・6）内窓気味にする（5）がある。7～9は底部である。7は高台を欠損す

る。8は比較的しっかりした高台、9は細く高い高台を有する。共に内面には草花文のスタンプが押される。第42図10は梅瓶と呼ばれる青磁の破片である。外面に文様が施されるが小片のため何の文様かは不明である。第42図11は口縁部を「く」の字形に外反させる。口縁部以下は欠損するが、肩部に4ヶ所の耳を貼り付ける四耳壺と考えられる。第42図12は白磁の皿である。高台は細く低いものである。体部は緩やかに立ちあがる。第42図13は龍泉窯系の盤である。内湾気味に緩やかに立ち上がる体部から外方へ屈折する口縁部が続き、端部は上方へ肥厚させる。内面体部には菊花状の太い笠彫りを施す。

#### 須恵質鉢（第43図1～10、第44図1～9）

第43図7を除いて魚住古窯のものと考えられる。第43図1・2は口縁部を肥厚させて上方へ突出させるもので、口縁部は凹状を呈する。3は比較的小型の鉢で口縁部はやや肥厚するだけのものである。端部は平坦である。4は内湾気味に立ち上がる体部を口縁部で外反させるものである。5・6は口縁部を肥厚させ、端部は平坦につくられるものである。7は須恵質の擂鉢である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平坦に収められる。内面にはカキ目が施される。焼成は甘く、軟質である。備前焼の焼成の甘いものかもしれない。8～10は底部である。ほぼ平坦で、器壁も比較的厚くつくられる。第44図1～6は口縁部が比厚して上下に拡張するものである。2はほぼまっすぐに斜め上方へ延びる体部を有する。6～8は内湾して立ち上がる体部から肥厚して内傾する口縁部に続くものである。9は片口鉢で、底部外面には糸切り痕を残す。

#### 羽釜形土器（第45図1～9）

1・4は土師質、他は瓦質である。1は内傾する口縁部外面に、ていねいなヨコナテ調整を施す。鈎は短くやや上がり気味に付けられる。2は内傾する口縁部に2個以上の孔があけられる。口縁部外面はヨコナテ調整が施される。鈎はほぼ水平に付けられる。3・4は内傾する口縁部外面にヨコナテによる段を有する。3はやや幅の広い鈎を下方気味に貼り付ける。内面はハケメ調整が施される。4は水平に延びる鈎の端部を凹状にする。内面のハケ目をナテで消している。5はほぼ直立気味に立ち上がる口縁部を有する。鈎は水平に付けられ、端部をやや上向きにする。内面にはハケ目調整が施される。6は短く立ち上がる口縁部をもち、端部は平坦に仕上げられる。鈎は短かく、下がり気味に付けられる。7は外反気味に直立する短い口縁部を有し、端部を比厚気味にする。鈎はやや上向きに貼りつけられる。8はやや外方へ開き気味に立ち上がる口縁部をもち、端部を凹状に仕上げる。体部は斜め上方へまっすぐに延びる。内面はていねいなハケ目調整が施される。9は「く」の字形に外反する口縁部を有し、体部は球形をなす。底部は欠損するが、丸く終わると考えられる。鈎は短く横方向に付けられ、端部をや

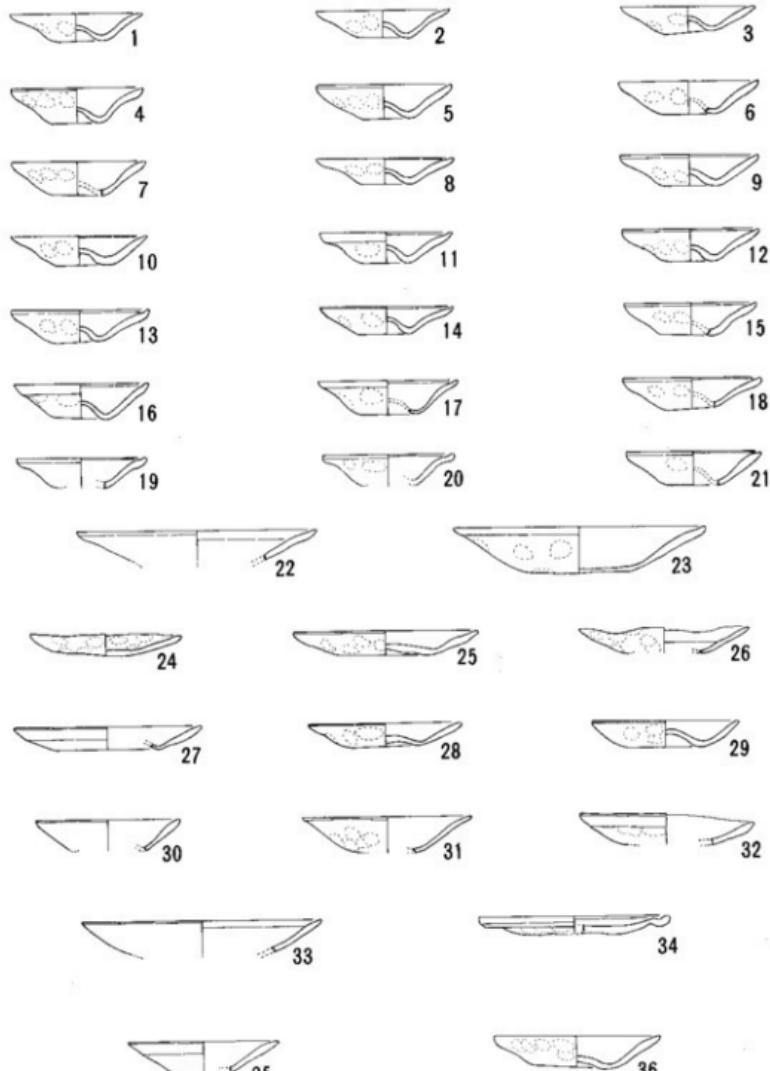
や上向きにする。口縁部内外面はヨコナデ調整され、体部内面には太い暗文が施される。

#### 陶器、土師質土器、滑石製品（第46図1～7、第47図1～7）

第46図1～4は備前焼の擂鉢である。1は片口の口縁部をもつ。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。体部内面には8本単位のカキ目が施される。粘土巻き上げ成形によつてつくられる。2・3は口縁部を上下に拡張させるものである。2は口縁端部を丸く収め、3は直立気味にし尖がらせる。共に、内面にカキ目が施される。4は底部と体部の境を肥厚させる。内面にはカキ目が施される。

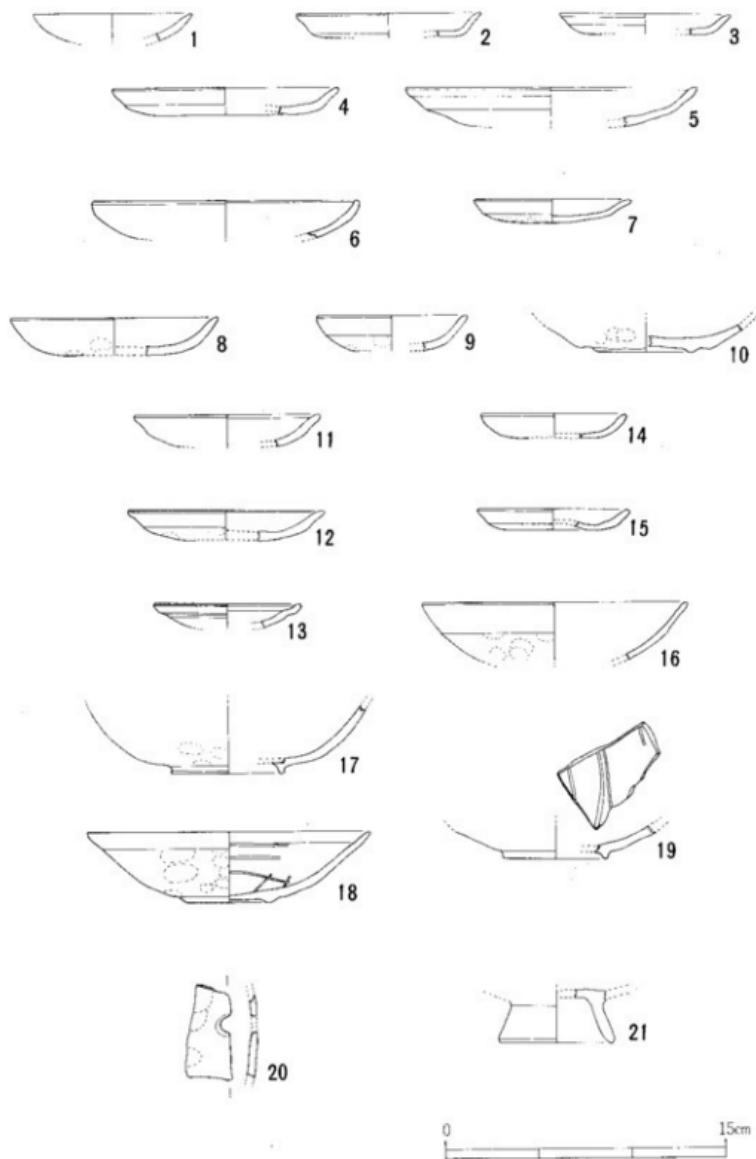
第46図5は、土師質の甕の口縁部と考えられる。口縁端部は凹状に仕上げられる。内面はハケメ調整される。6・7は土鍋である。いずれも下半部を欠損する。内弯気味に立ち上がる体部から、折曲させて外反する口縁部が続き、端部は凹状になる。器壁は比較的薄い。共に、体部内面はハケ目調整が施され、7は外面の一部にもハケ目が認められる。第47図1は常滑焼の甕である。口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を幅広にする。口縁部から体部にかけて、細かいタタキ目が施される。2も1と同様に「く」の字形に外反する口縁部を有する。体部外面には細かいタタキを施す。焼成が甘く、全体に成形が雑であり、一見土師質のようにも見える。3は土師質の甕の口縁部である。やや外反気味に立ち上がり、端部をわずかに内傾させる。外面には顎著に指頭圧痕を残す。4は陶質の鉢の底部と考えられる。薄くやや上げ底気味の底部から、肥厚して立ち上がる体部をもつ。焼成は軟質であり、土師質のようにもみえる。

第47図5は火舎の脚部である。脚高5.3cmを計る。6・7は滑石製品である。6は板状のもので、残存長9.9cmを計るが、本来の大きさは不明である。径1.2cmの円形の孔を両面から穿っている。7は滑石製の石鏸に二次的な加工を施し、用途を変えたものである。内傾する口縁部外面に細かいノミ状のもので薄く削り、体部と口縁部の間に軽い段をもたせる。鏸は削り取られ、削り取られた面には無数のひっかき傷を残す。体部は内弯気味に立ち上がり、鏸部へと続くものである。体部内面には、径2mm～3mm程度を計る円形の刺突痕が多数残される。二次的な加工痕と考えられるが意図は不明である。底部は欠損するが、割れ口はていねいに研磨される。

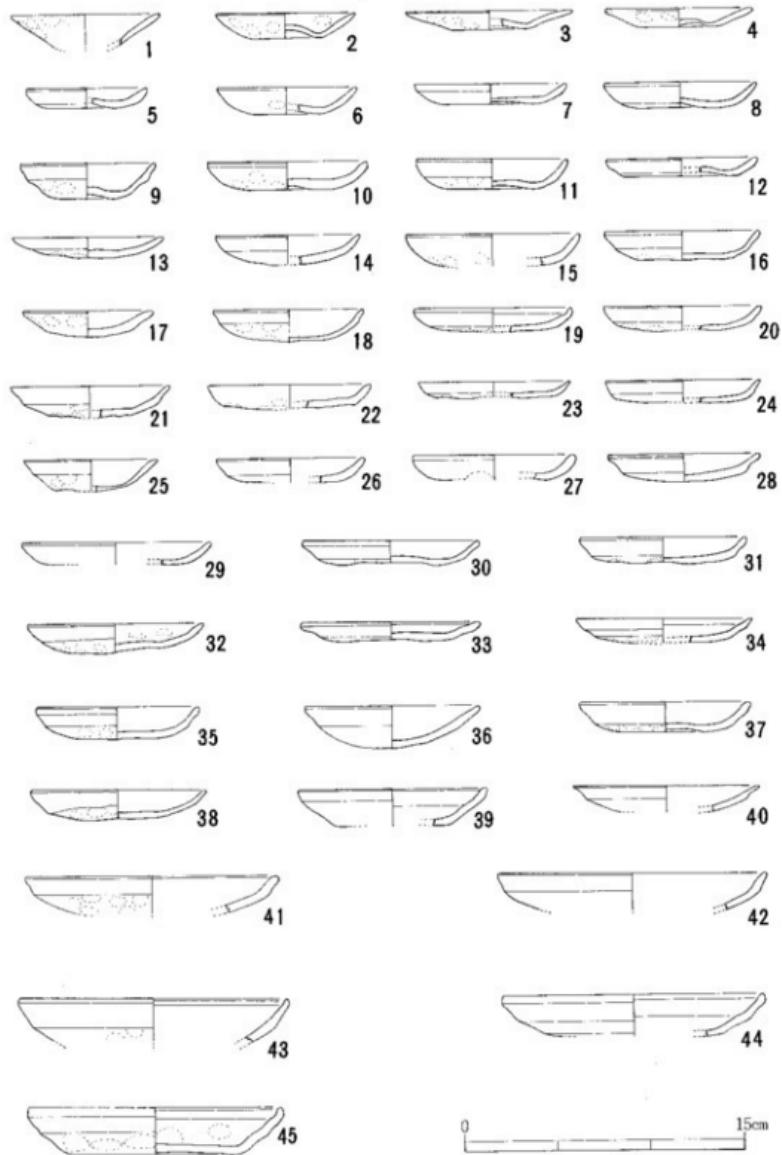


0 10cm

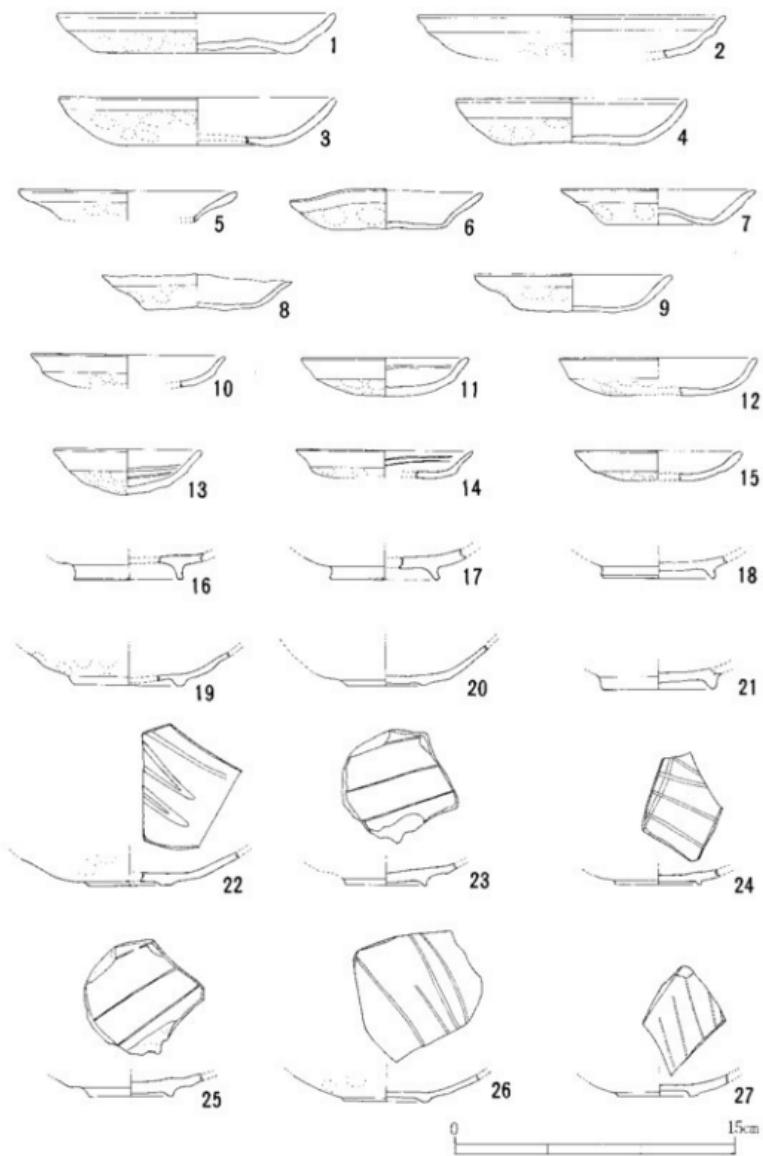
第33図 土器質皿 実測図



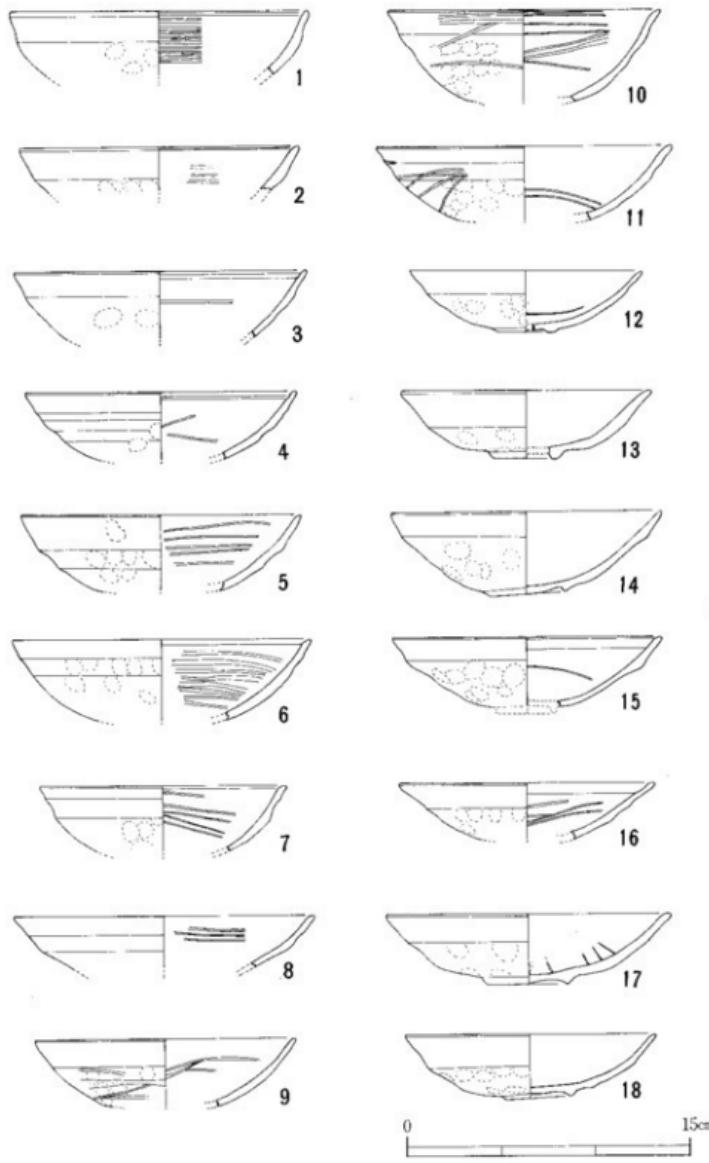
第34図 土師質皿・瓦器椀 実測図



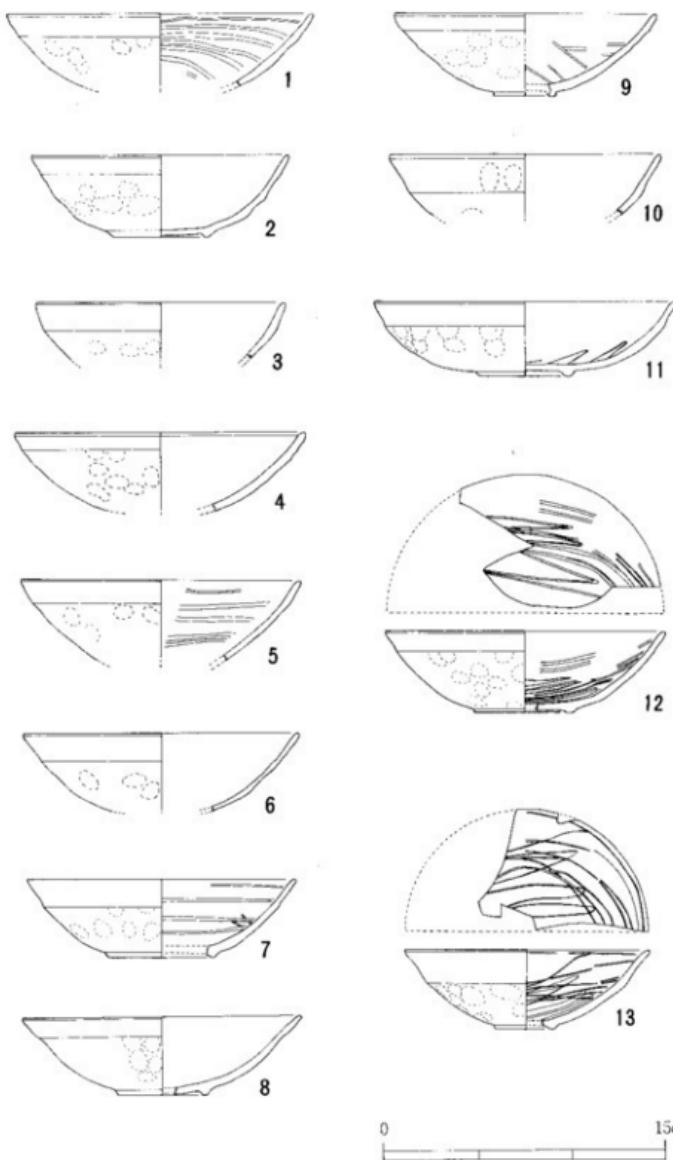
第35図 土師質皿 実測図



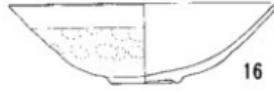
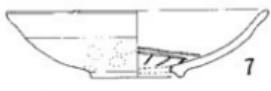
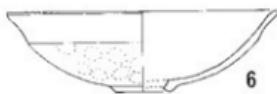
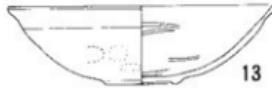
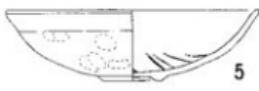
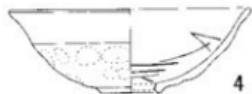
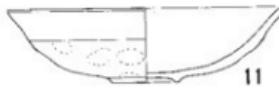
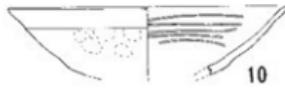
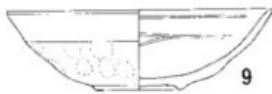
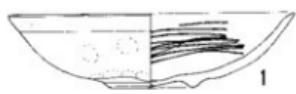
第36図 土師質皿・瓦器皿・瓦器椀 実測図



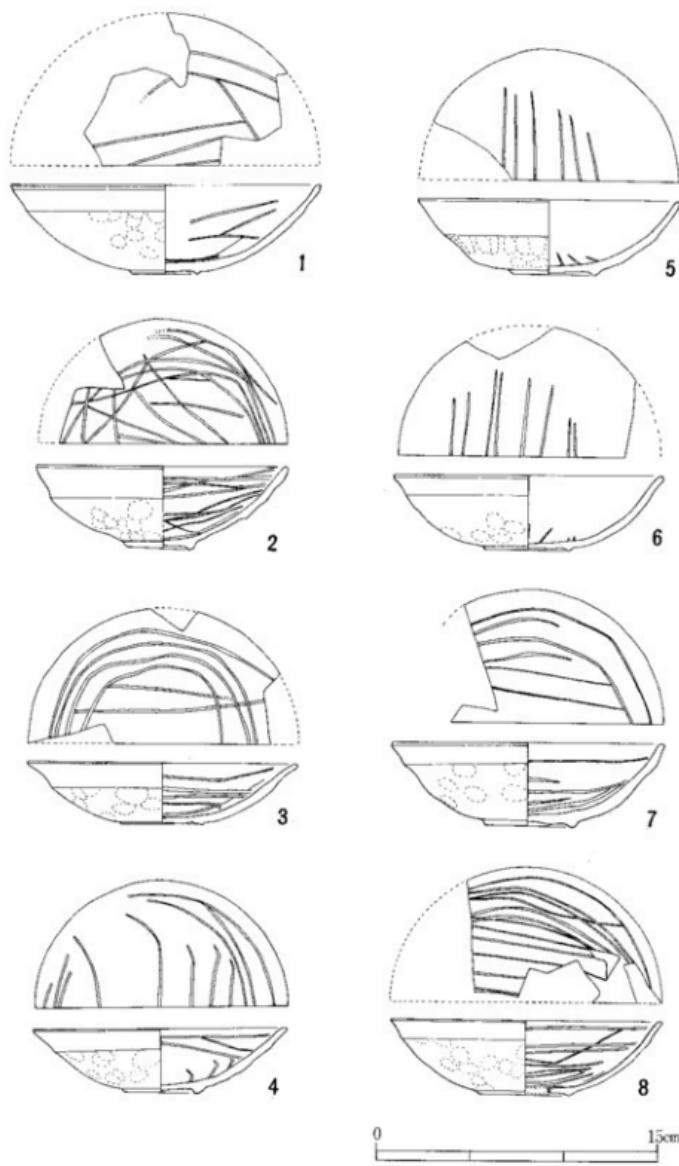
第37図 瓦器椀 実測図



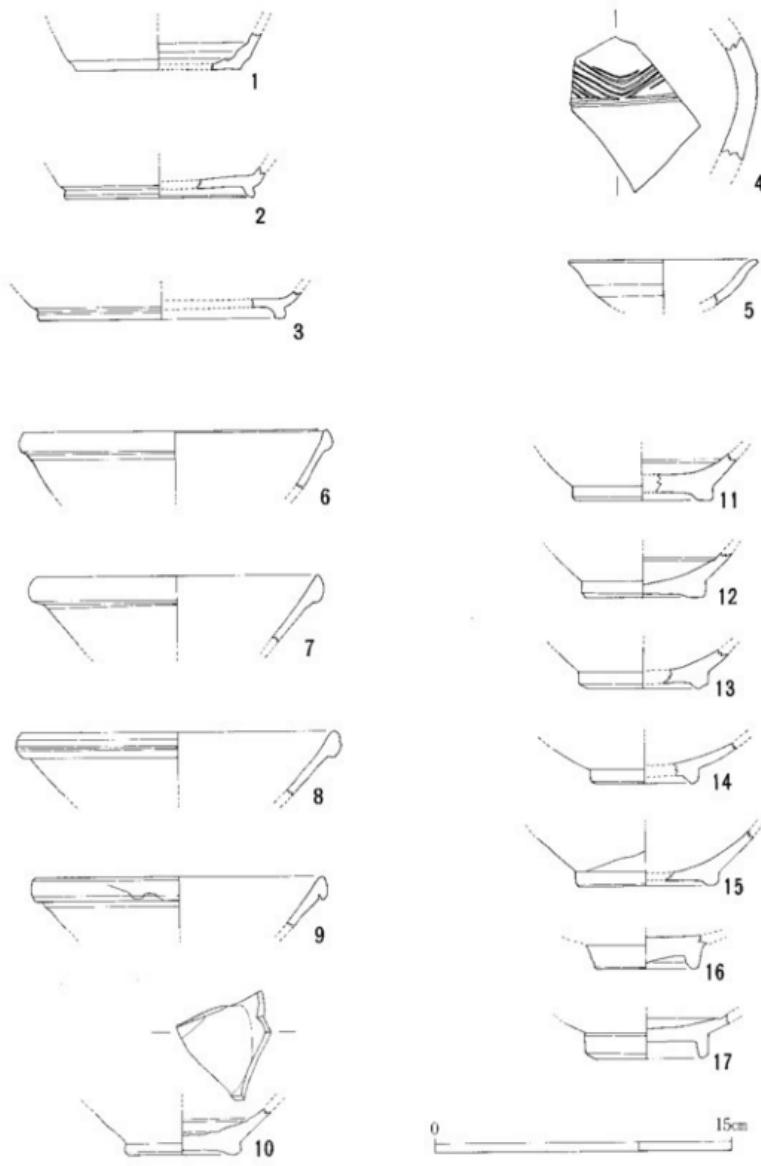
第38図 瓦器 梱 実測図



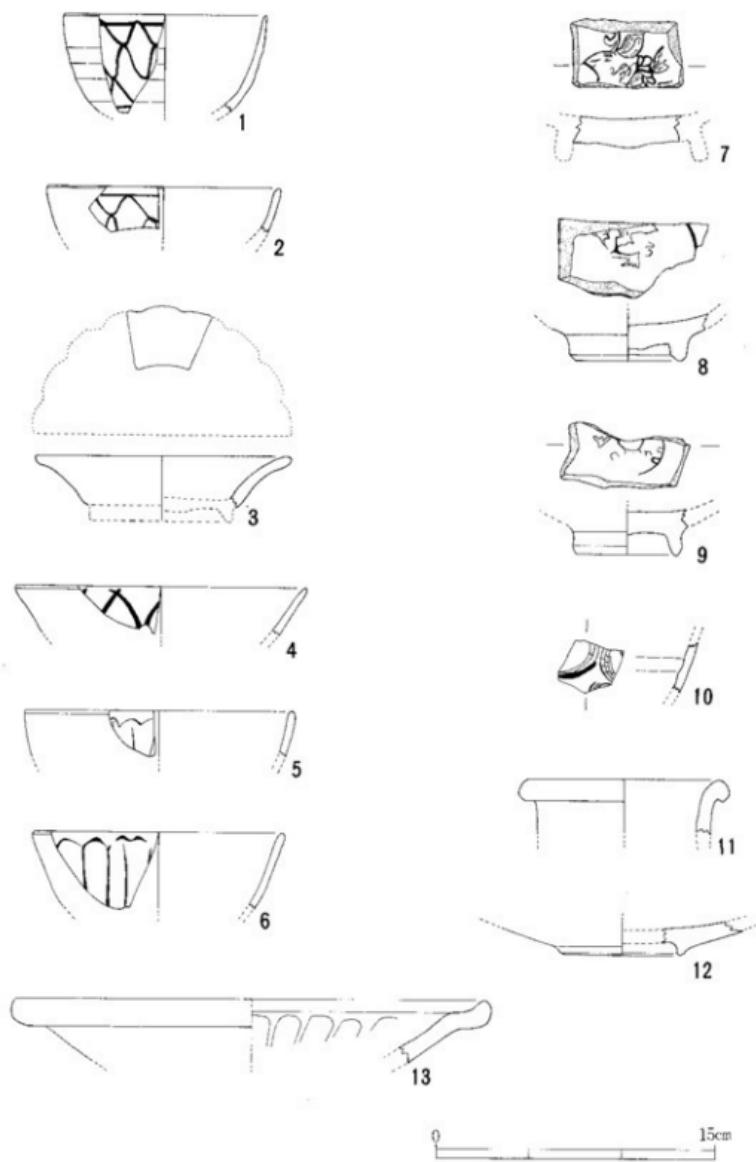
第39図 瓦器椀 実測図



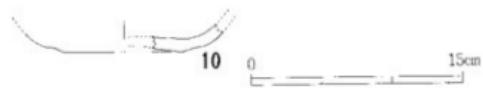
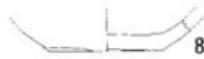
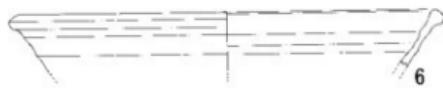
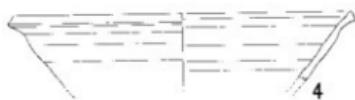
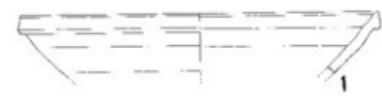
第40図 瓦器片 実測図



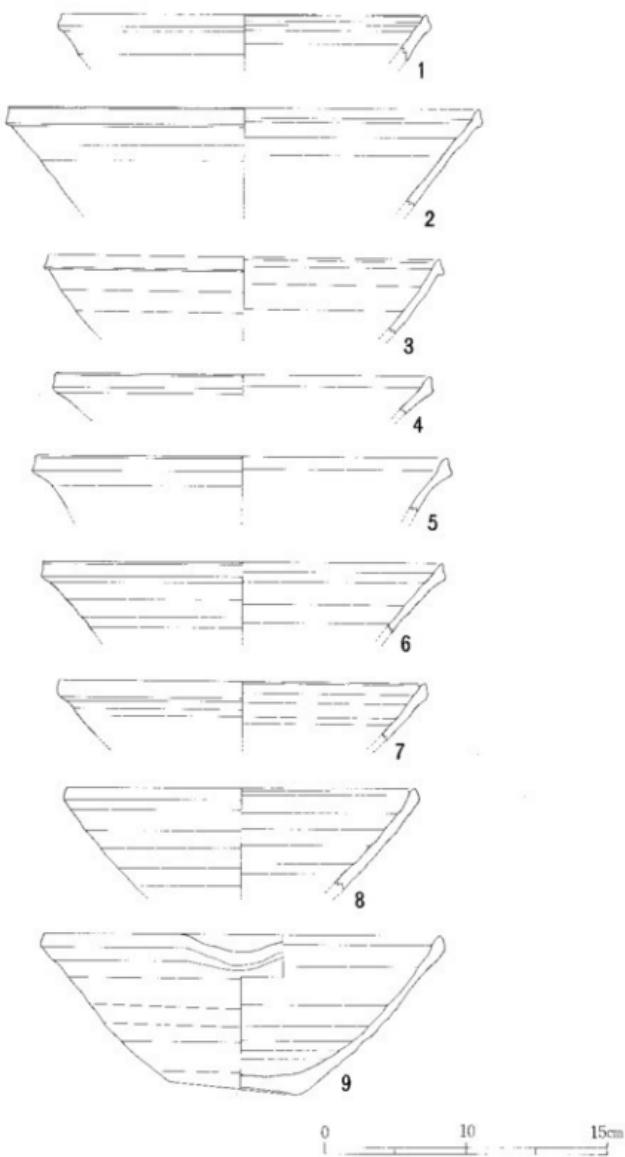
第41図 須恵器・陶器・磁器 実測図



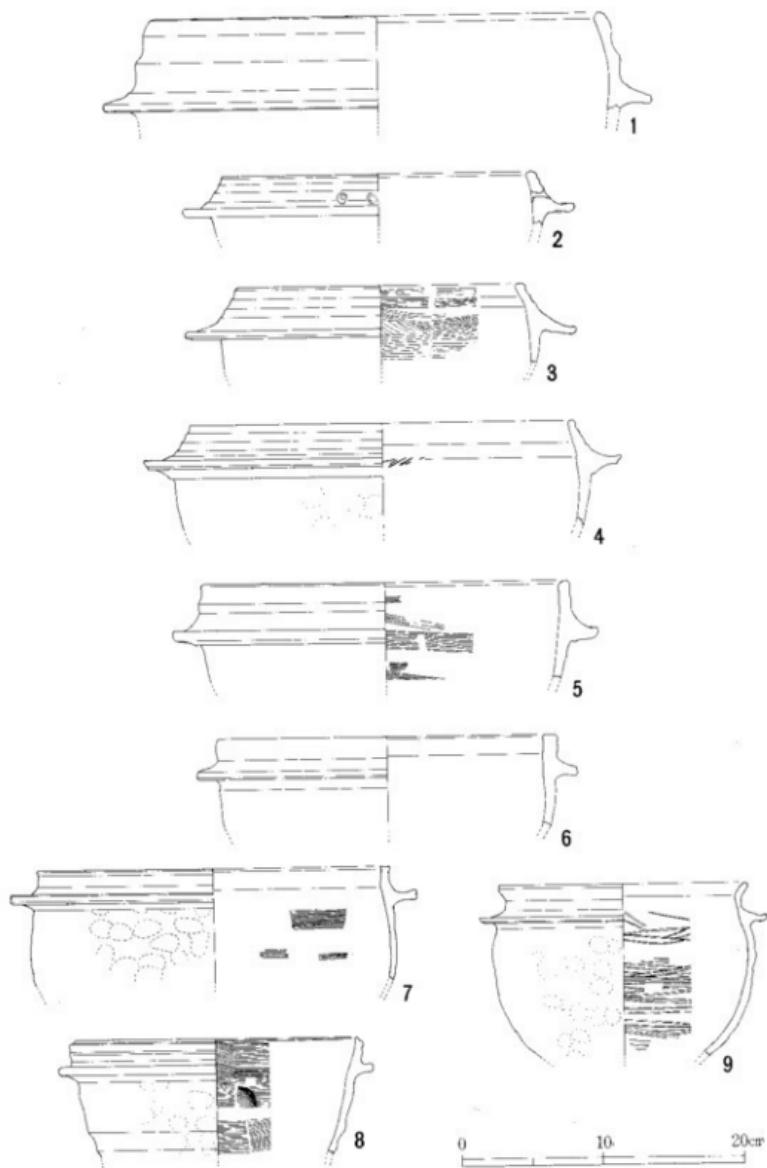
第42図 磁器 実測図



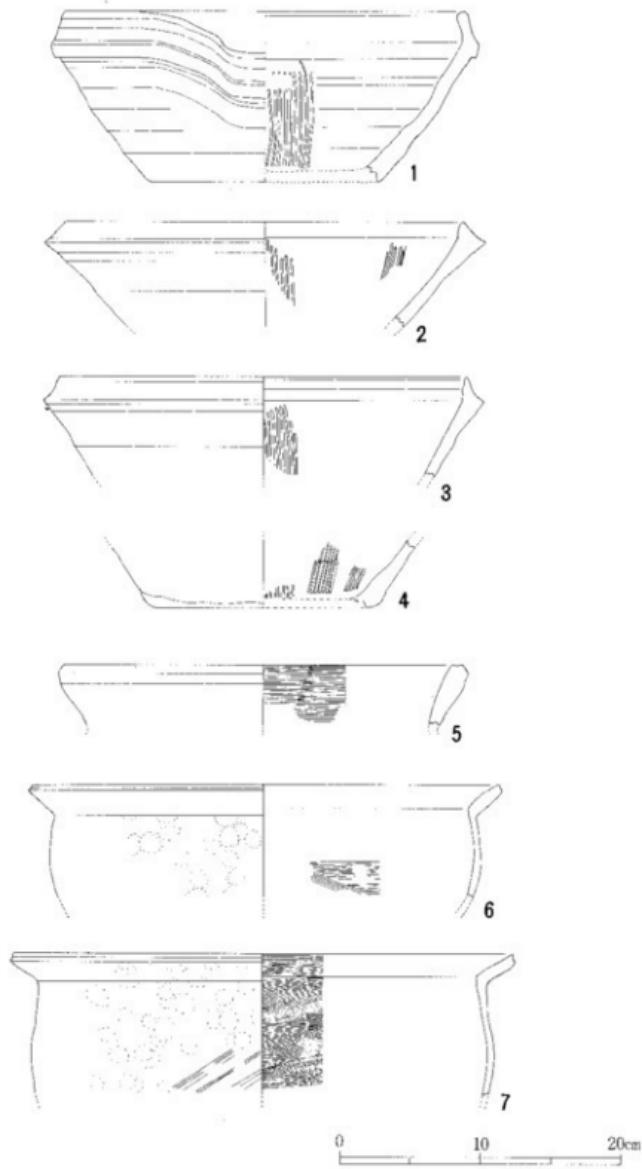
第43図 須恵質鉢 実測図



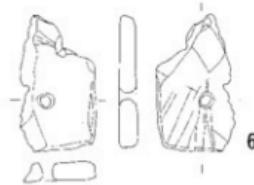
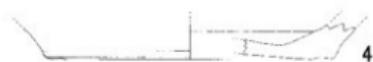
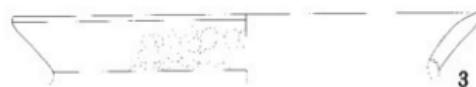
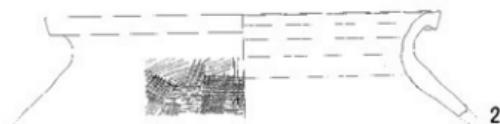
第44図 須恵質鉢 実測図



第45図 羽蓋形土器 実測図



第46図 陶器・土師質土器 実測図



0                  10                  20cm

第47図 陶器・土師質土器・滑石製品 実測図

#### 4 第3調査区

第3調査区は調査区域の西南部に位置し、5面の段々状の畠地を調査対象として、計6ヶ所のトレンチ調査を行なった。ここでは、造構、もしくは遺物が出土した第1トレンチ、及び第4、6の併合トレンチのみについて報告する。

##### 第1トレンチ

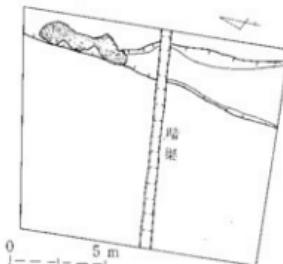
南北12m、東西2mのトレンチを設定したところ、トレンチ内から数点の石器及び、サヌカイトの剝片が出土したため、トレンチを南北約14m、東西約12mに拡張して調査を行なった。

##### 基本土層

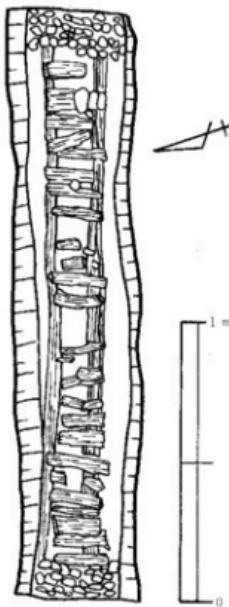
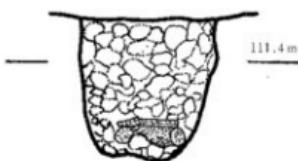
基本的な層序は上層から、耕土、床土、灰茶褐色粘質土層（地山）と続く。

##### 造構

ほぼ東西方向に延びる近世の暗渠を検出した。掘り方は、床土上面から切られており、幅、深さとも約50cm前後を計る。内部の構造は底面に径4cm～5cm程の石を敷き詰め、その上に径5cm～6cmの杉の丸木が、約20cmの間隔をあけて列に平行して並べられている。さらにその上を、長さ約25cm、幅約10cm、厚



第48図 第3調査区第1トレンチ 平面図



第49図 暗渠 平面図・断面図

さ約2cm～3cmの板を丸木に直行させて並べ、覆い被せた後、径10cm前後の石で埋められている。その結果、幅15cm、深さ5cm前後の空間が出来、その中を水が流れるようになっている。用途は、農業用の灌漑施設と考えられる。

#### 第4・第6併合トレンチ

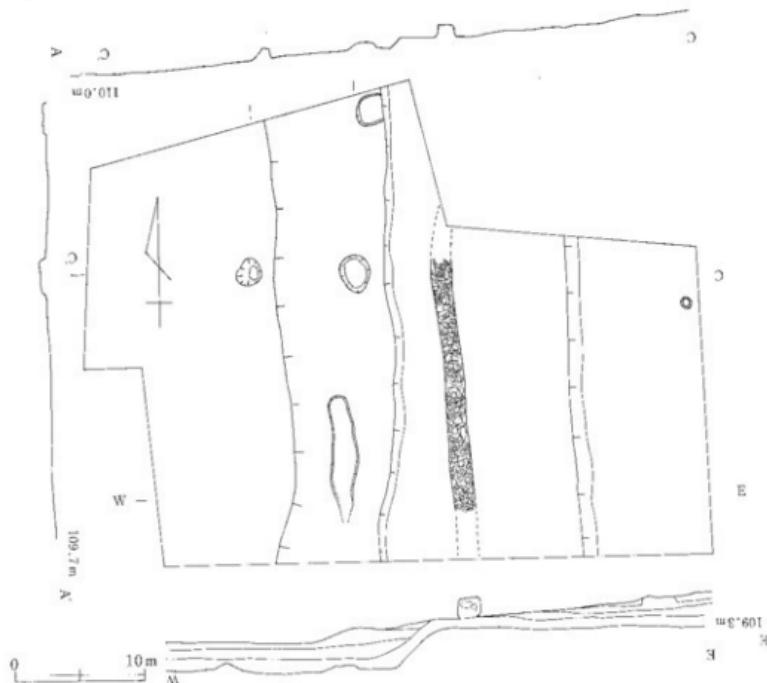
南北5m×東西2mの第6トレンチを設定したところ、ピット1個を検出したので、トレンチの拡張を行ない、東側に位置する第4トレンチと併合した。

#### 基本土層

基本的な層序は、上から、耕土、床土、黄灰褐色疊混粘質土、淡灰褐色粘質土と続くが、段々の畠地の開墾により、かなりの削平を受け一定ではない。遺物は、黄灰褐色粘質土と淡灰褐色粘質土から、土師質皿の小片数点と、サヌカイトの剝片1点が出土するにすぎない。

#### 遺構

第1トレンチと同様に、床土上面から切り込まれた暗渠を検出した。幅、深さともに約30cm



第50図 第4・第6併合トレンチ 平面図

を計り、ほぼ東西方向に続いている。しかし第1トレンチの暗渠のように、本組は検出されず、中に石を敷き詰めているだけである。

地山面から検出された3個のピットは、径約40cm～60cmを計るが、上部は削平されており、深さはいずれも10cm前後を計るに過ぎない。

第3調査区の他のトレンチからは、遺構、遺物が確認されないため、トレンチによる調査に止めた。

#### 出土遺物

##### 石器

本遺跡より出土した石器は、剥片、碎片を含め計57点を数える。その内訳は、石鏃6点、楔形石器11点、楔形石器の削片7点、剥片15点、碎片26点であり、全てサヌカイトを用いている。

第1図16、第2図22が第2調査地区排土内より、表面採集された以外は、第3調査地区より出土している。

第3調査地区の層序は、基本的には4層に分層可能であるが、表土以外全て二次的な堆積状況を示す。ほとんどの石器は第2・3層中に包含されていたものであり、必然的に現位置を離れた状態で検出した。

##### 楔形石器（第51図1～11）

楔形石器は、11点出土している。本遺跡出土の楔形石器は、縁辺の最終剥離痕の状態、階段状剥離により、縁辺の潰される位置から次の6種類に大別できる。

a類 縁辺のみが潰れおり、潰された縁辺の末端より一枚の削片を剥取しているもの。

b<sub>1</sub>類 相対する二つの縁片が潰され、潰された両縁辺よりそれぞれ一枚づつの削片を剥取したもの

b<sub>2</sub>類 相対する二つの縁辺が潰され、潰された一縁辺より一枚の削片を剥取したもの。

b<sub>3</sub>類 相対する二つの縁辺が潰され、潰された一縁辺より複数の削片を剥取したもの。

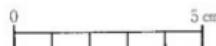
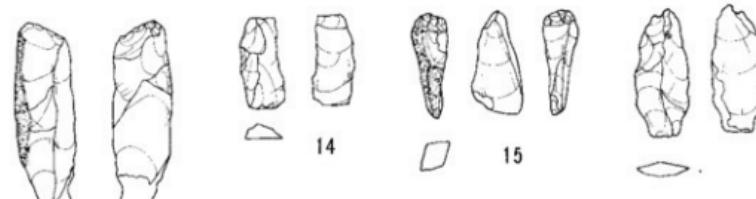
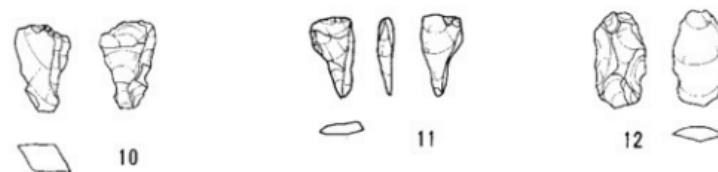
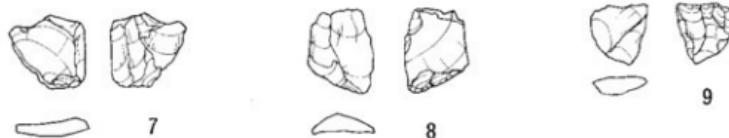
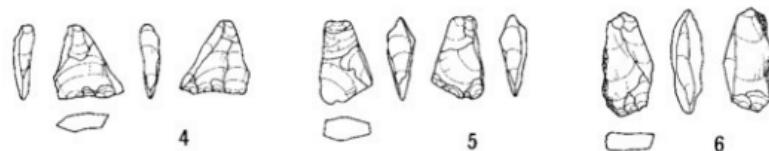
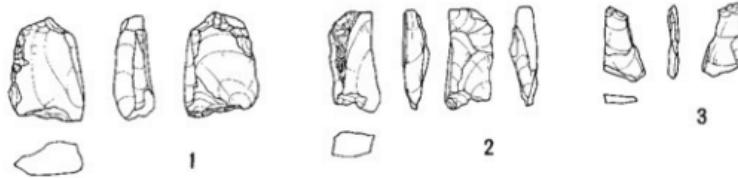
c類 となりあう二つの縁辺が潰され、潰された一縁辺より、一枚の削片を剥取したもの。

d類 三つの縁辺が潰され、潰された一縁辺より、複数の削片を剥取したもの。

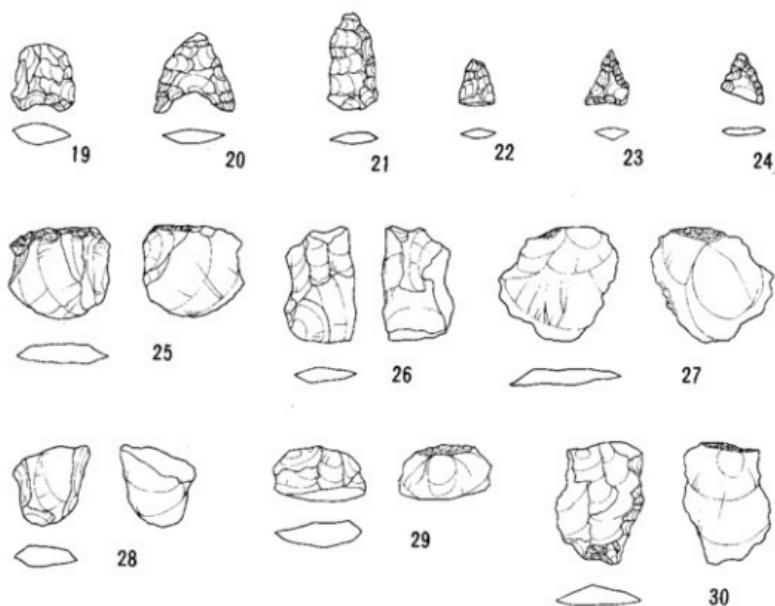
23・8はa類に、4・5はb<sub>1</sub>類、6・7はb<sub>2</sub>類に、10はb<sub>3</sub>類、9・11・12はc類、1はd類にそれぞれ分類できる。これらの楔形石器の両面に残された剥離痕の剥離方向及びその新旧関係は第51図に示すとおりである。また楔形石器とその削片の長さと幅の比率は、第1表に示した。

楔形石器の削片（第51図12～18）

7点出土している。楔形石器より剥離された削片である。長さは最大のもので5.4cm、最小のもので1.7cmを計る。13・15・17は楔形石器の、潰された縁辺を一部にとどめている。



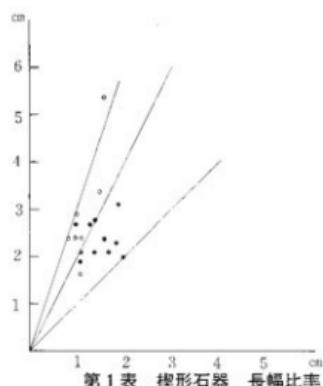
第51図 石器 実測図



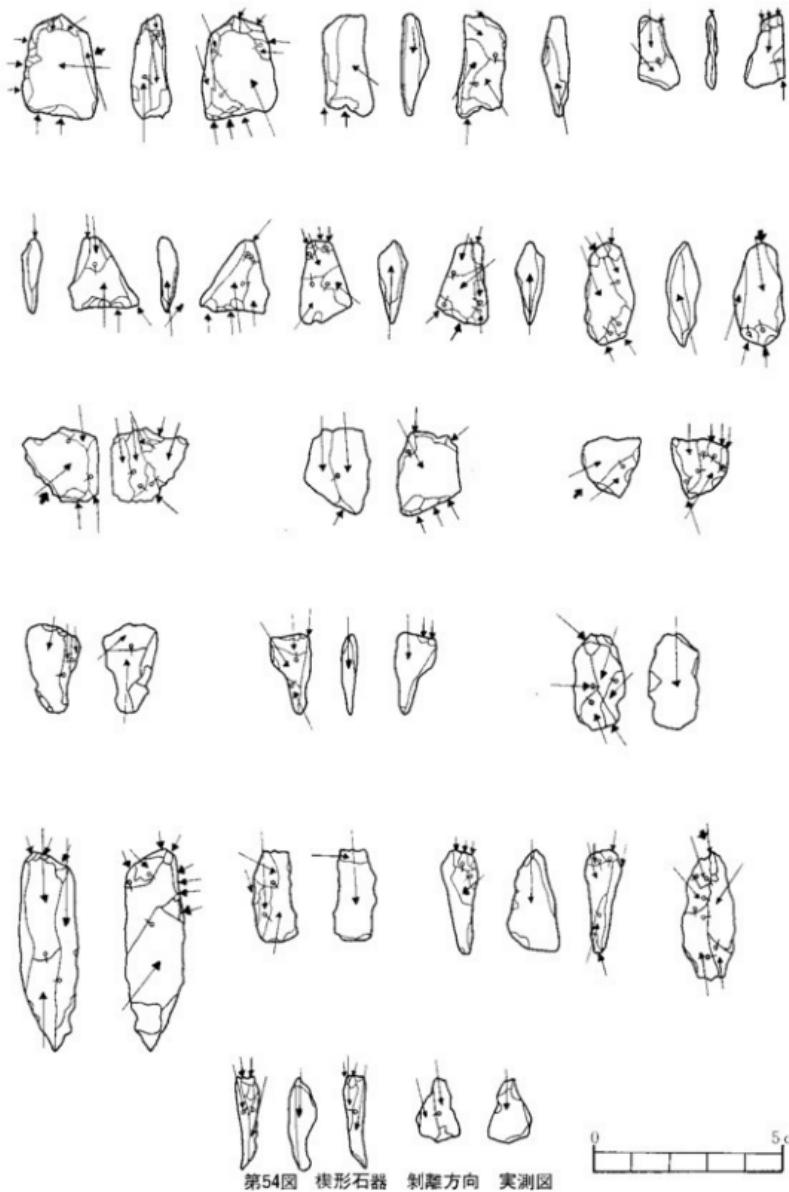
第52図 石器 実測図



第53図 サヌカイト原石 実測図



第1表 楔形石器 長幅比率



第54図 梗形石器 剥離方向 實測図

#### 石錠（第52図19～24）

6点出土している。19・20・23は四基無蓋式石錠である。22・24は下半部を欠損している。

#### 剝片（第52図25～29）

15点出土しているが、そのうち5点を図示した。27・29は共に自然面を打面としており、27の腹面左縁には、微細な剥離痕が認められている。26・28・29は縦長状を呈する剝片であるが、28は上半部、29は下半部を欠損している。

#### 削器（第52図30）

1点のみ出土している。背面側は、腹面と同方向から3枚の剥離痕で構成されており、打面は自然打面である。背面側右辺には、腹面側からの角度の深い、調整加工が施されている。

#### サヌカイト原石（第53図31）

1点のみ出土した。全面に転磨の痕跡が認められ、風化もかなり進んでいる。表面の状態及び、その石質に比較的近似するものとして、春日山山頂付近のサヌカイト原石が挙げられる。

### その他の出土置物

#### 瓦類（第55図、第56図、第57図）

第55図1は第一調査区の土塙1から出土した巴文軒丸瓦である。周縁には26個の連珠文が施される。瓦当面の直径は12.0cm計る。円筒部の前部はヘラで削られ、後部は布目を残し、釘穴があけられる。色調は灰色で須恵質である。第55図2は第二調査区西の埋土から出土した蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の復元口径は15.4cmを計る。弁数は10弁、もしくは11弁になるとを考えられる。成形は粗雑で、瓦当部の厚味は薄い。焼成は甘く、色調は淡黄灰色である。第55図3は第二区調査区西の第3層から出土した巴文軒丸瓦である。焼成はやや軟質で、色調は灰黒色である。

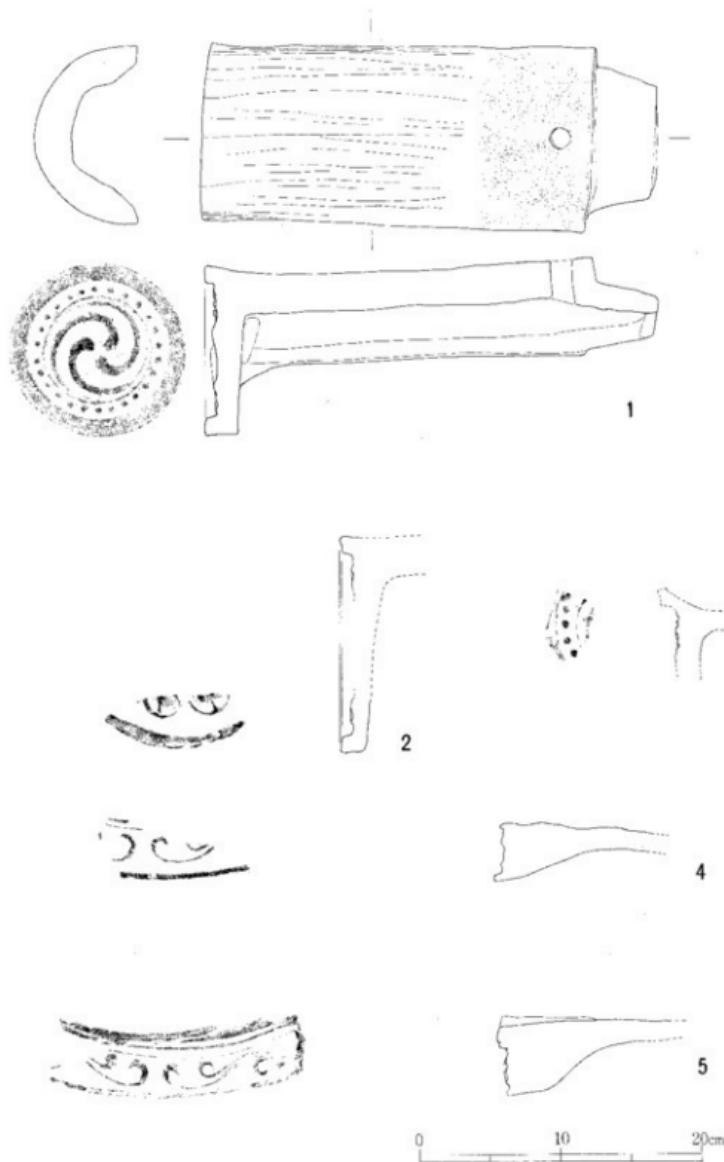
第55図4・5、第56図1・2は第2調査区西の埋め土から出土した軒平瓦である。4・5は唐草文、1は連珠文、2は不明である。4点とも焼成は甘く、色調は灰褐色を呈する。第56図3～5は第2調査区西の埋め土から出土したものである。3は平丸で、表面には繩目、裏面には布目を残す。焼成はやや軟質で、色調は黄白色である。4は丸丸である。内面に布目を残す。焼成は良好で色調は灰黒色である。5は平丸である。端部内面はヘラで削り薄く仕上げる。焼成はやや軟質で、色調は黄白色である。

第57図の2は第二調査東の埋め土、他は第二調査区西の埋め土から出土したものである。1は平丸で、表面に繩目を残す。焼成は良好で、色調は灰白色である。2は丸丸で、比較的厚い器壁を有する。裏面に布目を残す。焼成は良好で色調は淡灰黒色である。3は丸丸である。端

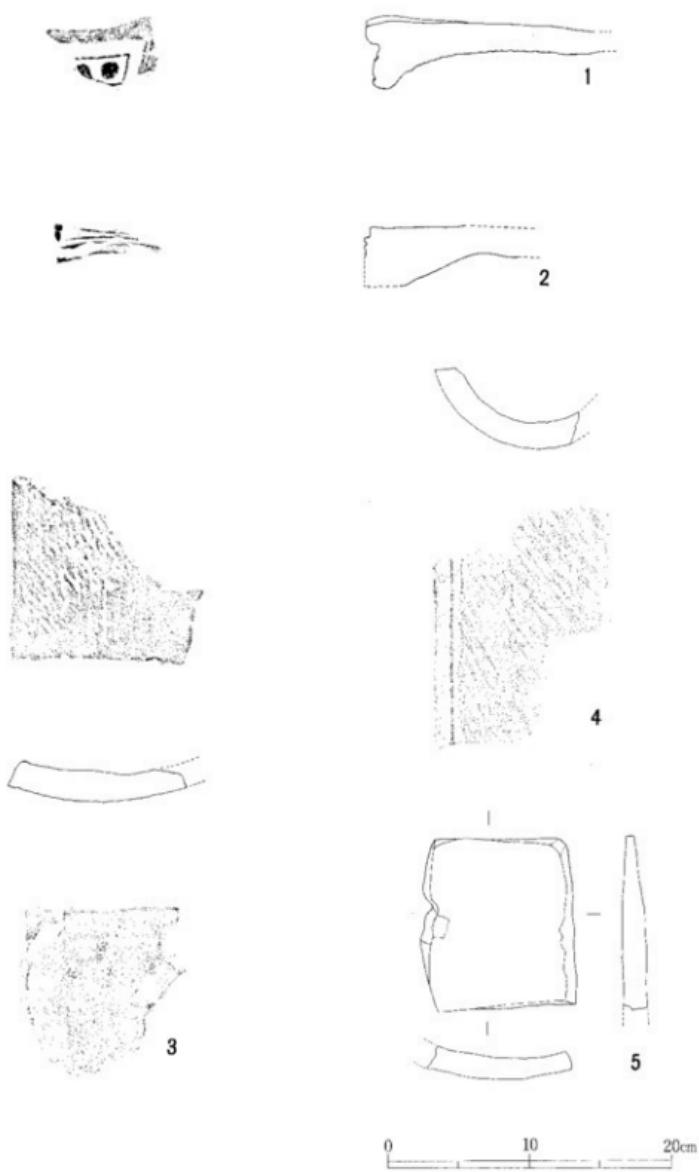
部をへラ削り、器壁を薄く仕上げる。内面に布目を残す。焼成はやや軟質で、色調は淡灰黒色である。4は丸瓦で内面に布目を残す。焼成はやや軟質で、色調は淡灰黒色である。5・6は鬼瓦の一部分と考えられる。5は表面に溝状の凹みが2本施され、6は表面に「+」字の文様が刻まれたものである。共に焼成はやや軟質で、色調は淡黄灰色である。7は隅本覆い瓦と考えられる。表面に2条の突起が削り出される。

#### 古銭（図版35 4～6）

北宋銭2点（景祐元宝・元豐通宝）明錢1点（永樂通宝）が出土した。景祐元宝は第二調査区西の床土から出土した。外径2.3cm、穿幅0.75cmを計る。初鑄年代は1034年である。元豐通宝は第三調査区の耕土内から出土した。外径2.3cm、穿幅0.6cmを計る。初鑄年代は1078年である。永樂通宝は第一調査区の地山上面から出土した。外径2.5cm、穿幅0.55cmを計る。初鑄年代は1403年である。



第55図 軒丸瓦・軒平瓦 拓影図



第56図 軒平瓦・平瓦 実測図



1



2



3



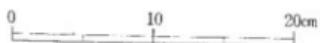
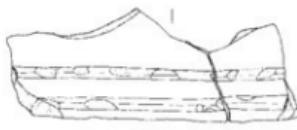
4



5



6



第57図 瓦類 実測図

## 5 調査のまとめ

今回の調査地区の東側に隣接する地区は、昭和52年に、日本住宅公団の進入路予定地になり、事前の調査が行なわれている。その結果、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構、遺物が検出され、遺構はさらに東西両側へ続く事が確認されている。今回の調査はその西側の仮称萱野北部小学校の建設予定地、約4800m<sup>2</sup>を対象として行なったものである。

調査地区の東半部に位置する第1調査区からは、多数の上塙及びピット、水路状遺構が検出された。土塙群は、その用途を明確にする事が出来ないが、多量の遺物を出土したものや、石群を配したものがあり、中世の1資料として加えられるものである。土塙群とともに多数検出されたピットは、その配列が不規則なため、明確な建物跡を復元する事が困難である。しかし、何等かの施設が存在した事は十分考慮されるものであり、さらに調査対象区以東に期待出来るものである。北西から南西へと続く水路状遺構から西側は傾斜面となり、遺構は検出されなかつたが、南側の一部で、この水路状遺構を埋め土で整地したと考えられる面から、根石を伴うピットが数個検出された。また西端の第2区東に隣接する地点では埋没谷が検出され、遺物が出土した。

第2調査区東と第2調査区西は、調査以前には約1.5mの比高差があり、地区を分割して調査を行なったが、調査の結果、第2調査区東は後世の削平を受けている事がわかり、本来遺構面は、第2調査区西と続く事が確認された。この両調査区を合わせた第2調査区の最終遺構面は北側に平坦な面をもち、南側は段を持って一段低くなっている。この最終遺構面と、南側の低くなった面を、埋め土で整地した面の2面から遺構を検出した。遺構は、最終面から掘立柱の建物3棟、溝状遺構等、また整地面からは土塙、溝状遺構等を検出した。

第3調査区では明瞭な遺構が検出されず、トレンチによる調査にとどめた。しかし、第1トレンチでは、2次的な堆積土の中から、石器類が出土したため、トレンチの拡張を行なった。

遺構の時期について出土遺物を検討して考えてみると、まず第1調査区の井戸であるが、井戸内から出土した遺物の中で瓦器椀は、和泉型のもので、13世紀後半頃に位置づけられる。<sup>註1</sup>しかし、備前焼の擂鉢はⅣ類と考えられるもので15世紀前半、土師質のヘソ皿もまた、15世紀前半頃のものである。<sup>註2</sup>なお、前回の調査においても、この井戸内から、瓦器椀、備前焼の擂鉢等、13世紀後半頃のものと、15世紀前半頃のものが出土している。各土塙内出土のヘソ皿も、井戸内出土のものと同じ形態をもつもので、15世紀の前半のものと考えられる。埋没谷内の底面よりもやや上層で出土した瓦器椀も井戸内出土のものと同じ時期のもので、13世紀後半頃のもの<sup>註3</sup>であり、白磁皿は16世紀代のものである。<sup>註4</sup>したがって、少なくとも16世紀代までは、この谷は埋没しておらず、第1調査区と第2調査区を区切っていた事になる。第2調査区西の、北側の



第58図 造構査出全体図

平坦面及び、埋め土上面で検出されたいくつかの土塙内から出土したヘソ皿も、第1調査区出土のものと同じ形態をもつもので、15世紀前半頃のものである。埋め土内から出土した遺物には、時期差があり、上縁状の口縁部を有する白磁碗及び瓦類は、12世紀後半頃のもので、多量に出土した瓦器碗は、第1調査区出土のものと同じく13世紀後半頃のものである。ただし、前述のヘソ皿は出土されなかった。以上のことから埋め土の下の面で検出された3棟の建物の時期は13世紀後半以前と考えられる。また、埋め土上面の遺構は15世紀前半頃、北部の平坦面の遺構は、13世紀後半頃と15世紀前半頃のものと考えられる。

遺跡の時期をまとめてみると、谷に隔てられた東側と西側に、13世紀後半頃の遺構が残される。一時期において、15世紀に入ってから、斜面等を埋め土で整地を行ない、あらたな遺構が残される事になる。

出土遺物を検討してみると、多くの輸入陶磁器は、この地域の流通と遺跡の性格を考える意味で興味深い資料であり、また、瓦器碗は、和泉型と楠葉型の新たな分布を示す資料となるものである。<sup>註7</sup>

註1 橋本久和「瓦器碗の地域色と分布」『折河泉文化資料』第19・20号 昭和55年

註2 関號忠彦・同號俊子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報第5号』昭和43年

註3 鈴木重治・松藤和人「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」同志社大学校地学衛調査委員会 昭和53年

註4 矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 昭和53年

註5 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』④ 昭和51年

註6 藤井直正氏の教示による

註7 註1と同じ

第2表 第1調査区出土遺物 観察表

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土量	備考
11 - 1		土師質皿	口径 8.7	良 好	外 赤茶褐色 内 赤茶褐色	良 好	井戸内	
- 2		土師質皿	口径 6.4	良 好	外 茶褐色 内 茶褐色	良 好	井戸内	
- 3		土師質皿	口径 7.8	精 良	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	良 好	井戸内	
- 4		土師質皿	口径 7.5	精 良	外 乳褐色 内 乳褐色	良 好	井戸内	
- 5	9-1	土師質皿 器高 18	口径 7.4	良 好	外 乳黄褐色 内 乳黄褐色	良 好	井戸内	上げ底である
- 6	9-2	土師質皿 器高 21	口径 7.3	良 好	外 淡灰白色 内 淡灰白色	良 好	井戸内	上げ底である
- 7	9-3	土師質皿 器高 1.7	口径 9.4	良 好 微砂を含む	外 灰茶褐色 内 灰茶褐色	良 好	井戸内	やや上げ底氣味である
- 8	9-4	土師質皿 器高 185	口径 8.3	良 好 微砂を含む	外 淡灰茶色 内 淡灰茶色	良 好	井戸内	成形が特に確である
- 9		土師質皿	口径 9.6	良 好 微砂を含む	外 茶褐色 内 茶褐色	良 好	井戸内	
- 10		土師質皿	口径 8.1 器高 1.9	精 良	外 茶褐色 内 茶褐色	良 好	井戸内	
- 11	9-5	土師質皿 器高 18	口径 8.4	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	井戸内	
- 12		土師質皿	口径 11.0	精 良	外 淡灰褐色 内 黄灰褐色	良 好	井戸内	
- 13	9-6	土師質皿	口径 12.4	良 好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	井戸内	
- 14	9-7	土師質皿	口径 10.1	良 好	外 茶褐色 内 茶褐色	良 好	井戸内	
- 15	9-8	土師質皿	口径 11.8	良 好	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	井戸内	丸底である
- 16		土師質皿	口径 14.1	良 好	外 黄茶褐色 内 黄茶褐色	良 好	井戸内	

図版番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
11-17	9-9	土師質皿	口径 12.2	良好	外 淡黄白色 内 淡黄白色	良好	井戸内	
-18		土師質皿	口径 15.2	良好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良好	井戸内	
-19		土師質皿	口径 15.6	精良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	井戸内	
-20		土師質皿	口径 13.9	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	井戸内	
-21	9-10	土師質皿	口径 13.3	精良	外 乳灰褐色 内 乳灰褐色	良好	井戸内	
-22	9-11	土師質皿	口径 11.8	良好 微砂を含む	外 茶黒色 内 淡黄褐色	良好	井戸内	
-23	9-12	土師質皿 器高 2.15	口径 12.9	良好	外 乳灰褐色 内 乳灰褐色	良好	井戸内	やや上げ底氣味である
-24		土師質皿	口径 15.1	径1mm以下 の砂粒を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良好	井戸内	
-25		土師質皿	口径 17.3	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	井戸内	
-26	9-13	土師質皿	口径 17.9	径2mm以下 の砂粒を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	井戸内	
-27	9-14	瓦器皿 器高 1.4	口径 8.9	良好 微砂を含む	外 灰色 内 灰色	良好	井戸内	
-28		瓦器碗	口径 13.8	良好 細砂を含む	外 灰黒色 内 灰黒色	良好	井戸内	内面に暗文を施す
-29		備前焼器	口径 20.9	石英を含む	外 濃赤褐色 内 茶褐色	良好	井戸内	5本以上の単位のカキ目
-30		備前焼器	口径 28.0	径2mm以下 の砂粒を含む	外 暗茶褐色 内 暗茶褐色	良好	井戸内	6本単位のカキ目
12-1		土師質皿	口径 9.4	精良	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	良好	土塗 8	
12-2		土師質皿	口径 7.2 器高 1.3	径2mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	土塗 8	上げ底である

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土壌	備考
12 - 3		土師質皿	口径 7.5	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	土括 8	
- 4		土師質皿	口径 7.6	良好	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良好	土括 8	
- 5		土師質皿	口径 7.9	精良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	土括 8	上げ底である?
- 6	10 - 1	土師質皿	口径 6.6	良好	外 淡褐色 内 淡褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である?
- 7	10 - 2	土師質皿	口径 7.2 器高 1.8	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	土括 8	上げ底である
- 8	10 - 3	土師質皿	口径 7.0 器高 1.7	精良	外 乳黄色 内 乳黄色	やや軟質	土括 8	上げ底である
- 9	10 - 4	土師質皿	口径 6.9 器高 1.65	良好	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である
- 10	10 - 5	土師質皿	口径 6.7 器高 1.7	良好 細砂を含む	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である
- 11		土師質皿	口径 8.4	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	土括 8	
- 12		土師質皿	口径 10.2	良好 細砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良好	土括 8	
- 13		土師質皿	口径 9.8	良好	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である?
- 14	10 - 6	土師質皿	口径 9.5 器高 1.7	精良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である
- 15	10 - 7	土師質皿	口径 7.5 器高 1.75	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	土括 8	やや上げ底気味である
- 16	10 - 8	土師質皿	口径 10.4 器高 2.05	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	土括 8	上げ底である
- 17		土師質皿	口径 8.4	径1mm以下の細砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良好	土括 8	
- 18		土師質皿	口径 15.3	良好	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	軟質	土括 8	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土上層	備考
12-19	10-9	土師質皿	口 径 12.0	良 好	外 淡茶褐色 内 淡赤褐色	軟 質	土 技 8	
- 20	10-10	土師質皿	口 径 12.5	良 好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 技 8	
- 21		土師質皿	口 径 13.0	良 好	外 乳褐色 内 乳褐色	やや軟質	土 技 8	
- 22		土師質皿	口 径 13.6	良 好	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 技 8	
- 23		土師質皿	口 径 16.5	径1mmの細砂を含む	外 淡乳褐色 内 淡乳褐色	軟 質	土 技 8	
- 24	10-11	土師質皿	口 径 21.2	精 良	外 乳及褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 技 8	
- 25		土師質皿	口 径 8.6	精 良 粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 26		土師質皿	口 径 8.3	精 良	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 27		土師質皿	口 径 8.8	良 好	外 白灰色 内 白灰色	軟 質	溝状遺構 1	
- 28		土師質皿	口 径 10.4	精 良	外 茶褐色 内 淡黄褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 29		土師質皿	口 径 9.8 器 高 1.5	径1.5mm以下の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 灰褐色	やや軟質	溝状遺構 1	やや上げ底気味である
- 30		土師質皿	口 径 10.8	精 良	外 乳赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 31		土師質皿	口 径 12.1	精 良	外 乳赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 32		土師質皿	口 径 13.2	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	溝状遺構 1	
- 33		土師質皿	口 径 14.7	径1.5mm以下の粒砂を含む	外 乳褐色 内 乳褐色	良 好	溝状遺構 1	
13-1		土師質皿 器 高 1.85	口 径 8.2 径1mm以下の細砂を含む		外 淡黄色 内 淡黄色	軟 質	土 技 2	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
13-2	10-12	土師質皿	口 径 6.6	良 好	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	良 好	土 拾 2	上げ底である?
-3		土師質皿	口 径 6.4 器 高 1.8	径1mmの粗 砂を含む	外 乳灰色 内 乳灰色	良 好	土 拾 2	上げ底である
-4	10-13	土師質皿	口 径 8.6	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	土 拾 2	
-5		上階質皿	口 径 12.8	精 良	外 乳灰色 内 乳灰色	良 好	土 拾 2	
-6	10-14	土階質皿	口 径 10.7	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	土 拾 2	
-7		土階質皿	口 径 14.2	精 良	外 淡黄褐色 内 乳灰色	良 好	土 拾 2	
-8		土師質皿	口 径 5.5 器 高 1.1	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	土 拾 5	
-9	12-5	オロシ皿	底 径 7.6	精 良	外 灰色 内 淡灰色	良 好	土 拾 10	底面に糸切り跡
-10		瓦質火舍	口 径 22.0	精 良	外 暗灰色 内 暗灰色	良 好	土 拾 9	内外面共にていねいな ヘラ磨き
-11		土師質鉢	口 径 28.2	径3mm以下の 粗砂を含む	外 淡黄灰色 内 淡灰色	良 好	土 拾 7	
-12		羽釜形 土器	口 径 23.2 器 高 28.4	径3mm以下の 粗砂を含 む	外 赤茶褐色 内 赤茶褐色	良 好	土 拾 9	
-13		上階質皿	口 径 7.0 器 高 1.7	良 好	外 乳灰色 内 乳灰色	良 好	B 区 第2層	上げ底である
-14		土師質皿	口 径 7.5	精 良	外 黄茶褐色 内 黄茶褐色	良 好	C 区 第3層	
-15		土師質皿	口 径 10.0	精 良	外 黄茶褐色 内 黄茶褐色	良 好	土 拾 9	
-16		土師質皿	口 径 9.2	精 良	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	第2トレシチ 床 上	
-17		土師質皿	口 径 10.1	精 良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	やや軟質	a-14 第3層	

図版番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
13-18		土師質皿	口径 11.5	良好	外 茶褐色 内 褐赤褐色	良好	b-18 第3層	
-19		土師質皿	口径 9.5	良好	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良好	a-12 第3層	外面にスス付着
-20		土師質皿	口径 10.1	精良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良好	a-12 第3層	
-21		土師質皿	口径 13.5 器高 1.95	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	a-12 第3層	
-22		土師質皿	口径 12.4 器高 1.5	径1mmの粗砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	やや軟質	a-12 第3層	
-23		土師質皿	口径 14.6 器高 2.3	径2mm以下の粗砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	a-12 第3層	
-24		土師質皿	口径 15.1	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	土括9 第3層	
-25		土師質皿	口径 15.0	精良	外 淡乳褐色 内 灰黑色	良好	a-14 第3層	
14-1		土管	口径 22.8	細砂を多く含む	外 灰黑色 内 灰褐色	良好	b-16 第3層	
-2		土管	口径 13.8	細砂を多く含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良好	b-16 第3層	
-3		瓦質火合	口径 16.0	石英を含む	外 灰色 内 灰色	良好	中央東西 トレンチ 第2層	
-4		瓦質火合	口径 30.9	径2mm以下の粗砂を多く含む	外 黒褐色 内 黑褐色	良好	a-18 第2層	内外面共ヘラ磨き
-5		土師質鉢	口径 18.2	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	中央南北 サブトレンチ 第2層	小片の為器體は不用
-6		土師質鉢	口径 34.2	径1mm以下 の粗砂を多く含む	外 乳灰褐色 内 乳灰褐色	良好	第2層	内面にスス付着
-7		常滑燒鉢	底径 7.0	径1.5mm以下 の粗砂を含む	外 灰色 内 灰色	良好	土括9	
-8		鍋前燒增加 鉢	底径 11.3	径1mm以下 の粗砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良好	第1トレンチ 第3層上面	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
14 - 9		備前焼鉢	口 径 26.2 長径を含む	外 灰赤褐色 内 灰赤褐色	堅 硬	第3層上面	5本以上の単位のカキ目	
- 10	12 - 7	備前焼盤鉢	底 径 17.4 様 3mmの粒砂を含む	外 灰赤褐色 内 灰赤褐色	良 好	中央トレンチ 第2層	6から8単位のカキ目	
15 - 1		瓦器 梶	高台径 3.0 様 1mmの細砂を含む	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 2		瓦器 梶	高台径 3.8 精 良	外 明灰色 内 明灰色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 3		瓦器 梶	高台径 4.8 良 好	外 灰茶褐色 内 明黒色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 4		瓦器 梶	高台径 4.3 良 好	外 明灰色 内 明灰色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 5		瓦器 梶	口 径 15.3 良 好	外 灰黒色 内 灰白色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 6		瓦器 梶	口 径 14.8 良 好	外 乳灰色 内 淡白色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 7		瓦器 梶	口 径 14.5 良 好	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 8		瓦器 梶	口 径 14.8 良 好	外 灰乳色 内 灰黑色	良 好	a - 12 第3層		
- 9		瓦器 梶	口 径 15.7 高台径 4.1 器 高 4.0 良 好	外 灰褐色 内 乳灰色	やや軟質	土 押 9	かなりの磨滅を受ける 器高指数 25.4	
- 10		天目茶碗	高台径 3.5 精 良	外 灰茶褐色 内 黑灰色	良 好	土 押 9	中國 製	
- 11	12 - 1	灰釉香炉	口 径 10.1 器 径 11.2 精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	井戸 内		
- 12		白 磁 盆	口 径 11.8 高台径 6.4 器 高 3.1 精 良	外 淡灰白色 内 淡灰白色	良 好	埋没谷黒色 粘質砂礫土		
- 13	11 - 2	青 磁 盆	口 径 12.2 器 高 3.0 精 良	外 淡黄綠色 内 淡黄綠色	良 好	b - 12 第4層上面	龍泉窯系	
- 14	12 - 2	青 磁 盆	底 径 4.1 精 良	外 明黄綠色 内 明黄綠色	良 好	埋没谷	龍泉窯系	

圓函番号	圓板番号	器種	法量(cm)	胎上	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
15-15		白磁盤	口径 16.2	精良	外 白綠色 内 白綠色	良好	b-12 第4層上面	樺府系
-16		白磁碗	高台径 8.2	精良	外 乳灰色 内 乳灰色	良好	南端 第2層上面	
-17	12-6	白磁碗	高台径 7.8	精良	外 淡灰白色 内 淡灰白色	良好	埋没谷黑色 粘質砂礫土	
16-1		青磁碗	口径 12.2	精良	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	a-12 第3層	龍泉窯系
-2		青磁碗	口径 18.3	精良	外 黃綠色 内 黃綠色	良好	a-15 第3層	龍泉窯系
-3		青磁碗	口径 15.5	精良	外 綠青色 内 綠青色	良好	土塗 5	龍泉窯系
-4	16-5	青磁碗	口径 13.8	精良	外 淡綠灰色 内 白灰色	良好	A-14 落ち込み内	龍泉窯系
-5		青磁碗	口径 14.1	精良	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	a-15 第2層	龍泉窯系
-6		青磁碗	口径 14.5	精良	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	a-15 第2層	龍泉窯系
-7	16-4	青磁碗	口径 15.6	精良	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	第1トレンチ 第4層	龍泉窯系
-8		青磁碗	高台径 4.4	径 0.5mm 以 下の細砂を 含む	外 淡黃褐色 内 白灰色	良好	第1トレンチ 第4層	龍泉窯系
-9		青磁碗	高台径 7.5	精良	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	A-15 第2層	龍泉窯系
-10	11-1	青磁碗	口径 14.6 高台径 4.8 器高 5.2	精良	外 淡青綠色 内 淡青綠色	良好	土塗 10 土塗 9 その他	龍泉窯系
-11	12-4	青磁碗	高台径 5.4	径 0.5mm 以 下の細砂を 含む	外 淡綠色 内 淡綠色	良好	土塗 9	龍泉窯系
-12	12-3	青磁碗	高台径 6.2	石英の粒砂 を少量含む	外 明青綠色 内 明青綠色	良好	b-18 第3層	龍泉窯系

第3表 第2調査区東出土遺物 觀察表

団面番号	国版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 山土土層	備考
22-1		土師質皿	口径 7.1	精良	外 黄茶褐色 内 黄茶褐色	良好	1-17 埋土	やや上げ底気味である
-2	13-1	土師質皿	口径 7.7	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	k-17 埋土	
-3	13-2	土師質皿	口径 7.5	良好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	k-16 埋土	
-4	13-3	土師質皿	口径 8.8	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良好	1-16 埋土	
-5	13-4	土師質皿 器高 15	口径 8.4	良好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	軟質	n-16 埋土	やや上げ底気味である
-6		土師質皿	口径 9.5	良好	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	やや軟質	Pit 89	
-7	13-5	土師質皿 器高 13	口径 9.2	良好	外 淡黄茶色 内 淡黄茶色	やや軟質	Pit 22	
-8	13-6	土師質皿	口径 8.6	良好	外 淡黄色 内 淡黄色	良好	k-17 埋土	
-9	13-7	土師質皿	口径 9.6	良好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	k-17 埋土	
-10	13-8	土師質皿	口径 8.4	良好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	軟質	Pit 7	
-11		土師質皿	口径 7.2	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	Pit 87	
-12		土師質皿	口径 7.8	精良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良好	1-16 埋土	
-13	13-9	土師質皿 器高 1.5	口径 7.8	径2mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	n-16 埋土	
-14	13-10	土師質皿	口径 8.4	径1mm以下 の細砂を含む	外 赤黄褐色 内 赤黄褐色	良好	1-17 埋土	
-15	13-11	土師質皿	口径 9.2	精良	外 白灰色 内 白灰色	良好	k-16 埋土	
-16	13-12	土師質皿	口径 10.4	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡赤茶色 内 淡赤茶色	やや軟質	1-16 埋土	

画面番号	回収番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
22 - 17		土師質皿	口 径 10.2	径 2 mm 以下の粒砂を多く含む	外 淡黄褐色 内 灰褐色	軟質	n - 16 埋 土	やや上げ底気味である
- 18		土師質皿	口 径 9.0 器 高 0.8	径 2 mm 以下の粒砂を含む	外 淡黄茶色 内 淡黄茶色	やや軟質	1 - 16 埋 土	やや上げ底気味である
- 19	13 - 13	土師質皿	口 径 10.9	径 1 mm 以下の粒砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	やや軟質	Pit 92	
- 20	13 - 14	土師質皿	口 径 13.0	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	n - 16 埋 土	
- 21		土師質皿	口 径 14.0	径 1 mm 以下の粒砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	軟質	k - 16 埋 土	
- 22		土師質皿	口 径 13.8	径 2 mm 以下の粒砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	軟質	k - 17 埋 土	
- 23		土師質皿	口 径 16.6	径 1 mm 以下の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	東壁 サブレンチ 埋 土	
- 24		土 師 質 脚 付 皿	脚 径 7.7	径 3 mm 程度の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	1 - 16 埋 土	器壁はかなり厚い
- 25		土 師 質 脚 付 皿	脚 径 4.1	径 3 mm 以下の粒砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	k - 17 埋 土	
- 26	14 - 1	土 師 質 月却付皿	口台径 17.0 月却径 5.0 口 径 5.1	径 1 mm 程度の粒砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	k - 17 埋 土	
23 - 1		瓦器皿	口 径 8.9	精 良	外 暗灰色 内 暗灰色	やや軟質	k - 17 埋 土	
- 2		瓦器皿	口 径 9.8	良 好	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	n - 16 第 3 層	
- 3	14 - 2	瓦器皿	口 径 11.0	精 良	外 灰色 内 灰色	良 好	n - 16 埋 土	
- 4		瓦器皿	口 径 9.8	精 良	外 灰色 内 灰色	良 好	k - 17 埋 土	
- 5		瓦器皿	口 径 8.9	精 良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	k - 17 埋 土	
- 6	14 - 3	瓦器皿	口 径 8.8	精 良	外 灰色 内 暗灰色	良 好	1 - 16 埋 土	

図面番号	図版番号	器種	法線(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
23 - 7	14 - 4	瓦器皿	口径 8.6	径1mm以下の細砂を含む	外 暗灰色 内 單灰色	良好	k - 17 埋土	
- 8		瓦器皿	口径 7.2	良好	外 銀灰色 内 銀灰色	良好	南壁 埋土	
- 9		瓦器皿	口径 7.8	径2mm以下の粒砂を多く含む	外 灰黒色 内 灰黒色	やや軟質	k - 17 埋土	
- 10		瓦器皿	口径 8.4	径1mm以下の細砂を含む	外 灰色 内 乳灰色	良好	k - 18 埋土	
- 11		瓦器皿	口径 7.4	径1mm程度の細砂を含む	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	n - 16 第3層	
- 12		瓦器皿	口径 8.4	精良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	やや軟質	k - 17 埋土	
- 13	14 - 5	瓦器皿	口径 8.4	精良	外 淡灰黒色 内 灰黒色	良好	k - 18 埋土	
- 14		瓦器皿	口径 9.0	径1mm以下の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 灰茶褐色	良好	k - 16 埋土	
- 15	14 - 6	瓦器皿	口径 8.8	少量の長石を含む	外 銀灰色 内 銀灰色	良好	k - 17 第3層上面	
- 16	14 - 7	瓦器皿	口径 9.8	径1mm以下の細砂を含む	外 灰黒色 内 灰黒色	やや軟質	l - 16 埋土	
- 17	14 - 8	瓦器皿	口径 9.4 器高 2.5	精良	外 灰黒色 内 灰黒色	良好	n - 15 埋土	
- 18		瓦器皿	口径 8.4 器高 2.0	精良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良好	k - 16 埋土	
- 19	14 - 9	瓦器皿	口径 7.9 器高 2.3	径1mm以下の細砂を多く含む	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	k - 17 埋土	
- 20		瓦器皿	口径 8.8	精良	外 灰黒色 内 灰黒色	良好	k - 17 埋土	
- 21	14 - 10	瓦器皿	口径 9.2 器高 1.7	精良	外 灰黒色 内 灰黒色	良好	l - 17 埋土	
- 22	14 - 11	瓦器皿	口径 8.6 器高 1.9	径1mm程度の細砂を含む	外 暗灰色 内 黑灰色	良好	k - 16 埋土	

器面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
23 - 23	15 - 1	瓦器皿	口径 8.8	精良	外 灰色 内 灰色	良 好	k - 17 埋 土	
- 24	15 - 2	瓦器皿	口径 8.8	良 好	外 暗灰色 内 暗灰色	良 好	k - 17 埋 土	
- 25		瓦器碗	高台径 5.0	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟 質	k - 17 埋 土	
- 26		瓦器碗	高台径 5.0	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟 質	n - 16 埋 土	
- 27		瓦器碗	高台径 5.4	精 良	外 黑黑色 内 黑灰色	やや軟質	k - 17 埋 土	
- 28		瓦器碗	高台径 5.6	精 良	外 明灰色 内 明灰色	良 好	l - 16 埋 土	
- 29		瓦器碗	高台径 5.8	径 2mm 以下 の細砂を含む	外 黑褐色 内 暗灰色	良 好	k - 17 埋 土	
- 30		瓦器碗	高台径 4.0	精 良	外 灰色 内 灰色	良 好	k - 17 埋 土	
- 31		瓦器碗	高台径 5.3	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 灰色 内 白灰色	良 好	Pit 43	
- 32		瓦器碗	口径 13.1	精 良	外 乳灰色 内 黄灰色	良 好	n - 16 埋 土	
- 33		瓦器碗	高台径 5.2	精 良	外 白灰色 内 白灰色	良 好	k - 18 第3層上面	
- 34		瓦器碗	高台径 4.9	精 良	外 黑灰色 内 黑灰色	軟 質	k - 18 埋 土	
- 35		瓦器碗	高台径 4.0	良 好 微砂を含む	外 黑黑色 内 黑白色	やや軟質	k - 17 埋 土	
- 36		瓦器碗	高台径 6.2	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 淡灰色 内 淡灰色	良 好	k - 16 埋 土	
24 - 1		瓦器碗	口径 14.8	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 淡灰色 内 黄褐色	良 好	k - 17 埋 土	
- 2		瓦器碗	口径 11.6	粒砂を少量 含む	外 暗灰色 内 暗灰色	やや軟質	k - 17 埋 土	

図面番号	図版器号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
24 - 3		瓦器 梗	口径 14.8	径1mm以下の細砂を多く含む	外 暗灰色 内 淡灰褐色	やや軟質	Pit 44	
- 4	15 - 3	瓦器 梗	口径 14.7	径2mm以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 灰茶褐色	良好	k - 17 埋 土	
- 5		瓦器 梗	口径 15.2	径1mm以下の細砂を多く含む	外 暗黄褐色 内 灰黄褐色	良好	k - 17 埋 土	
- 6	15 - 4	瓦器 梗	口径 14.0	径1mm以下の細砂を含む	外 暗褐色 内 淡灰褐色	良好	k - 17 埋 土	
- 7		瓦器 梗	口径 14.4	良 好 細砂を含む	外 淡灰黒色 内 淡灰黒色	やや軟質	Pit 43	
- 8	15 - 5	瓦器 梗	口径 15.0 高台径 4.0 器 高 4.4	精 良	外 暗黒色 内 暗褐色	良好	n - 16 埋 土	器高指数 29.3
- 9		瓦器 梗	口径 15.8	細砂を少料 含む	外 淡灰黒色 内 淡灰黒色	軟質	Z-Z	
- 10	15 - 6	瓦器 梗	口径 15.0 高台径 4.2 器 高 4.3	径1mm以下の 細砂を含む	外 淡赤色 内 暗黄褐色	やや軟質	k - 16 埋 土	器高指数 28.7
- 11		瓦器 梗	口径 14.0	径1mm以下の 細砂を含む	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	Pit 42	
- 12		瓦器 梗	口径 14.6	径1mm以下の 細砂を含む	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	I - 16 埋 土	
- 13		瓦器 梗	口径 14.2	精 良	外 暗灰褐色 内 暗灰褐色	良好	I - 15 埋 土	
- 14		瓦器 梗	口径 16.1	径1mm以下の 細砂を含む	外 暗黒色 内 明灰色	良好	I - 16 埋 土	
- 15		瓦器 梗	口径 15.8	径1mm以下の 細砂を含む	外 黑灰色 内 黑灰色	良好	n - 15 埋 土	口縁部内面に一条の沈線を施す
- 16		瓦器 梗	口径 17.5	精 良	外 暗黒色 内 暗黒色	良好	n - 16 埋 土	口縁部内面に一条の沈線を施す
- 17		瓦器 梗	口径 16.8	径1mm前後の 細砂を含む	外 白灰黄色 内 乳黄色	軟質	I - 16 埋 土	口縁部内面に一条の沈線を施す
- 18		瓦器 梗	口径 16.8	精 良	外 黑灰色 内 灰色	良好	Pit 110	口縁部内面に一条の沈線を施す

因而番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
24-19		瓦器碗	口径 16.0	精 良	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	n-16 埋 土	口縁部内面に一条の沈 線を施す
25-1	17-2	青磁皿	口径 13.0	精 良	外 淡黄綠色 内 淡黄綠色	堅 織	k-16 第3層	龍泉窯系
-2		青磁皿	口径 9.6	精 良	外 淡黄綠色 内 淡黄褐色	良 好	k-16 第3層	龍泉窯系
-3		青磁皿	高台径 7.0	精 良	外 淡綠色 内 淡綠色	良 好	n-16 埋 土	龍泉窯系
-4	18-2	青磁碗	高台径 5.0	良 好	外 淡灰色 内 淡綠色	良 好	n-16 埋 土	同安窯系
-5	17-6	青磁碗	口径 15.7	良 好	外 青灰色 内 青灰色	良 好	k-17 埋 土	同安窯系
-6		青磁碗	高台径 4.8	精 良	外 明茶色 内 淡灰色	良 好	k-16 第3層	
-7	17-1	青磁碗	口径 14.4	精 良	外 淡綠色 内 白灰色	良 好	n-16 第3層上面	龍泉窯系
-8		青磁碗	口径 13.0	精 良	外 淡綠色 内 淡灰色	良 好	k-17 埋 土	龍泉窯系
-9		青磁碗	口径 15.4	精 良	外 淡綠色 内 淡綠色	良 好	k-17 埋 土	龍泉窯系
-10	17-3	青磁碗	口径 17.9	精 良	外 淡黃綠色 内 淡黃綠色	堅 織	k-17 埋 土	龍泉窯系
-11	16-2	白磁皿	口径 11.6	精 良	外 黄白色 内 黄白色	堅 織	l-16 埋 土	
-12	16-6	白磁碗	口径 14.0	精 良	外 灰綠色 内 灰綠色	良 好	l-16 埋 土	玉縁状の口縁
-13	16-5	白磁碗	口径 17.3	精 良	外 乳黃色 内 乳黃色	堅 織	l-16 埋 土	玉縁状の口縁
-14		白磁碗	口径 17.2	径 1mm以下 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	l-16 埋 土	玉縁状の口縁
-15	16-7	白磁碗	口径 16.2	精 良	外 淡乳綠色 内 淡乳綠色	堅 織	k-16 埋 土	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土上層	備考
25 - 16		白磁碗	高台径 7.1	精 良	外 淡灰緑色 内 淡灰色	良 好	埋 上	
- 17		白磁碗	高台径 7.2	精 良	外 淡白色 内 乳緑灰色	堅 繼	1 - 16 埋 土	
- 18	16 - 4	白磁碗	口径 15.8	精 良	外 乳灰褐色 内 乳灰褐色	良 好	k - 16 第3層	
- 19		白磁碗	口径 16.6	精 良	外 乳灰褐色 内 乳灰褐色	堅 繼	k - 17 埋 土	
- 20	16 - 3	白磁碗	口径 14.6	精 良	外 暗白色 内 暗白色	良 好	k - 17 埋 土	
- 21		白磁碗	口径 15.3	精 良	外 乳白色 内 乳白色	堅 繼	n - 16 埋 土	
- 22		白磁碗	口径 18.8	精 良	外 乳白色 内 乳白色	良 好	n - 16 埋 土	
- 23	16 - 1	白磁碗	口径 16.2 高台径 5.7 器高 7.25	精 良	外 乳灰色 内 乳灰色	堅 繼	n - 16 埋 上	
26 - 1		羽釜形土器	口径 27.8	径1mm以下の 細砂を多 く含む	外 黄褐色 内 黄褐色	良 好	n - 16 埋 土	
- 2		羽釜形土器	口径 14.6	径2mm以下の 粒砂を含 む	外 灰褐色 内 灰褐色	やや軟質	o - 16 埋 上	
- 3		羽釜形土器	口径 18.2	径2mm以下の チャート 石英長石を 多く含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	n - 16 埋 土	
- 4		羽釜形土器	口径 21.1	細砂を多く 含む	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良 好	k - 17 埋 土	
- 5		羽釜形土器	口径 25.2	径2mm以下の 粒砂を多 く含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	n - 16 埋 土	内面にスス付着
- 6		羽釜形土器	口径 25.0	良 好	外 淡灰黒色 内 淡灰黒色	良 好	k - 17 埋 土	
- 7	18 - 4	羽釜形土器	口径 26.0	径3mm以下の 粒砂を含 む	外 黒褐色 内 黑褐色	良 好	o - 16 埋 土	
- 8	18 - 2	羽釜形土器	口径 18.2 器径 24.6 器高 27.0	径3mm以下の 粒砂を含 む	外 黑褐色 内 淡黑灰色	良 好	k - 17 土坑 1	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土上層	備考
26 - 9		羽彌形土器	—	径2mm以下 の粒砂を含む	黒灰色	良好	I - 16 埋土	
27 - 1		土師質鍋	口 径 22.6	径1mm以下 の細砂を多 く含む	外赤黄色 内赤黄色	やや軟質	n - 15 埋土	
- 2		土師質鍋	口 径 35.0	径1mm前後 の細砂を含む	外 黄茶褐色 内 黄茶褐色	良好	Pit 109	
- 3		土師質鍋	口 径 31.8	径1mm以下 の石英を少 量含む	外 暗茶褐色 内 暗茶褐色	良好	I - 16 埋土	内外面共にハケによる 調整
- 4		土師質甕	口 径 30.6	径2mm程度 の粒砂を多 く含む	外 黄灰褐色 内 黄灰褐色	やや軟質	Pit 110	
- 5		土師質火舟	底 径 29.2	径1mm前後 の細砂を含む	外 淡赤黄色 内 暗灰色	良好	n - 15 第3層上面	
- 6		土師質擂鉢	口 径 36.2 器 高 37.2	径2mm程度 の長石及び 細砂を含む	外 淡黄褐色 内 黑灰色	良好	n - 16 埋土	
- 7	18 - 1	鐵頭状擂鉢	口 径 25.6 底 径 14.9 器 高 11.9	径5mm~2 mmの粒砂を 含む	外 赤褐色 内 赤褐色	良好	n - 16 第3層	8本単位のカキ目
28 - 1	18 - 6	須恵質鉢	口 径 20.5	径3mm以下 の石英+チー トを含む	外 灰褐色 内 明灰色	良好	k - 16 埋土	
- 2	18 - 5	須恵質鉢	口 径 23.8	径1mm程度 の細砂を含む	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	k - 16・17 埋土	
- 3		須恵質鉢	口 径 28.4	径1mm前後 の細砂を多 く含む	外 灰黑色 内 灰黑色	良好	k - 17 埋土	
- 4		須恵質鉢	口 径 27.4	径2mm以下 の粒砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良好	Pit 27	
- 5		須恵質鉢	口 径 26.0	径3mm以下 の粒砂を含む	外 灰色 内 灰色	良好	Pit 38	
- 6	18 - 7	須恵質鉢	口 径 28.4	径3mm以下 の粒砂を多 く含む	外 灰色 内 明灰色	堅重	k - 17 埋土	
- 7	18 - 8	須恵質鉢	口 径 27.2	粒砂を少量 含む	外 暗灰色 内 暗灰色	堅重	I - 16 埋土	
- 8		須恵質鉢	口 径 27.2	径1mm以下 のチャート 石英を多く 含む	外 暗灰色 内 灰色	良好	k - 17 埋土	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
28-9		須恵質鉢	口径 28.7	径1mm前後の粗砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	n-16 第3層	
-10		須恵質鉢	口径 25.8	径2mm以下 の粗砂を含む	外 明灰色 内 灰色	良 好	k-18 第3層上面	
-11		須恵質鉢	口径 26.8	径3mmの石英と粗砂を やや多く含む	外 灰褐色 内 明灰色	良 好	k-17 埋 土	
-12		須恵質鉢	底 径 9.8	径2mm前後の粗砂を含む	外 明灰色 内 明灰色	良 好	k-16 埋 土	
-13		須恵質鉢	底 径 8.4	径2mm前後の粗砂を多 く含む	外 灰褐色 内 暗灰褐色	良 好	k-17 埋 土	

第4表 第2調査区西出土遺物 観察表

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
33-1	19-1	土師質皿	口径 7.2 器高 2.0	良好 微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-2	19-2	土師質皿	口径 7.2 器高 1.4	径3mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-3	19-3	土師質皿	口径 7.3 器高 1.5	径1mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-4	19-4	土師質皿	口径 7.0 器高 1.95	径3mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-5	19-5	土師質皿	口径 7.2 器高 1.9	径1mm前後 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-6	19-6	土師質皿	口径 7.6 器高 1.8	径1mm程度 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-7	19-7	土師質皿	口径 7.3	良好 微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-8	19-8	土師質皿	口径 7.5 器高 1.4	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-9	19-9	土師質皿	口径 7.4 器高 1.7	径1mm前後 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-10	19-10	土師質皿	口径 7.3 器高 1.6	精良	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-11	19-11	土師質皿	口径 7.2 器高 1.65	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-12	19-13	土師質皿	口径 7.3 器高 1.85	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-13	19-13	土師質皿	口径 7.5 器高 1.8	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-14	19-14	土師質皿	口径 7.2 器高 1.5	径3mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土括2	上げ底である
-15	20-1	土師質皿	口径 7.1	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	O-17 土括2	上げ底である
-16	20-1	土師質皿	口径 7.3 器高 1.9	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	O-17 土括2	上げ底である

前面番号	図版番号	器種	法(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
33-17	20-3	土師質皿	口 径 7.6 器 高 1.8	精 良	外 明黄褐色 内 明黄褐色	軟質	O-17 土 抵 2	上げ底である
-18	20-4	土師質皿	口 径 7.5	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	O-17 土 抵 2	上げ底である
-19		土師質皿	口 径 7.0	良 好 微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	P-17 土 抵 2	上げ底になると考る
-20		土師質皿	口 径 7.1	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 土 抵 2	上げ底になると考る
-21	20-5	土師質皿	口 径 7.3	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	O-17 上 抵 2	上げ底になると考る
-22		土師質皿	口 径 13.0	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	P-17 土 抵 2	
-23	20-6	土師質皿	口 径 13.5 器 高 2.35	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟質	P-17 土 抵	
-24		土師質皿	口 径 8.2 器 高 1.2	径0.5mm以下の微砂を含む	外 灰赤褐色 内 灰赤褐色	良 好	土 抵 10	
-25		土師質皿	口 径 9.9 器 高 1.3	径1mm以下の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 抵 10	
-26		土師質皿	口 径 9.2	精 良	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	土 抵 10	
-27		土師質皿	口 径 10.2	径1mm以下の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 抵 10	
-28		土師質皿	口 径 8.4 器 高 1.3	良 好 微砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 抵 10	やや上げ底気味である
-29		土師質皿	口 径 7.8 器 高 1.4	径1mm程度の細砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	土 抵 10	上げ底である
-30		土師質皿	口 径 7.7	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 抵 10	上げ底である
-31		土師質皿	口 径 9.0	精 良	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	土 抵 10	上げ底になると考る
-32		土師質皿	口 径 9.4	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 抵 10	

画面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土上層	備考
33 - 33		土師質皿	口 径 12.9	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 10	
- 34		土師質皿	口 径 10.2	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	土 砂 10	
- 35		土師質皿	口 径 8.0	良 好	外 黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 9	
- 36		土師質皿 器 高 1.9	口 径 8.9	径1mm程度 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 9	やや上げ底氣味である
34 - 1		土師質皿	口 径 8.4	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	Pit 110	
- 2		土師質皿	口 径 9.9	精 良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	やや軟質	Pit 110	
- 3		土師質皿	口 径 9.0	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	Pit 110	
- 4		土師質皿	口 径 12.2	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	Pit 110	やや上げ底氣味である
- 5		土師質皿	口 径 15.5	精 良	外 乳赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	Pit 110	
- 6		土師質皿	口 径 14.0	良 好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 3	
- 7		土師質皿 器 高 1.35	口 径 8.5	良 好	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 3	
- 8		土師質皿	口 径 11.2	微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	土 砂 3	
- 9		土師質皿	口 径 8.1	微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	Pit 38	
- 10		瓦 器 軋	高台径 5.3	精 良	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	Pit 49	
- 11		土師質皿	口 径 9.8	良 好	外 明黄褐色 内 明黄褐色	良 好	Pit 17	
- 12		土師質皿	口 径 10.5	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	Pit 17	

表面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
34 - 13		土師質皿	口 径 7.8	径1mm以下の細砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	Pit 17	
- 14		土師質皿	口 径 7.6	微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	Pit 32	
- 15		土師質皿	口 径 7.9	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	Pit 32	上げ底である
- 16		瓦器輪	口 径 13.2	径1mm以下の細砂を含む	外 黒暗色 内 黒暗色	良 好	Pit 32	
- 17		瓦器輪	高台径 6.1	径1mm以下の細砂を含む	外 灰黒色 内 灰黒色	良 好	Pit 17	
- 18	20 - 7	瓦器輪	口 径 15.2 高台径 4.6 器 高 3.8	径1mm程度の細砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	Pit 8	器高指数 25.0
- 19		瓦器輪	高台径 5.6	精 良	外 灰黒色 内 灰黒色	良 好	Pit 80	
- 20		土師質上器 (器種不明)	——	精 良	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	良 好	埋土上面	径1cm弱の小孔を故意にあけている
- 21		土師質 高台付皿	高台径 6.0	径1mm以下の細砂を含む	外 乳赤褐色 内 乳赤褐色	良 好	埋 土	
35 - 1	20 - 8	土師質皿	口 径 7.8	微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡灰褐色	良 好	黄褐色 砂質土層上面	
- 2		土師質皿	口 径 7.5 器 高 1.4	微砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	軟 質	埋 土	上げ底である
- 3		土師質皿	口 径 9.0	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 黑褐色	良 好	溝状遺構 1	やや上げ底気味である
- 4	20 - 9	土師質皿	口 径 7.8 器 高 1.0	微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	P - 17 埋 土	
- 5		土師質皿	口 径 6.5	微砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	やや上げ底気味である
- 6		土師質皿	口 径 7.4	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 7		土師質皿	口 径 8.2	径1mm以下の細砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	やや軟質	埋 土	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
35 - 8	20 - 10	土師質皿	口 径 8.1 器 高 1.5	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 9	20 - 11	土師質皿	口 径 7.3 器 高 1.95	精 良	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	淡灰茶色 砂質土層	やや上げ底気味である
- 10	20 - 12	土師質皿	口 径 8.6 器 高 1.5	径 1mm以下 の細砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	埋 土	やや上げ底気味である
- 11		土師質皿	口 径 8.2 器 高 1.6	径 0.5mm程 度の細砂を含 む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	埋 土	やや上げ底気味である
- 12		土師質皿	口 径 7.8 器 高 1.4	径 1mm程 度の細砂を含 む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	淡灰褐色 砂質土	
- 13		土師質皿	口 径 8.1 器 高 1.1	微砂をわざ かに含む	外 淡赤黄色 内 黄灰色	良 好	埋七上面	
- 14		土師質皿	口 径 7.7	径 1mm以下 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	軟 質	溝状遺構 1	
- 15	20 - 13	土師質皿	口 径 9.4	径 1mm程 度の細砂を含 む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 16	20 - 14	土師質皿	口 径 8.3 器 高 2.1	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 17	21 - 1	土師質皿	口 径 6.8 器 高 1.4	径 0.5mm以 下の細砂を含 む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	淡灰茶色 砂質土層	
- 18		土師質皿	口 径 8.1 器 高 1.55	径 0.5mm以 下の細砂を含 む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 19	21 - 2	土師質皿	口 径 8.6	径 1mm以下 の細砂を含 む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	埋 土	
- 20		土師質皿	口 径 8.5	微砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	軟 質	埋 土	
- 21		土師質皿	口 径 8.6	径 0.5mm以 下の細砂を含 む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 22	21 - 3	土師質皿	口 径 8.7	径 2mm以下 の粒砂を含 む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟 質	埋 土	
- 23	21 - 4	土師質皿	口 径 8.2	径 1mm以下 の細砂を含 む	外 淡茶褐色 内 淡黄褐色	軟 質	表 採	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
35 - 24		土師質皿	口 径 8.4 器 高 1.7	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 25	21 - 5	土師質皿	口 径 6.5 器 高 1.9	精 良	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	S - 15 黄褐色 砂質土層	
- 26		土師質皿	口 径 7.8	径1mm以下の細砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 27		上師質皿	口 径 8.7	径0.5mm程度の微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 28	21 - 6	土師質皿	口 径 8.1 器 高 1.5	径0.5mm以下の微砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	やや軟質	埋 土	
- 29		土師質皿	口 径 10.1	径0.5mm以下の微砂を含む	外 赤茶褐色 内 赤茶褐色	良 好	埋 土	
- 30	21 - 7	土師質皿	口 径 9.6 器 高 1.3	径1mm以下の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	埋 土	やや上げ底氣味である
- 31		土師質皿	口 径 8.8 器 高 1.45	良 好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	
- 32		土師質皿	口 径 9.5 器 高 1.6	良 好	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	
- 33		土師質皿	口 径 9.6 器 高 1.1	径0.5mm以下の微砂を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	
- 34		土師質皿	口 径 9.4 器 高 1.75	径1mm以下の細砂を含む	外 淡灰黃色 内 淡灰黃色	やや軟質	S - 15 埋 土	
- 35		土師質皿	口 径 8.6 器 高 1.75	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黃褐色 内 淡黃褐色	良 好	P - 17 埋 土	
- 36		土師質皿	口 径 9.0 器 高 2.1	径1mmの後の細砂を含む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	埋 土	
- 37	21 - 8	土師質皿	口 径 9.1 器 高 1.8	全表面を含む	外 淡茶褐色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	
- 38		土師質皿	口 径 9.4 器 高 1.65	径1mm程度の細砂を含む	外 淡黃褐色 内 淡黃褐色	軟 質	埋 上	
- 39		土師質皿	口 径 10.0	径1mm以下の細砂を含む	外 淡黃褐色 内 淡黃褐色	軟 質	淡灰褐色 砂質土	

表面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
35 - 40		土師質皿	口 径 10.0	径 0.5 mm 以下の微砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	表 採	
- 41		土師質皿	口 径 13.4	精 良 金雲母を含む	外 黄褐色 内 明黄褐色	良 好	埋 土	
- 42		土師質皿	口 径 14.3	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	溝状遺構 1	
- 43		土師質皿	口 径 14.3	径 1 mm 程度の細砂を含む	外 黄乳褐色 内 灰白色	やや軟質	埋 土	
- 44		土師質皿	口 径 14.0	径 1 mm 以下の細砂を多く含む	外 黄茶褐色 内 淡茶褐色	やや軟質	埋 土	
- 45		土師質皿 器 高 2.6	口 径 13.6	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
36 - 1		土師質皿 器 高 2.15	口 径 14.8	径 1 mm 以下の細砂を少し含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 2		土師質皿	口 径 16.6	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	軟 質	埋 土	
- 3	21 - 9	土師質皿	口 径 14.9	径 1 mm 以下の細砂を少し含む	外 灰黄褐色 内 灰黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 4		土師質皿	口 径 12.4 器 高 2.45	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	やや軟質	埋 土	
- 5		土師質皿	口 径 11.8	径 0.5 mm 程度の微砂を含む	外 赤褐色 内 赤褐色	軟 質	埋 土	
- 6		土師質皿	口 径 10.4 器 高 2.2	径 1 mm 程度の細砂を含む	外 赤褐色 内 赤褐色	軟 質	埋 土	
- 7	21 - 10	土師質皿	口 径 10.4 器 高 1.9	微砂を含む	外 赤褐色 内 赤褐色	良 好	埋 土	
- 8	21 - 11	土師質皿	口 径 10.2 器 高 2.0	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 赤褐色 内 赤褐色	軟 質	埋 土	
- 9	21 - 12	土師質皿	口 径 10.7 器 高 2.05	径 1 mm 以下の細砂を含む	外 赤褐色 内 赤褐色	軟 質	埋 土	
- 10		瓦 器 皿	口 径 10.4	精 良	外 銀黒色 内 銀黒色	良 好	埋 土	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎上	色調	焼成	出土地区		備考
							出土土層		
35-11	21-13	土師質皿 器高 2.1	口 径 9.0 径 1mm程度 の細砂を含む	外 黒灰色 内 黑灰色	良 好	Z Z			
-12		土師質皿 器高 2.1	口 径 10.5 径 1mm以下 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	軟 質	埋 土			
-13		瓦器皿 器高 2.45	口 径 7.8 精 良	外 灰黒色 内 灰黒色	良 好	埋 土			
-14		瓦器皿	口 径 9.6	精 良	外 暗灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土		
-15	21-14	土師質皿 口 径 8.8	精 良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良 好	r-17 埋 土			
-16		瓦器碗 高台径 6.0	精 良	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土			
-17		瓦器碗 高台径 5.8	微砂を含む	外 黑灰色 内 黑褐色	良 好	埋 土			
-18		瓦器碗 高台径 6.0	径 1mm以下 の細砂を含む	外 黑灰色 内 黑灰色	やや軟質	崖土上面			
-19		瓦器碗 高台径 5.8	精 良	外 灰黒色 内 灰黒色	良 好	埋 土			
-20		瓦器碗 高台径 4.1	良 好	外 黑色 内 黑色	良 好	埋 土			
-21		瓦器碗 高台径 5.9	径 1mm以下 の細砂を含む	外 灰色 内 白灰色	良 好	埋 土			
-22		瓦器碗 高台径 4.6	精 良	外 灰色 内 灰乳色	良 好	埋 土			
-23		瓦器碗 高台径 4.4	微砂を含む	外 黑灰色 内 灰黑色	良 好	埋 土			
-24		瓦器碗 高台径 4.6	精 良	外 暗灰褐色 内 暗灰色	良 好	埋 土			
-25		瓦器碗 高台径 4.6	微砂を含む	外 黑灰色 内 灰黑色	良 好	淡灰褐色 砂質土			
-26		瓦器碗 高台径 4.8	微砂を含む	外 黑灰色 内 黑灰色	良 好	埋 土			

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
36-27		瓦器輪	高台径 4.5	精良	外 暗灰色 内 暗灰色	良好	埋土	
37-1		瓦器輪	口径 12.2	精良	外 淡黒灰色 内 淡黒灰色	良好	埋土	口縁部内面に一条の沈線を施す
-2		瓦器輪	口径 14.8	精良	外 黒色 内 黒色	良好	埋土	口縁部内面に一条の沈線を施す
-3		瓦器輪	口径 15.5	径1mm前後 の細砂を含む	外 灰色 内 暗灰色	良好	埋土	口縁部内面に一条の沈線を施す
-4		瓦器輪	口径 14.3	径2mm以下 の粒砂を含む	外 明灰色 内 明灰色	良好	埋土上面	口縁部内面に一条の沈線を施す
-5		瓦器輪	口径 14.9	精良	外 灰黑色 内 灰黑色	良好	埋土	
-6		瓦器輪	口径 15.8	微砂を含む	外 灰黑色 内 灰黑色	良好	埋土	
-7		瓦器輪	口径 13.0	径1mm程度 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良好	埋土	
-8		瓦器輪	口径 16.2	精良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良好	淡灰茶色 砂質土層	
-9		瓦器輪	口径 12.8	精良	外 銀黒色 内 銀黒色	良好	埋土	
-10		瓦器輪	口径 14.4	微砂を含む	外 黒褐色 内 黒褐色	良好	埋土	
-11		瓦器輪	口径 15.8	精良	外 暗灰褐色 内 灰褐色	良好	埋土	
-12	22-1	瓦器輪	口径 12.4 高台径 3.0 器高 3.3	径2mm以下 の細砂を含む	外 乳灰色 内 乳灰色	やや軟質	埋土	器高指数 26.6
-13	22-2	瓦器輪	口径 13.0 高台径 3.4 器高 3.7	精良	外 灰黑色 内 灰黑色	良好	埋土	器高指数 28.5
-14	22-3	瓦器輪	口径 14.5 高台径 3.9 器高 4.6	径1mm以下 の細砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良好	埋土	器高指数 31.7
-15		瓦器輪	口径 14.3	精良	外 淡黒褐色 内 淡黄褐色	良好	埋土	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
37-16		瓦器 梶	口径 13.6	精 良	外 灰白色 内 灰白色	良 好	埋 土	
- 17	22-4	瓦器 梶	口径 15.1 高台径 4.2 器 高 3.8	精 良	外 淡褐色 内 淡褐色	良 好	溝状遺構 I	器高指数 25.2
- 18	23-1	瓦器 梶	口径 13.2 高台径 3.45 器 高 3.55	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 淡灰黒色 黄灰色 内 淡灰黒色 黄灰色	良 好	埋 土	器高指数 26.9
38-1		瓦器 梶	口径 16.3	精 良	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	埋 土	
- 2	23-2	瓦器 梶	口径 13.7 高台径 5.0 器 高 4.4	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 灰色 内 白灰色	良 好	埋 土	器高指数 32.1
- 3		瓦器 梶	口径 13.2	精 良	外 灰黑色 暗灰色 内 暗灰色	良 好	埋 土	
- 4		瓦器 梶	口径 15.5	径 1mm 前後 の細砂を含む	外 灰黑色 内 灰色	良 好	埋 土	
- 5		瓦器 梶	口径 14.9	精 良	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	埋 土	
- 6		瓦器 梶	口径 14.6	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 黑褐色 内 黑褐色	良 好	埋 土	
- 7	23-3	瓦器 梶	口径 14.4 高台径 5.6 器 高 4.2	精 良	外 灰色 白灰色 内 灰色	良 好	埋 土	器高指数 29.2
- 8		瓦器 梶	口径 14.8 高台径 4.7 器 高 4.3	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 暗灰色 内 白黃褐色	良 好	埋 土	器高指数 28.4
- 9		瓦器 梶	口径 13.9 高台径 3.4 器 高 4.45	径 1mm 程度 の細砂を含む	外 白灰褐色 内 白灰褐色	良 好	埋 土	器高指数 32.0
- 10		瓦器 梶	口径 14.4	精 良	外 黑灰色 乳灰色 内 灰色 灰乳色	良 好	溝状遺構 I	
- 11	23-4	瓦器 梶	口径 16.0 高台径 4.4 器 高 4.0	径 1mm 以下 の細砂を含む	外 赤褐色 淡茶褐色 内 赤褐色 淡茶褐色	良 好	r-15 埋 土	器高指数 25.0
- 12	24-1	瓦器 梶	口径 15.0 高台径 5.4 器 高 4.35	精 良	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	器高指数 29.0
- 13	24-2	瓦器 梶	口径 13.0 高台径 3.3 器 高 4.25	精 良	外 灰黑色 内 灰黑色	良 好	表 掘	器高指数 32.7

器面番号	岡坂番号	器種	法量(cm)	粉 土	色 調	焼 成	出土地区 出土土層	備 考
39 - 1	24 - 3	瓦器 楕	口 径 14.3 高台径 4.2 器 高 3.8	精 良	外 灰褐色 内 灰黑色	良 好	埋土上面	器高指数 26.6
- 2	24 - 4	瓦器 楕	口 径 14.8 高台径 4.75 器 高 4.5	精 良	外 灰色 内 灰白色	良 好	Q - 16 埋 土	器高指数 30.4
- 3		瓦器 楕	口 径 15.4	精 良	外 暗灰褐色 内 暗灰色 灰褐色	良 好	埋 土	
- 4	25 - 1	瓦器 楕	口 径 12.8 高台径 4.5 器 高 3.2	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 暗灰褐色 内 暗灰色	良 好	埋 土	器高指数 25.0
- 5		瓦器 楕	口 径 13.5 高台径 3.0 器 高 3.8	精 良	外 白灰褐色 内 白灰褐色	良 好	埋土上面	器高指数 27.5
- 6	25 - 2	瓦器 楕	口 径 14.4 高台径 2.9 器 高 4.35	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 灰黑色 内 暗灰色 灰黑色	良 好	表 探	器高指数 30.2
- 7	25 - 3	瓦器 楕	口 径 14.0 高台径 4.9 器 高 3.65	径 1 mm 程度 の細砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土	器高指数 26.1
- 8		瓦器 楕	口 径 13.9	精 良	外 灰黑褐色 内 灰乳黑色	やや軟質	埋 土	
- 9	25 - 4	瓦器 楕	口 径 14.3 高台径 4.4 器 高 4.3	径 1 mm 程度 の細砂を含む	外 灰黑色 白灰色 内 灰黑色	良 好	埋 土	器高指数 30.1
- 10		瓦器 楕	口 径 14.8	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 暗灰褐色 明灰色 淡灰褐色 内 明灰色	良 好	埋 土	
- 11	26 - 1	瓦器 楕	口 径 15.9	精 良	外 灰色 内 灰白色	良 好	埋 土	
- 12		瓦器 楕	口 径 13.9	精 良	外 黑色 内 灰黑色	良 好	埋 土	
- 13	26 - 2	瓦器 楕	口 径 14.2 高台径 3.8 器 高 4.2	微砂を含む	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	器高指数 29.6
- 14	26 - 3	瓦器 楕	口 径 14.6 高台径 4.6 器 高 4.3	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 暗灰色 内 白灰色	良 好	埋 土	器高指数 29.5
- 15		瓦器 楕	口 径 13.8	精 良	外 暗灰色 内 暗灰褐色	良 好	埋 土	
- 16	26 - 4	瓦器 楕	口 径 14.5 高台径 3.6 器 高 4.35	微砂を含む	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	器高指数 30.0

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
40-1	27-1	瓦器碗	口 径 16.5 高台径 3.5 器 高 4.75	精 良	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	やや軟質	埋 土	器高指数 28.8
-2	27-2	瓦器碗	口 径 13.3 高台径 3.7 器 高 4.5	精 良	外 灰黑色 内 灰黑褐色	良 好	埋 土	器高指数 33.8
-3	27-3	瓦器碗	口 径 14.3 高台径 4.3 器 高 3.3	精 良	外 灰黑色 白灰色 内 灰黑色	良 好		器高指数 23.1
-4	27-4	瓦器碗	口 径 13.4 高台径 3.8 器 高 3.5	微砂を含む	外 灰黑色 灰黑色 内 黄灰色	良 好	埋 土	器高指数 26.1
-5	28-1	瓦器碗	口 径 13.9 高台径 3.6 器 高 4.0	微砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	r-15 埋 土	器高指数 28.8
-6	28-2	瓦器碗	口 径 14.3 高台径 4.5 器 高 4.0	口 径 1mm程度 の細砂を含む	外 明灰黑色 内 明灰黑色	良 好	埋 土	器高指数 28.0
-7	28-3	瓦器碗	口 径 14.4 高台径 4.5 器 高 4.5	精 良	外 淡灰黑色 内 淡灰黑色	良 好	埋 土	器高指数 31.3
-8	28-4	瓦器碗	口 径 14.4 高台径 4.7 器 高 4.0	精 良	外 淡灰黑色 明灰色 内 淡灰黑色	良 好	埋土上面	器高指数 27.8
41-1		須恵器壺	底 径 8.8	径 1mm以下 の細砂を含む	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	
-2		須恵器壺	底 径 10.2	精 良	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	
-3		須恵器壺	底 径 13.2	径 2mm以下 の粗砂を含む	外 灰色 内 灰色	良 好	埋 土	
-4		備前燒窯	——	径 1mm程度 の細砂を含む	外 暗紫褐色 内 赤茶褐色	良 好	淡灰茶色 砂質土層	
-5		灰陶碗	口 径 10.0	精 良	外 灰色 内 灰綠色	良 好	埋 土	
-6	29-3	白磁碗	口 径 16.4	精 良	外 乳灰色 内 乳灰色	堅 細	s-t-16 埋 土	玉縁状の口縁部
-7	29-5	白磁碗	口 径 15.4	径 1mm以下 の細砂を含む	外 乳淡褐色 内 乳褐色	堅 細	埋 土	玉縁状の口縁部
-8	29-6	白磁碗	口 径 17.0	精 良	外 乳灰色 内 乳灰色	良 好	埋 土	玉縁状の口縁部

器面番号	団版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土品	備考
41-9		白磁碗	口径 15.4	径1mm以下 の細砂を含む	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	良好	埋土	玉縁状の口縁部
-10	30-1	白磁碗	高台径 5.8	精良	外 淡灰色 内 黄灰色	良好	埋土	
-11	30-8	白磁碗	高台径 7.2	精良	外 灰白色 内 灰乳色	良好	埋土	
-12	30-6	白磁碗	高台径 6.2	精良	外 淡青色 内 淡黄色	良好	s-15 埋土	
-13		白磁碗	高台径 6.0	精良	外 灰白色 内 灰白色	良好	埋土	
-14	30-9	白磁碗	高台径 5.0	精良	外 白灰色 内 淡灰綠色	良好	埋土	
-15	30-5	白磁碗	高台径 7.1	精良	外 乳灰色 灰白色 内 乳灰色	良好	埋土	
-16		白磁碗	高台径 5.3	精良	外 淡灰褐色 内 乳灰色	良好	埋土	
-17	30-4	白磁碗	高台径 6.4	精良	外 淡灰黄色 内 灰乳色	良好	t-16 埋土	
42-1		伊万里燒碗	口径 10.8	精良	外 淡灰青色 内 淡灰青色	良好	表採	
-2		伊万里燒碗	口径 12.4	精良	外 乳青色 内 乳青色	良好	P-16 黄褐色 砂質土	
-3	29-2	青磁碗	口径 13.8	精良	外 青綠色 内 青綠色	良好	淡灰茶色 砂質土層	
-4	29-8	青磁碗	口径 15.6	精良	外 暗黃綠色 内 暗黃綠色	堅紙	s-15 淡灰茶色 砂質土層	龍泉窯系
-5		青磁碗	口径 14.4	精良	外 淡青綠色 内 淡青綠色	良好	埋土	龍泉窯系
-6	29-4	青磁碗	口径 13.4	精良	外 淡青色 内 淡青色	良好	r-15-16 埋土	龍泉窯系
-7	30-2	青磁碗	——	精良	外 淡黄色 内 淡青色	良好	s-18 澱灰褐色 6	龍泉窯系

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土層	備考
42-8	30-3	青磁碗	高台径 5.7	精良	外 淡緑色 内 淡緑色	良好	淡灰茶色 砂質土層	龍泉窯系
-9		青磁碗	高台径 5.4	精良	外 淡緑色 内 淡緑色	良好	埋土	龍泉窯系
-10	29-7	青磁碗	——	精良	外 明灰色 内 明灰色	良好	淡灰茶色 砂質土層上面	
-11	29-7	青磁碗	口 径 10.4	精良	外 灰乳青色 内 淡黃綠色	良好	黃褐色 砂質土層	四耳壺
-12		白磁碗	高台径 6.2	精良	外 白青色 内 白青色	良好	埋土	
-13	29-1	青磁碗	口径	精良	外 淡緑色 内 淡緑色	堅緻	黃褐色 砂質土層	
43-1		須恵質鉢	口径 25.6	径 2mm 以下の粒砂を含む	外 蒼灰褐色 灰褐色 内 灰褐色	良好	s-15 淡灰茶色 砂質土	
-2		須恵質鉢	口径 24.0	径 3mm 以下の粒砂を含む	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良好	at-16 埋土	
-3		須恵質鉢	口径 20.0	径 1mm 以下の粒砂を含む	外 灰褐色 灰褐色 内 明灰色	良好	埋土	
-4		須恵質鉢	口径 24.2	径 1mm 以下の石英・チャートを含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良好	表採	
-5		須恵質鉢	口径 25.4	径 1mm 以下の石英・長石を含む	外 暗青灰色 内 暗青灰色	堅緻	埋土	
-6		須恵質鉢	口径 29.6	径 2mm 以下の粒砂を含む	外 灰黑色 灰色 内 灰色	良好	埋土	
-7		須恵質輪鉢	口径 31.8	径 3mm 以上の粒砂を含む	外 灰色 内 暗灰色	やや軟質	淡灰茶色 砂質土層	
-8		須恵質鉢	底 径 8.0	径 2mm 以下の粒砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良好	埋土	
-9		須恵質鉢	底 径 8.8	径 1mm 程度の粒砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良好	埋土	
-10		須恵質鉢	底 径 8.1	径 1mm 以下の粒砂を含む	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良好	埋土	

画面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出上層	備考
44 - 1		須恵質鉢	口 径 33.4	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 黒灰色 灰褐色 内 灰色	良 好	淡灰茶色 砂質土層	
- 2		須恵質鉢	口 径 33.4	径 3 mm 以下 の細砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土	
- 3		須恵質鉢	口 径 27.8	石英を含む	外 明灰褐色 内 明灰褐色	良 好	埋 土	
- 4		須恵質鉢	口 径 26.8	径 4 mm 以下 の粒砂を含む	外 灰褐色 内 灰褐色	良 好	淡灰茶色 砂質土層 上面	
- 5		須恵質鉢	口 径 29.2	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 黑褐色 灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土	
- 6		須恵質鉢	口 径 28.4	径 2 mm 以下 の粒砂を含む	外 暗灰褐色 内 灰褐色	良 好	埋 土	
- 7		須恵質鉢	口 径 25.0	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 黄灰色 内 黄灰色	良 好	8 - 16 埋 土	
- 8		須恵質鉢	口 径 24.8	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 灰褐色 内 褐色	良 好	埋 土	
- 9	31 - 1	須恵質鉢 器 高 11.7	口 径 28.2 器 高 39.2	砂粒を若干 含む	外 灰色 内 灰色	良 好	8 - 15 埋 土	口縁部は片口である
45 - 1		羽釜形土器	口 径 31.6 器 高 39.2	径 1 mm 以下 の細砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	良 好	埋 土	
- 2		羽釜形土器	口 径 22.2 器 高 27.6	径 1 mm 前後 の石英・長 石を含む	外 暗赤褐色 内 暗赤褐色	良 好	埋 土	口縁部は 2 ケ所以上穿 孔される
- 3		羽釜形土器	口 径 20.4 器 高 28.0	径 1 mm 程度 の長石・石 英を含む	外 黑褐色 内 灰黑色 明灰褐色	良 好	埋 土	
- 4		羽釜形土器	口 径 27.3 器 高 31.0	径 3 mm 以 下の粒砂を含 む	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	良 好	黄褐色 砂質土層	
- 5		羽釜形土器	口 径 25.0 器 高 30.2	径 3 mm 以下 の粒砂を含 む	外 茶黒色 内 茶黒色	良 好	溝状遺構 1	
- 6		羽釜形土器	口 径 23.9 器 高 27.0	径 1 mm 以下 の細砂を含 む	外 黑灰色 内 黑灰色	良 好	黄褐色 砂質土層	
- 7		羽釜形土器	口 径 25.0 器 高 29.0	径 1 mm 以下 の細砂を含 む	外 暗茶色 内 淡灰黑色	良 好	表 掘	

図面番号	図版番号	器種	法量(cm)	胎土	色調	焼成	出土地区 出土土層	備考
45 - 8		羽釜形土器	口 径 19.6 器 径 22.0	径1mm以下 の石英を含む	外 灰褐色 茶黒色 内 底灰褐色	良 好	埋土上面	
- 9	31 - 2	瓦質 羽釜形土器	口 径 17.6 器 径 20.6	径2mm以下 の粒砂を含む	外 淡黄褐色 内 淡灰黑色	やや軟質	埋 土	
46 - 1		備前燒鑿鉢	口 径 28.5	径1mm程度 の細砂を含む	外 黑茶褐色 内 黑茶褐色	良 好	埋土上面	口縁部は片口である
- 2		備前燒鑿鉢	口 径 28.2	径2mm程度 の粒砂を含む	外 茶赤褐色 内 茶赤褐色	良 好	黃褐色 砂質土層	内面にカキ目を施こす
- 3		備前燒鑿鉢	口 径 28.8	径3mm以下 の粒砂を含む	外 茶黒色 茶赤褐色 内 黑茶褐色 灰黄色	良 好	淡灰褐色 砂質土層	
- 4		備前燒鑿鉢	底 径 15.2	径5mm以下 の粒砂を含む	外 茶赤褐色 内 茶赤褐色	良 好	淡灰茶色 砂質土層	
- 5		土師質壺	口 径 28.2	径2mm以下 の粒砂を含む	外 黄灰色 内 淡茶褐色	良 好	埋 土	
- 6		土師質壺	口 径 32.8	径1mm前後 の石英・長 石を含む	外 暗茶褐色 淡茶褐色 内 暗茶褐色	軟 質	埋 土	内面にハケ目調整
- 7	31 - 3	土師質鍋	口 径 33.3	径2mm以下 の細砂を含む	外 灰茶褐色 内 灰茶褐色	良 級	r - 15 埋 土	内面にハケ目調整
47 - 1		常滑甕	口 径	径1mm以下 の細砂を含む	外 灰茶褐色 内 淡灰色	良 好	r - 15 埋 土	
- 2		陶質甕	口 径 28.2	径1mm前後 の石英・長 石を多量に 含む	外 黄灰褐色 内 淡黄褐色	軟 質	P - 15 埋 土	
- 3		土師質甕	口 径 33.0	径1mm以下 の細砂を多 量に含む	外 暗灰褐色 内 淡茶褐色	良 好	Pit 17	
- 4		陶質鉢	底 径 20.6	径2mm程度 の粒砂を点 々と含む	外 乳白色 内 乳白色	軟 質	埋土上面	
- 5	31 - 5	土師質火合	脚 高 5.8	径1mm以下 の細砂を含 む	赤 橙 色	やや軟質	埋土上面	
- 6	32 - 2	滑石片	残存長 9.9 厚さ 1.3 穿孔径 1.2		無茶褐色		埋 土	
- 7	32 - 1	滑石製石磚	口 径 24.4 器 高 9.7		暗茶褐色		埋 土	石磚を二次的に加工し ている

## 第 V 章 まとめ

### 萱野の略史

島田 竜雄

はじめに この小稿は、如意谷遺跡の歴史的な意味をさぐるため、遺跡の所在している萱野地区の歴史を概観するものである。幸い地区の推移については、すでに完結している『箕面市史』の随所で述べられているから、本稿では、これとの重複をさけつつ、必要最小の事柄について記ることにしたい。なお引用史料のうち出典等を省いたものは、すべて「勝尾寺文書」である。

さて、萱野の名称が知られる早い例は、平安時代の延長5年(927)制定の「延喜式」にみえる「草野駅」である。これを「かやの」と訓むことの当否はさておき、10世紀の編纂である『和名類聚抄』に載せる、摂津国豊島郡内の郷〈地方行政区画〉の一つに「馬家郷」がある。この郷が、のちの萱野郷にあたり、現在の萱野地区であろうと考えているが、詳しいことはあとで述べる。

**為那都比古神社** 延喜式の「神名帳」によると、豊島郡の神社五座が載せられている。このうち「為那都比古神社二座」とあるのが、萱野地区の白島に鎮座している為那都比古神社であろうと考えられている。二座別殿で祀られており、伝えられる祭神は「比古・比売」の二神である(同社「社記」)。事の正否はともかく、鎌倉時代の正嘉3年(1259)3月2日の「僧教忍起請文」に見える「当庄西・東天王」がこれであろう。当時は天王社といわれて東・西の別社に祀られ、地元住民からは、神文誓約を起請する神々として畏敬されていた。だが江戸時代に入ると、東天王社は「牛頭天王社」といわれて萱野郷十一か村の総社一の宮になり、郷内一円の崇敬を集めた。一方の西天王社は「大婦天王社」といわれ、白島・東西坊島・如意谷四カ村の共有神社であった(天保2年「白島村差出明細帳」)。しかし明治43年の神社合併で廃社され、祭神は牛頭天王社、つまり為那都比古神社に合祀されたから、以後二座相殿になった。

それにしても、比古・比売神を祀るときの同社の祭神は、社名が自ら表明しているように「為那」を氏姓とする人びとの「氏上=氏神」であったと考えられる。この「いな」を氏称する古い氏族に物部氏族の「猪名部造」がある。またこれと同族であることを自称し、「新撰姓氏録」の「摂津、未定雜姓」に收められている「為奈部首」がある。また萱野地区には「稻」を呼称する地名・村落も所在している。こうした駅家郷地域に「いな」氏族の氏神であり、彼らの守護神でもある「為那の神」を祀る神社が鎮座していることは、古くはこの地が彼らの本貫居住の地であり、為那氏族の故地であったと想定できるであろう。

それはそれとして、為那都比古神を祀るといわれた大婦天王社と、谷一つを隔てて西方に位置する如意谷丘陵の中腹からは、去る昭和41年1月1日、3世紀末の近畿式大型銅鐸一口が

出土している。そこで推論を重ねてみると、この銅鐸を共同体の宝器とし、地中に埋納して今日に伝えた氏族というものは、あるいは為那氏族ではなかったであろうか。

**大婦天王社** 江戸時代の元禄14年(1701)に刊行された『摂陽群談』によると、「大婦天王社、同郡萱野村大宮寺地主神」とある。これが、正喜3年の僧教忍起請文で知られる「西天王」であるが、また、「大宮」ともいわれた。明治の神社合併で廃社後の旧境内跡地は、いま個人の住地になっている。如意谷遺跡地の東北にあたり、およそ数町の近くである。

伝えられる祭神が比売神であることは、大婦天王の社名からしてうなづけるところである。だが享保20年(1735)の『摂津志』豊島郡神廟、為那都比古神社の条には、

白鳥村に在り、今天王と称す、萱野谷十村敬畏して祭を修す、寺あり、号して大宮と曰う、寺後に巨岩あり、自然三盤し、その高さ十三丈許りあり、名ずけて医王岩と曰う、この記事には混同が認められる。後述するように、高さ十三丈ばかりの巨岩を負う天王社は大婦天王社であり、これを奉祀する村々は前記したように四ヶ村である。そこで「萱野谷十村敬畏して祭を修す」する天王社は、比古神を祀る東天王社、つまり現在の為那都比古神社である。『摂津志』では明らかに両社を混同しているのである。

それはさておき、天保2年3月の白鳥村差出帳によると「大婦天王境内、堅六拾間横百式拾間」をはかる7200坪の神域があり、免税地であった。そこには社殿・拝殿・幣殿を構え、「高宅丈五寸、丹塗木鳥居」も建っていた。注目されることは、社殿の左方に「為那都比古社元文元辰年」と刻まれた石標一基が建てられている。当時、幕府の命をうけて、全国の古社遺跡の調査にあたった並河五市郎が建立したものである。この調査では、延喜式内の為那都比古神社が、比売神を祀る大婦天王社である、と判断したのである。

ところで、『摂津志』に載せる寺背の巨岩については、寛政年間刊行の『摂津名所図会』でも、

医王岩、寺の後にあり、自然石あり、高十三丈許、又の名薬師ともいう、攝州静カ麻、石の宝殿の類也、

と述べ、巨岩が医王岩、また薬師岩とも呼ばれていたことを記している。そして、現在、兵庫県内の国鉄宝殿駅の西方2kmに所在している巨石「石の宝殿」と同類であると断じてもいる。興味あることは、右に続けて「此所も大己貴・少彦名の二神生ますの地より医王岩と称すか、此二神は医道の祖也」と説明していることである。この巨岩が大宮の祭神、つまり大婦天王の生まれましたごろであると伝えられていたことは、注目されることである。

上古の時代にあっては、巨岩・巨石・巨樹・叢林・山丘などは、神の依りつく依代となり、人の側からすれば招代となつたのである。だが後世、神の常住する社殿がつくられる時代になるとこの依代も不用となり、社殿は人里に近く降って設けられたのである。とはいえ神は別格

であり、人にとっては畏敬される存在であるから、その常住する世界は人の住む俗界とは境を異にした。この大宮神社にあっても依代・社殿と村里に区別がなされ、若干の距離が保たれている。

それはさておき、比売神の大婦天王を祀る大宮神社の祭神は、後世に至って大己貴命と少名彦命であるとの所伝が生じた(『攝陽群談』)。女神から男神へかわったのである。こうした変化は、後で述べるように、薬師如来を本尊に迎えた大宮寺の創立以後のことであろうが、それにしても上記の二神は地主・農耕神であることは興味深い。属性の女神である生産機能が分化され、機能神として二神が誕生したのである。してみると、為那氏族の守護神として奉祀された時代はさておき、この神に生産の豊穣を祈り、二座の農耕神を生み出した人びとは、神社の前面に展開する集落に住み、ひたすら農業生産にいそしんだ農民であったに違いない。

それにしても、大宮の神が農耕生産の神であると信ぜられた伝統は永く保たれていた。江戸時代の天保2年(1831)3月の「芝村差出明細帳」に載せる、神社の大祭における神輿渡御の模様からも、そのことがうかがえるのである。略記して示そう。

大祭初日の9月14日には、大婦天王社境内の神輿殿から、牛頭天王社(比古神)へ神輿が移される。ここから出発した神輿は大婦天王社(比売神)に至り、同夜をここで送る。翌15日は、氏子村々の如意谷・東坊島・西坊島・白島四ヶ村を巡幸して疫御を終わり、再び神輿殿に納められるという。このとき「供奉の行列は白幣三拾本、神馬一疋、神社社僧十五人、村民悉く祭之」ったという。

**大宮寺と時原氏** こうした神を祀る大婦天王社に添って建立され、同社の神宮寺として開基されたのが医王山大宮寺である。同寺についても『攝陽群談』寺院の部に、次のように載せている。

大宮寺 同郡萱野村にあり、山号医王山と称す、宇多天王御宇、寛平四年壬子年、聖宝尊師開基之處なり、豊島郡司左衛門尉時原佐道宅について、当山に登り、守護の山神牛頭天王の教に隨順して、自ら薬師仏の像を彫刻して寺院を創建し、本尊に安置す、神の教をもって大宮寺と号す。

上記によると、平安時代の寛平四年(892)、聖宝尊師が、豊島郡司である時原佐道宅につき、当山に登り、神の教えにしたがって開基したのが大宮寺であるという。大宮寺草創の説話であるこの所伝もまた興味深い。その一つは、寺の本尊が薬師如来であるが、この仏はまた大己貴命・少名彦命の「本地仏」でもある。したがって、大婦天王社の神がこの二神であると考えられたのは、大宮寺の開基以後のことであるかも知れない。さらに注目されることは、同時の建立にあたって、時原氏という在地有力者が、密接にかかわりをもっていたことの読みとれることである。つまり、時原氏の財力を背景に、同氏の氏寺的な性格をもって建立されたであろう

ことがうかがえるのである。この時期における神宮寺創立の事情を察知するうえで、注意されるべき所伝ではある。

ところで、萱野地方の在地有力者かとも思える時原氏は、秦氏の系統である。『三代実録』

清和天皇貞觀5年(863)9月5日の条に、

山城国葛野郡人 図書大允從六位上 秦忌寸春風

但馬少目正八位上 秦忌寸諸長

等三人、賜姓時原宿弥、基先秦始皇之後也

とみえる。また同書の光孝天皇仁和3年(887)7月17日の条にも、

在京人 從五位下行采女正 時原宿弥春風 賜朝臣姓(後略)

ともみえるから、豊島郡司の時原佐道は、この系統の家柄であったかもしれないである。

だが、秦氏といえば、池田秦氏を無視するわけにいかない。『和名類聚抄』に載せる豊島郡の郷に「秦上・秦下」郷がある。これは、池田市域を本貫に栄えた秦氏の住地であることから命名されたのであり、今に「畠」の地名も伝えられている。このうち秦下郷は旧箕面村地域をも含んでいたから、駅家郷(萱野地区)とは互いに隣り合ってもいたのである。この秦下郷域に所在している後期古墳の多くは、秦氏らの墳墓とも考えられている。中でも池田市才田の鉢塚古墳は規模において、蘇我馬子の墓といわれる飛鳥の石舞台古墳に比肩でき、この地における秦氏の勢力のほどがうかがわれる所以である。そこで、上古における池田秦氏の繁栄ぶりを思うと、豊島郡司をつとめた時原氏は池田秦氏の系統に連なり、駅家郷を本貫にしていたことも考えられるのである。しかし確かな根拠もないこととて、ここでは両様の推測を示して後考を待ちたい。

さて、神の教えにみちびかれて大宮寺を開基したと伝えられる聖宝は、真言宗の開祖空海の法孫にあたり、修驗道の重鎮として活躍した高僧である。有名な醍醐寺の「清瀧会」は、この聖宝が貞觀16年(874)に、笠取山地主神の示現を得て発見した「醍醐水」に発祥するという。それから六年後の元慶4年(880)には、清和太上天皇の勝尾寺參籠がなされている。この清和帝の側近にあり、付法第一の師と仰がれた真雅上人は、ほかならぬ聖宝の尊師でもあった。しかも、この勝尾寺に入山し、のち第四代の座主に補され、後年淨土教の開祖といわれた訖証如は、豊島郡司時原佐道の子であった。謙倉時代の『元亨訖書』卷第九に所伝がみえる。

訖証如 姓時氏時原氏也 摂州豊島郡史佐通之子也

訖如の没年は定かでないが、入寂の地勝尾寺の後背山地の頂丘には、訖如供養塔と伝える砂岩づくりの、古様をとどめる宝篋印塔一基が遺存している。そして、清和帝の勝尾寺巡幸から12年後の寛平4年に至り、訖証如の父時原佐道が壇越となり、真雅の高弟聖宝によって大宮寺が開基されたのである。

**草野駅** さて山麓の北萱野から、転じて目を南萱野に移してみよう。萱野台地の南縁を山陽道(西国街道)が東西に走り、草野駅がおかれていた。

駅については、令制で三十里(当時の一里は六町であるから、三十里は五里にある)ごとに駅家を設け、そこに旅用の諸具を備え、駅長・駅子を常駐せしめて駅務にあたることが定められた。各駅家に配された馬が駅馬・伝馬といわれるもので、馬鈴をもった政府公用の官吏に供した。中央と地方を結ぶ交通手段であるが、緊急非常のときには軍馬としての活動も可能であった。

このように、陸上交通の重要な施設である駅家が、萱野地区にも設けられていた。延喜式卷二十八・諸國駅伝馬の条にみえる。

#### 摂津国 草野 須磨各十三疋 萩屋十二疋

摂津国には三駅が置かれていた。須磨駅は現在の神戸市域、萩屋駅は芦屋市域に設けられていたのである。草野駅は『和名類聚抄』に載せる豊島郡駅家郷と一体をなすであろうから、のちの萱野郷、現在の萱野地区に設置されたとみてよい。駅馬13頭を常置し、公用に備えた。駅所であるから、山陽道筋の南萱野地区に設けられたであろう。ここには、東から今宮・西宿・芝・東橋・西橋の集落が所在している。そのいずれかに草野駅が置かれたであろうが、今までのところでは駅家も不明である。だが駅家であるから、街道ぞいの地であることは確かである。そこで試みに、あえて駅所の旧地を推測すると、現在の芝地籍で、萱野小学校が建つ高台地がそれである、と考えている。その理由は、一つには旧西国街道の位置の状況、二つには、校舎の東に所在している溜池が「木戸池」という名称である、等々にある。とはいへ確かな物的証拠はないので、ただ推測したことである。

それはさておき、駅務を管掌する駅長については、駅戸の中で家が富み、資力や才幹ある者を登用し、在任中は謀役の一切を免除されると定められた。したがって、こうした条件を満たす駅戸の在地住民といえば、自ら地元の有力者層に限定されることになる。試みに、草野駅長の適格者を駅家郷に求めてみると、豊島郡司を輩出し、大宮寺という氏寺を擁する秦氏系統の時原氏こそ、もっとも有力な候補者として目されることにもなる。いずれにしても、このような在地有力者の中から任用された駅長によって草野駅務が管掌されたのである。そして駅の雜務にしたがう駅子については、駅長の私的整權に任せられたが、駅子は、駅の徭役を免ぜられていた。

**垂水西牧と萱野郷** 草野駅の設けられたことから駅家郷といわれた地域は、その年次を確定しがたいが、摂関家藤原氏の所領莊園に組みこまれ、垂水牧に属していた。垂水牧は、千里丘陵とその周辺一帯にわたる広大なもので、島下郡の牧を東牧、豊島郡のそれを西牧といった。しかし、この巨大な牧の成立年次や事情はよくわからない。

垂水牧の初見は平安時代の康治5年(1062)正月のこと、『康平記』に載せる「殿春日詣」の記事である。このとき垂水東牧と西牧では、春日詣にともなう饗應用の「屯食」を負担しているが、このほかの牧役負担「白土召」と「御詠松召」もあった。このように垂水牧では11世紀後半の時代になると、牧本来の機能である牛馬の飼養もさることながら、屯食以下のような「雜役」をも負担する「莊園」にかわっていたのである。

ところで、垂水牧に所属して雜事雜役を負担していた住民は、当時「牧子」とよばれていたようである。だが、この牧子といわれた住民は、たんなる馬飼や牛飼ではなかったはずである。むしろ、藤原氏という權門勢家に「牧役」をつとめることで「牧子」となり、その關係によって、權門との間に名目的な私的從属關係を結んだ住民である。こうした〈牧子〉というものは、本来の生業や住地をかえることなく、比較的に負担の少ない牧役をつとめることで、國家からの重い雜役を免除され、また國司の追及にたいしても、人身的な保護を得ることができるなどきままざの特權を得られたのである。當時、このような特權をもつ私的從属民を一般に「寄人」といった。

この寄人の獲得をとおして、權門貴族の私的所領である莊園が拡大されていったのである。したがって当地方の有力住民たちは、當時最高の權門であった摶闇家の權威を仰ぎ、身分的な特權を得るためにには、進んで垂水牧の牧子寄人になっていったであろう。しかし、住民のこうした動向というものは、つまるところ自己の權益を守り、國家からの収奪と強圧からのがれるための、保身の手段でもあったといえよう。

それはそれとして、垂水牧が莊園として発展するためには、寄人とともに莊田を獲得しなければならない。莊園といいうものは、もともとは公領である既墾・未墾の地を割いて設定されるのであるが、それは、國司や民部省・太政官の承認を得て成立し、前者を國免庄、後者を官省符庄という。ところが垂水牧の場合は、公領の「加納」化を軸にして行われたようである。この加納といいうのは「出作」とならんで、この時代の莊園擴張の方法である。一般には、拡大の核となる「本免田」があって、それとの由緒などによって、付近の公領地を莊地に併合されたものを「加納」というのである。そこで垂水牧においては、本免田に相当する本来の牧地があり、そこへ有力住人が寄人となっていく動きを底流にして、國司の協力によって周辺の公領地の加納化が進められたのである。當時最高の權門である藤原氏にとって、公領の加納化を國司に認めさせることは、きして困難なことではなかったはずである。元暦元年(1184)9月の「垂水牧西貢野郷百姓等解狀」に「當御牧は牧内・加納相交り云々」と述べられているように、本来の牧と加納から成り立っていたことがわかる。

垂水牧が成立し、摶闇家の所領莊園として発達するなかで駅家郷が姿を消し、かわって「萱野郷」が出現した。公領の駅家郷地域が加納となり、垂水西牧に組みこまれたからであろう。

この駅家郷については、先記もしたように草野駅が所在しており、駅馬13疋を常置して旅用に備えるなど、山陽道筋陸上交通の要地である。このような交通輸送の施設や要地は、また莊園経営にとっても欠くことのできないものである。一般に「散所」といわれるものがこれであり、莊園年貢物資の集散地となり、交通運輸の拠点ともなる、いわば「私的な駅家」としての機能を果たすものである。したがって垂水牧が莊園として発展し、雜役の「御読松」や「白土召」などの莊園年貢を一括管理し、これを京上するなど、垂水西牧を經營する上では、是非とも莊域内に散所を設置し、あるいは確保しなければならなかつたであろう。そこから、草野駅を擁する駅家郷の地が、公領から割かれて摂関家所領に組みこまれてしまった。そして草野駅の機能は垂水西牧の散所として転用され、郷名も改められて益野郷を称したものであろう。

ところが12世紀に入ると、垂水牧は春日神社の社領にかわつた。領家藤原氏が、垂水牧一門の地を、一門の氏神である春日社に寄進したからである。しかし摂關家政所による支配は依然として維持されていた。先きに触れた益野郷百姓らの解状に「皆これ殿下政所の御進止なり」と述べられている。

**山林經濟の発達** 箕面地方を代表する古刹であり、益野郷とも寺域を接する勝尾寺は、広大な寺領山林を擁していた。鎌倉時代の寛喜2年(1230)後正月27日の「勝尾寺四至注文」によると、東は御室御領の泉原(茨木市)と綾小路家領の栗生山、南は摂關近衛家領の萱野山、西は右馬寮豊島牧、北は高山(豊能町)と接していた。この境界に四天王・四大明王を埋納した勝示石藏八カ所が造られており、八天石藏といわれ、今に伝えられて國の史跡に指定されている。

すべて「百町」といわれる寺領山村は、本来、勝尾寺という宗教世界を莊嚴するため占定された聖域である。だが鎌倉時代に入ると事情は急変してきた。その具体的な変化は、麓住民らによる寺領山林内の伐木採取であり、これを制止する勝尾寺守僧との間に紛争がおこり、双方の対立が激化したことである。なかでも安貞・寛喜年間(1227~31)における右馬寮豊島牧住人、あるいは益野郷民らによる寺領山林内の伐木に端を発した相論は、境界論に発展した。このうち前者については中央から実檢使が下向し、つぶさに検分がなされて、前記の境界四至が確定された。そこで寛喜2年4月20日には太政官符も下されて一件落着した。このとき、寺領侵犯の根本とされた豊島牧住人で、かつ牧沙汰人の左衛門尉経真は改易された。この際に築かれた勝示が八天石藏である。

この時期、益野郷民らも寺領山林に立入って伐木採取していたが、その際、住民の「かま・よき」を守僧が奪いとったという。これにたいして益野郷政所から、年来入山してきた慣習を制止するとは何事か、ましてや住民の鎌・斧を奪い取るとは未僧有の僻事であろう、と抗弁されている。しかし寛喜2年12月に至り、益野郷領家近衛基通政所の下文があり、勝尾寺四至

内での伐木殺生を停止すべし、と命ぜられたのである。こうして、安貞・寛喜年間の勝尾寺と麓住人らの間でおきた境界相論はひとまず結着した。

ところで、この事件で注目されることは、この時代の山林用益というものが、たんに自家消費のための用益にとどまらず、むしろ、商品的経済の傾向を強めてなされたことである。それがまた、この地方での山林用益にかかわる紛争をもたらし、相論をひきおこす原因にもなったのである。次の書状はこのことをよく示している。読み下してみよう。

萱野郷民売木の事、見合わすに隨て取らるべく候由、方々沙汰人一同、下知を加え候了んぬ、但、郷民申す如くんば、市木を出さしめ候事、当郷一所に限らず、近隣村々その隠れなく候の処、萱野郷に限り、かくの如くの御沙汰候条、別の子細候かの由(後欠)

萱野郷民が伐木するのは、自家消費のためだけではなく、「売木」や「市木」のためであったこと、これはまた当時、萱野郷だけのことではなく、近隣の村々でも隠れなく公然と行われていたことが知られる。実際のところ、都に近く、山陽道にそった当地では、木材などは商品化されやすかった。それだけに、商品化を目指した大規模の伐木採取が、住民自身の活動として行われたであろう。

また、当地方における木材の需要は莊園年貢の面からも知られる。先述もした『康平記』にみえる垂水牧雜役の一つ「御読松召」がそれである。都市生活をおくる莊園領主にとって、照明用の「松明」などは必需品である。それが垂水牧に課せられる雜役の一つでもあったから、当地方は、その重要な供給地でもあったに違いない。

さらに箕面地方では炭の生産も大規模に行われていた。炭の生産が具体的に知られるのは垂水東牧の栗生村である。欠年ではあるが、鎌倉時代と考えられる「栗生村実検名寄帳」によると、国衛領栗生村の12の「名」が負担する「炭年貢」は342籠にものぼっている。攝津国衛領のなかでは炭の重要な供給地であった。今のところ萱野郷では炭関係を見出しえない。だが江戸時代の元禄2年(1689)の絵図をみると、栗生村との境界山中に「炭窯廿三あり」と明記してある。萱野郷でも炭の生産のなされたことは十分に考えられるのである。

それにしても、この地方では木材などが商品化され、大量の需要を生み出していったことはとりもなおさず、当地方の村落や住民の経済的成长を物語ることである。とはいえ、その商品経済への参加が、ただちに全体の経済的向上を意味するわけではない。むしろ、住民間の経済的格差をもたらし、貧富の分解を促進助長する要因にもなった。しかし一方では経済的な成長をとおして、旧来の諸関係を変質させ、あるいは解体していったのである。萱野郷の住民が、商業的林業を発展させるほどに、彼らは商品生産者としての独立性を高め、意識や行動も従来の枠から外れていった。

**在地の有力者** 鎌倉時代の萱野地方は、その長い歴史の上で、特筆に値するほど商業的林業

が盛行した。その具体的な姿は、前項で述べたように、郷民による売木・市木という経済活動であり、そこから未曾有の境界相論をひきおこしました。だがしかし、こうした活動の中心となり、売木・市木を現実に荷った郷民というものは、一部の在地有力者であり、一方では名田経営に携わる名主住民であったと考えられる。実際のところ、鎌倉時代の中末期から南北朝・室町期になると、在地に根を下ろした有力住人が史料の上に數多く登場してくる。

たとえば、建武元年(1334)2月の「近衛家領居住勝尾寺僧交名注進案」によると、萱野庄(郷)には「宰相房義明」と「同兄掃部助義持」という人物が居住していた。このうち義明は庄内に「名田畠」をもつ名主である。また兄の義持は「萱野庄沙汰人」でもあったから、ともに萱野庄内切っての有力者であった。嘉暦元年(1326)11月25日の「田地売券」をみると、端裏に「萱野河原殿、源義持也」と記るされている。在地では「源」姓を名乗り、かつ「殿」の敬称でよばれる土豪であった。ともに北摂の名刹勝尾寺に僧籍をもつ寺僧である。とくに義明は「宰相房」といわれるよう、この時期の勝尾寺経営の中心にあって、寺領の拡張、寺運の隆昌に貢献した第一人者であった。このように、萱野郷内屈指の有力名主である彼らはまた一方では僧籍をあわせもつ住民であった。いうなれば彼らは二つの顔をもつ人物である。しかし一人の人物が「聖・俗」両界に住することは特異ではなく、むしろ、中世という社会では一般的なことでもある。

この複顔をもつ人物が、如意谷遺跡の所在している地区でも知られる。鎌倉時代の文永元年(1264)7月2日の「法橋經朝注進状」にみえる「如意谷左衛門入道<sup>ノミコト</sup>」である。この如意谷という地名を氏称する入道宗内の名は、これより先きの承久2年(1220)12月7日の「田地売券」でも知られる。この時彼は、萱野西庄の莊官中臣貞元から、同庄法泉寺甘条九里十一坪に所在している田地一反歩を、直米三石一斗で買得しているが、それは「名主職」であった。このように百姓身分である宗内はまた「左衛門」と称し「入道」を号してもいた。したがって宗内自身は仏門に帰依する一方では、衛門府にも所属しており、いうなれば百姓・仏門・衛門士という複雑な身分・顔をあわせもっていた人物である。おそらく彼れ宗内は、この複雑な立場を巧みに使いわけ、あるいは利用しながら、自らの基盤を培っていく、地名を氏称する在地の有力者に成長していったのであろう。鎌倉時代における萱野地方の経済的発展、具体的には商品的林業の盛行ということは、つまるところ、こうした在地住民の活動と表裏をなし、相關するのである。

## 如意谷遺跡の出土遺物

藤井直正

### 1. はしがき

箕面市如意谷といえば、昭和43年1月1日、現在、日本住宅公団如意谷第1団地となってい  
る北摂山地の一峯の斜面から、一個の銅鐸が出土した。猪名川・武庫川の流れる西摂の地域は  
銅鐸分布の密集する地域として知られているが、この猪名川に流入する千里川の上流にあたる  
箕面市のー地点から銅鐸が出土したことは、この地域全体の弥生文化の様相を考える上で重要  
な資料となるものとして学界の注目を集めた。その後、西摂の地域にふくまれる兵庫県宝塚市  
<sup>註1</sup>中山で、昭和17年に二個の銅鐸の出土していることがわかり、はじめてそれを実見することができ  
た上、世に紹介することになったことも奇しき因縁である。

昭和51年になって、日本住宅公団では、さらに隣接する斜面一帯を開いて第2団地を造成する計画が進められた。先年、銅鐸が出土していることでもあり、付近に弥生時代の遺跡の存在も予想されることから、敷地全体にわたる試掘調査が<sup>註2</sup> 大阪府文化財センターによって実施された。この結果、山間部においては目立った遺構等は検出されなかったが、かえって現在の宝珠院の西側に予定されている工事用進入路の敷地で歴史時代の遺構及至遺物が検出された。<sup>註3</sup>

この進入路予定敷地の全面発掘調査は、箕面市教育委員会を主体として「如意谷遺跡調査会」を組織し、昭和52年7月から8月にかけて実施した。幅11m、長さ90cmという限られた面積であったが、調査区域の中でもとくに北半部では、多数の柱穴や溝状遺構、池状の落ち込み等の遺構が検出された。出土遺物から平安～鎌倉時代と考えることができたが、その性格等については不明確のまま、「如意谷遺跡」として記録に止めることとした。

昭和55年度になって、この西側に隣接する広い敷地を開削して小学校が建設されることになり、全面にわたる発掘調査を実施することになった。前回では不明確であった遺構の性格や、その他さまざまの課題を明らかにする上においても、今回の調査にかける期待は大きく、また関係者一同が細心の注意を払って臨んだことはもちろんである。

調査によって検出された遺構については、別稿でくわしく述べられていることがあるが、二回の調査を通じて検出することのできた遺構ないし本遺跡の性格についての諸問題を、限られた種類と数量ではあるが、出土遺物の上から考えてみようというのが本稿の主題である。本遺跡は、後世において加えられたと考えられる土木工事等によって、遺構自体が著しく削平されており、そのために出土遺物は僅少で、しかもほとんどが破片であり、個数も少ない。しかし、屋瓦や土器・陶器の中に重要なものがあり、また滑石製品のように限られた遺跡にしか見つか

っていないものがふくまれている。

本稿では、これらの遺物を通して遺跡の性格を少しでも明らかにするとともに、本遺跡出土遺物の示す年代、すなわち古代末期から中世にかけての遺物のあり方と、当代における生産と流通について考えて見たいと思う。

註1.藤澤一夫氏「箕面谷鋼鐸」(『箕面市史図鑑』所収、昭和49年3月)

2.藤井直正・田代克己・島田義明氏「宝塚市中山出土の網鐸」(『宝塚市文化財調査報告』第8集、昭和51年3月)

3.国東和雄・畠暢子氏「箕面市如意谷における埋蔵文化財の調査」(『大阪文化誌』第3巻第3号、昭和54年5月)

## II. 出土遺物の検討

昭和52年度における第一次調査、それに昭和55年度における第二次調査にしても、本遺跡からの遺物の出土量はきわめて少ない。遺構は予定敷地の全体にひろがっているが、遺物を含む土層そのものが薄く、遺物の大半は遺構の中でも落ち込んでいる部分に存在していた。このことは、本遺跡を含めて、この地域全体が、中世以後のある時期に、かなり広い範囲にわたって、しかも大規模な土地開発等が行なわれたことを物語るものであり、また開墾や耕作等によって遺構自体も削平され、上面に存在していたはずの遺物のほとんどが失われてしまったということが考えられるのである。

ところで主要な遺物としては、遺跡の全体にわたって出土した土器・陶器と、第Ⅰ区の土塙内で検出した完形の巴文端丸瓦、第Ⅱ区に散らばっていた蓮華文端丸瓦片・端平瓦片のほか若干の石製品・錢貨等をあげることができるに過ぎない。しかし、陶器の中には当時限られた地域と場所にしか出土しない綠釉陶器片や、東海地方でしか生産されていない灰釉陶器が、共に小片ではあるが検出している。また当時にあっては高級品であったと見られる中国製の青磁・白磁がかなり大量に出土していることや、滑石製品のように、原石の採取地が現在の長崎県西彼杵半島に限られ、全国的に見てもある限定された地域と遺跡にしか出土していないという特殊な遺物が見られるのである。

こうした出土遺物は、それ自身さまざまな問題をもっているのであるが、それに加えてこれらの出土遺物によって、本遺跡がどういう性格であったかということをある程度考えることができるるのである。

ここではそうした問題について、個々の遺物についての検討を加えながら、問題の所在をたどって見たいと思う。

### 1. 屋瓦

本遺跡から出土した屋瓦の資料としては、第Ⅰ区の土塙1内に包含していた完形の端丸瓦1点（第55図-1、図版34-1）と、第Ⅱ区斜面埋土に散在していた端丸瓦片2点、端平瓦片3

点と、棟端飾板片・隅木覆板片各数点がある（第56図—2～5、図版34—2～5）。

まず、第Ⅰ区出土の端丸瓦は、まったくの完形品で、ビットの中に飾板面を東に向かた状態で出土した。飾板面の直径12.5cm、長く尾を引く右回りの巴文を内区に、細かい珠文26個を配した外区から成る。良質の胎土が用いられ、青灰色を呈する焼成の良好な瓦で、古い屋瓦の製作法すなわち登り窯で焼成された鎌倉時代の端丸瓦と考えられる。

第Ⅱ区出土の屋瓦は完形品ではなく、いずれも小片である。端丸瓦2点のうち1点は蓮華文、1点は巴文である。また端平瓦3点のうち1点は飾板面一ぱいに唐草文を入れたもので、復原すると幅21cmの大型になる。もう1点は先のものより疎らな唐草文で原形はわからない。さらにもう1点は界線の中に大きな珠文を配した端平瓦の右端の部分である。

次に棟端飾板は、鬼面を文様にしたいわゆる鬼瓦であるが、原形はわからない。隅木覆板は、前面に当たる部分の左端しかのこっていないが、この時期に限定すると出土例がきわめて少ない。

これら一群の屋瓦片は、共通して黝黒色を呈し、焼成温度の低い半焼けという感じである。胎土・焼成・色調が共通していることから同一の窯で生産されたものと考えられ、年代は12世紀、平安時代後期と見られる。このうち端丸瓦は、同窓ではないが弁の手法によく似たものが兵庫県明石市魚住の古窯址から出土している。また端平瓦も、その唐草文の特徴から播磨系の屋瓦である可能性で大きく、こうした点から第Ⅱ区出土の一群の屋瓦が、魚住の古窯と言いつけることはできなくとも、播磨国所在のいざれかの古窯で生産され、それが当地にもたらされたものと考えられるのである。<sup>註1</sup>

本遺跡出土の屋瓦は、点数も少なく、また検出した造構と直接結びつくものでなく、いわば二次的な状態で出土したものである。従って、これらの屋瓦が本来使用されていた場所、すなわち建築の所在地はこの場所ではなく、他の何れかの場所から土砂と共に搬出されたと考えるのが妥当であろう。このことについては後に述べることとする。

## 2. 土器

本遺跡から出土している土器としては、土師質の皿・鉢・甕・鍋・瓦質の椀・皿・土釜・火舎、須恵質の鉢・壺等がある。

須恵質の鉢は、口縁部の破片だけでも20点以上が出土している。そのうち第44図—9は復原することができたが、概ね口径28cm、高さ12cm程度、口縁の一部所に注ぎ口をつけたいわゆる“片口”<sup>すきぐち</sup>で、淡い灰褐色を呈した粗製の鉢である。この器形に線ぼりのきざみをつけると捺鉢<sup>すりはち</sup>になるが、これには刻み目ではなく、ふつう練鉢とよんでいる。

これと同じ器形、焼成手法をもつ鉢は、畿内地方の遺跡からかなりの数量で出土しており、平安京内の諸遺跡、さらに遠く若狭に近い湖西地方にまで運ばれていたことが判明している。

そして、この形態の鉢は、昭和54年度に兵庫県教育委員会によって発掘調査の行なわれた兵庫県明石市魚住に所在する古窯址群で生産されたことが明らかにされている。従って本遺跡出土の20点以上に上る鉢は、魚住の古窯址からもたらされたものであると考えられるのである。

魚住の古窯址では、鉢のほかに甕も生産している。本遺跡からも、数点の甕の破片が出土しており、それらを見ると、口縁部から胴部にかけて施されているタタキの圧痕や製作手法の特徴から、これも同様に魚住の古窯址で生産された製品である可能性が大きい。

### 3. 陶器

陶器としては、常滑の壺・擂鉢・備前の壺・擂鉢・丹波の壺等がある。いずれも破片で完形のものはない。

これらの陶器は、本遺跡に限らず府下一円あるいは畿内地方の中世遺跡から出土する標準的な遺物であり、一般的な住宅もしくは寺院において使用する雑器として生産されたものである。甕は穀物の保存、あるいは水・酒類の容器として、擂鉢は味噌・米等を擂るための道具であったことはいうまでもない。これらの他に綠釉陶器1点と数点の灰釉陶器片がある。

### 4. 磁器

磁器としては、これも小片であるが青磁の碗・皿・盤、白磁の碗・皿がある。いずれも13~14世紀の中国宋代から元代の製品で、日宋貿易、日元貿易によって大量に日本にもたらされたものである。

### 5. 滑石製品

本遺跡からは2点の滑石製品が出土した。その一つは、ふつう滑石製石鍋とよばれているもので、約4分の1程度の、口縁部から胴部にかけての破片であるが、復原すると直径24.4cmの大きさとなる。口縁部の縁辺に段が付けられていて、本製品が蓋を伴っていた可能性があり、滑石製石鍋の中ではめずらしい形態をもった資料である。もう一つは同じく滑石製で、おそらく原形は長方形であったと見られる厚さ1.3cmの板状の製品で、上部中央に直径1.2cmの孔が穿たれている（第47図-6、図版32-2）。

これらの滑石製品、とくに滑石製石鍋は、全国的に見ると、その出土する範囲には限られた地域性があり、遺跡数も少なく、一つの遺跡から出土する個数も僅少という、きわめて特殊な性格をもつ遺物である。従来きほど注意を払われた遺物ではないが、後にこの問題を取り上げて見たいと思っている。

- 計1.大阪府下における渋木覆板の出土例としては、河内鳥含寺跡で出土している奈良前期のもの（『河内新堂・鳥含寺跡の調査』『大阪府文化財調査報告書』第12輯、昭和36年所載）と、河内若江寺跡で出土している謙倉時代のもの等がある。
- 2.魚住古窯址調査事務所から刊行された『魚住古窯ニュース』9-10号（昭和54年10月）の表紙に拓本がのせられている。
- 3.上原真入氏『古代末期における瓦生産体制の変革』（『古代研究』13・14、昭和53年5月）

### III. 遺構・遺物とその性格

今回の調査によって検出した遺構については、本文においてくわしく述べられており、別に建築中の立場から青山賢信氏によって考察がなされている。

第Ⅰ区においては、多数の柱穴や溝状遺構があり、柱穴の中には栗石を伴うもの、柱根をのこすものもあって、建造物の存在が考えられるのであるが、その規模、構造等については、検出した遺構からは明確にできない。第Ⅱ区についても同様で、全体として遺構の残存状態が良好でないため多くの問題をのこす結果となった。

ここでは、前節に記した本遺跡出土の遺物を通して可能な限り本遺跡の性格をとらえることにしたい。

まず第Ⅱ区では、量は多くないが屋瓦の一群が出土した。端丸瓦・端平瓦から見て平安時代後期の屋瓦である。その出土状態は二次的堆積と見られ、中世以後における土地の変動によって、元来この場所に存在した遺構が擾乱されたことによって堆積した場合と、他のいすれかの場所から運ばれた場合とが考えられる。今回の調査区域では、どこからも明確に寺院に伴うと見られる遺構は検出されなかったが、この屋瓦群の存在をどのように把えるかということが一つの課題である。

第Ⅱ区のすぐ上には、建物は新しいが観音堂がある。ここには如意輪観音がまつられ、これが「如意谷」の地名のおこりと伝えられている。遺跡はその前面にひろがり、「寺ノ前」という字名もこれに関連するものであろう。また第Ⅰ区、すなわち本遺跡の東に接して宝珠院が所在している。というよりも遺跡自身がこの境内をふくむ区域にひろがっていることも予想される。宝珠院が現在地に建立された年代は不明であるが、中世以前にさかのぼることはできないよう思われる。また、遺跡の所在地から北へ、谷を上ったところは、現在では樹林におおわれているが、いくつもの平坦面があり、ここに寺院が所在したことも予想されるのである。

ところで、如意谷遺跡の所在する斜面を南に下ったところには、旧西国街道が東西に通じていて。この西国街道は、京都から北摂・西摂の諸地域を経由して中国・西国に通じる重要な道であった。近世においては、現在の箕面市瀬川に、山城国山崎、摂津国に入つて芥川・郡山につぐ宿場として賜わった。また、戦国時代には、この街道に沿う勝竜寺・高槻・茨木・池田・伊丹に、それぞれ戦国の武将が居を構え、城廓を構えたことも交通の要衝であったことを物語っている。

古代にさかのぼると、この西国街道は山陽道そのものであり、『延喜式』兵部省の項に見える「芦野駅家」は、本遺跡の所在する現在の箕面市芦野の地におかれていたと考えられている。一方、箕面川・千里川は下流で猪名川と合流するが、この猪名川が神崎川と合流するところが

尼崎であり、また西国街道をさらに西へ進み武庫川を下ったところが西宮である。尼崎・西宮は、時代によって海岸線に変化があったが、大阪湾・瀬戸内海を通じて中国・四国さらに九州など、西国の諸地域とを結ぶ海上交通の要地であった。とくに西宮は、西国街道につながる港津であり、中世には港町・市場町としてきがえ、「市庭」の名をのこしている。

古代末から中世この地域は、北摂山地の山中、栗生に所在する勝尾寺が大きな勢力を持ち、境を接する豊島牧との争論は、膨大な『勝尾寺文書』の中に見られ、現在も遺構をとどめる勝尾八天石蔵がこの間の動向を物語っている。こうした中にあって、山麓の西国街道沿いの各所にいくつかの集落が発達し、これらの集落や地域を從える土豪の成長して行ったことが考えられるのであるが、如意谷を姓とする人名が出ており、地域の開発をすすめ、在地にあって勢力を有した土豪の存在が考えられるのである。

今回調査した如意谷遺跡は、出土遺跡から見て、12世紀から15世紀、古代末期から室町時代であり、ここに記した動きに付合する時代に当たっている。こうした場合、検出した遺構がこうした在地土豪の館跡であったことが想定される。また、屋瓦の出土していることから、寺院とまではいえないにしても、こうした土豪の館につくられていた持仏堂のようなものであったとも考えられるのである。いずれにしても、今回検出した遺構だけではこれを決定することはできないのが残念である。

最後に、こうした観点からもう一度出土遺物を見直してみると、瓦質の碗・皿・土釜や、備前・常滑の甕や擂鉢などは古代末～中世の遺跡に通有の遺物である。従って、これだけでは性格を決定づけることができないが、小片ではあるが綠釉・灰釉陶器など、当時にあって数が限られ、特定のところにしか出土しない遺物であり、また貿易品として貴重な品であった青磁・白磁がかなり大量にもたらされていることは、土豪の館であったにしても、あるいは寺院であったにしても、そうした品物を入手することのできる人びとの存在を想定しなければならないのである。加えて、滑石製品の存在は、それ自身特殊な用途をもつものであり、限られた遺跡にしか出土しない特殊なよのであると共に、遠隔の地でつくられ、この遺跡にもたらされていることは、重要な意味をもつものであることを指摘しておきたい。

なお、萱野地方の歴史については、別稿島田竜雄氏の「萱野の略史」を参照されたい。

#### IV. 古代末・中世における生産と流通

##### 1. 魚住古窯址とその製品

如意谷遺跡から出土した土器の中には、魚住古窯址で製作されたと見られる須恵器の片口鉢と甕があり、また屋瓦の生産地も、魚住古窯址もしくは播磨国のどこかの古窯ではないかと見られる。ここでは、魚住古窯址を中心とする二三の問題を取り上げてみたい。

西日本各地において、古代末期から中世にかけての、須恵器を生産していた古窯としては、従来、備中の龜山焼がとり上げられて来たが、他にも美作の勝間田古窯、讃岐の十瓶山古窯等<sup>註1</sup>の存在が明らかにされている。播磨の地域においても、久留美古窯址<sup>註2</sup>（三木市久留美）、与呂木古窯址<sup>註3</sup>（三木市志染町与呂木）、宿原古窯址<sup>註4</sup>（三木市志染町宿原）、神出古窯址<sup>註5</sup>（神戸市垂水区神出町）、魚住古窯址<sup>註6</sup>（明石市魚住町）があり、これらの窯では須恵器とともに屋瓦の生産も行なわれており、ここでは生産された屋瓦は山城の六勝寺の造営に当たって、六勝寺に使用するものとして供給されたことが知られている。これについては、上原和人氏の精緻な論文<sup>註7</sup>があり、屋瓦の編年が窯の年代を決める上での資料として大きな役割を果たしているのである。

魚住古窯址は、兵庫県明石市魚住町中尾と同大久保町西島に所在している。付近一帯は、広大な面積を占める播州平野の一部に当たり、播磨灘に面して台地上の地形がひろがっている。古窯址の分布は二群が見られ、一つは南方の赤根川に沿ったところに分布する赤根川支群、いま一つは北方の中尾川に沿ったところに分布する中尾川支群があり、計36基の存在が確認されている。このうち中尾川支群では片口鉢・甕のほかに屋瓦の生産も行なわれており、屋瓦の一つは六勝寺のうちの尊勝寺跡から回范の遺例が発見されていることから、窯の操業年代を平安末～鎌倉とし、赤根川支群では屋瓦が出土しないことから、鎌倉以後、室町時代の中ごろまでの操業と考えられている。

魚住古窯址の存在が知られるようになったのは昭和30年代に入ってからのことで、「魚住村誌」にはじめて紹介され、その後、明石市在住の黒田義隆・水富義浩氏によって、さらに兵庫県教育委員会の大村敬通氏によって分布調査が行なわれた。昭和54年になって、窯址群の所在する場所を明記幹線が通ることとなり、同年5月から8月にかけて兵庫県教育委員会による発掘調査が大村敬通氏を担当者として実施され、窯の構造、須恵器の生産工程等について多くの知見が加わった。<sup>註8</sup>

屋瓦だけでなく、この魚住古窯址群で生産された須恵器は、摂津・河内・山城さらに近江の諸地域にまでもたらされていることが、大村敬通氏によって明らかにされている。窯自身が、中尾川・赤根川など、現在では小さい流れではあるが河川に面しており、ここで生産された須恵器や屋瓦は、これらの河川を利用して、瀬戸内海を経て輸送されたことが想定される（第1図）。

魚住古窯址の存在する地域にほど近いところには、播磨灘に面して、古來有名な五泊の一つ「魚住泊」がある。瀬戸内海に面した泊、すなわち風待ち、潮待ち等で船舶が停泊するところであり、魚住古窯で生産された須恵器・瓦は一旦ここに運ばれ、ここで大船に積みかえられて瀬戸内海を東進したことが想定されるのである。従って、この「魚住泊」は、魚住古窯の須恵器、瓦の生産と流通を考える上において決して無関係ではなく、緊密な関係と重要な役割を果たしていたに相違ない。このことは、調査者である大村氏も問題点として指摘されている。

五泊については、三善清行が、延喜14年（914）醍醐天皇に上申した「意見封事十二箇条」に、

山陽、西海、南海三道、舟船海行の程<sup>ひき</sup>生の泊より輪泊に至る一日行、韓泊より魚住泊に至る一日行、魚住泊より大輪田泊に至る一日行、大輪田泊より河尻に至る一日行、これ皆行基が程を計りて建置する所なり

である。千田 稔氏は、この五泊について歴史地理学的の考察を加えられ、五泊の所在地を次のように比定されている。<sup>註8</sup>

生泊・兵庫県揖保郡御津町宝津、韓泊・兵庫県姫路市的形、魚住泊・兵庫県明石市江井島、大輪田泊・兵庫県神戸市兵庫区和田崎町、河尻泊・兵庫県尼崎市今福、

「意見封事十二箇条」はつづいて、

而るに今、公家唯輪田泊を修造する。長く魚住泊を廃す、是に由りて公私舟船、一日一夜韓泊より輪田泊に兼行す。冬月風急、暗夜星稀なるに至りて舳艤の前後を知らず、此の泊天平年中建立する所なり・其後延暦の末に至る五十余年、人其の便を得る。弘仁の代、<sup>し入けつ</sup>風浪侵襲し、石頬れ沙漂う

とあり、行基によって築かれた五泊のうち魚住泊が当時風浪によって破壊しているのを修築するようにとの意見を述べているのである。



第1図 魚住古窯跡と魚住泊

『類聚三代格』卷16「船瀬并浮橋布施屋事」には、天長9年(832)播磨國に対して魚住船瀬を修造することを命じた「太政官符」、さらに貞觀9年(867)元興寺僧賢和・賢養の修造に対し下した「太政官符」がのせられているが、効なく再度の修築要請となつたのであり、魚住泊の損壊の原因は、海岸侵蝕によるものと考えられている。

その後、魚住泊の修築が、平重衡の南都焼討によって焼失のち、再建の立役者となった俊乗坊重源によって行なわれていることに注目しなければならない。それは重源自身によって記された『南無阿彌陀佛作善集』に、

魚住泊 彼鳴者、背行基井(菩薩)為人築此泊、而星霜漸積、侵損波浪、然間上下船遇風波、漂死輩不知幾千、仍遂井聖跡、欲復舊儀  
とあることによって知られるが、その年時は伝えられていない。しかし、建久7年(1196)6月3日付の「太政官符」によって、重源による修築が建久7年のことであり、修築の事業が成功したことがわかるのである。

播磨國における重源の事跡は、この魚住泊の修築ばかりでなく、より重要なことは、本来東大寺領であった大部庄が東大寺の再建に当たって中國から来日し、技術面で腕をふるった陳和尚への恩賞として重源に下され、重源はここに播磨別所として淨土寺を造営したことである。それは、建久8年(1197)の「重源顛状」に、

播磨大部庄内別所

淨土堂 一字、方三間、瓦葺

安置立像皆金色阿彌陀佛三尊丈六像

佛舍利 鐘

藥師堂 一字、同

安置舊佛八百餘尊

とあり、また『南無阿彌陀佛作善集』の、建仁3年ごろの記事に、

播磨別所

淨土堂 一字 奉安皆金色阿彌陀丈六立像一、并觀音勢至

一間四面藥師堂 一字 奉安丈六一、

湯屋 一窟 在常湯 一門

鐘一口 始置迎講之後二年始自正治二年  
(即前)

彌陀來迎立像一射 鐘一口

と記されていることによって明らかである。

播磨國大部庄は、現在の兵庫県小野市淨谷町を中心とする地域であるが、そこには、この時重源によって建立された淨土寺が所在し、天竺様建築として著名な宝形造の淨上堂があり、米

迎阿弥陀三尊像と共に国宝に指定されている。

淨土寺の所在する小野市は、播磨平野を貫流する大河川の一つ加古川の中流、その左岸に位置しているが、加古川を主流とする河川のすべてが、淨土寺の造営さらに播磨別所の經營に際して重要な役割を担っていたに相違ない。重源による別所は、この播磨のほか、摂津淡部別所（現在の大坂市東区の淀川べり）・伊賀別所（三重県阿山郡大山田村、新大仏寺を造営）があり、周防国における阿彌陀寺の造営をふくめて、これらの別所が東大寺の復興事業と不離の関係があったのである。すなわち、重源による仏教の普及をなかだらとして、これらの地域または莊園から、さまざまな物質を調達するための拠点であったということである。従って、これらの別所の造営と維持管理において、物資の輸送とそのための輸送路を確保することは、重源にとって重要かつ不可欠な作業であった。

淨土寺が造営された大部庄と、重源が修築した魚住泊との直接的なつながりは史料的には裏付けることができないが、加古川をはじめとする諸河川および播磨灘を通じて緊密に結ばれていたと考えられるのである。

いま一つ重要なことは、淨土寺の建物に使用された屋瓦が、神戸市垂水区に所在する神出古窯址で製作されていることであり、重源の作善業と窯業生産とのつながりが指摘できるということである。  
註10

さらに、重源による東大寺大仏殿をはじめとする伽藍の復興・再建に当たって、その所用の屋瓦を備前国および三河国で焼成しているという事実がある。備前国の場合、作善集そのものには記されていないが、作善集の建仁3年（1203）7月の紙背文書に、

御瓦用塗料九百七石七斗二升

御瓦運上雜用六百八十六石三斗四升四合

除新田庄閑石定

吉岡御瓦口<sub>筋方</sub>二百二十一石三斗七升四合

という記載がある。ここに見える吉岡は地名で、現在の岡山県赤磐郡瀬戸町の万富のことである。従って、この史料は吉岡すなわち万富の地における瓦の生産と、その輸送の事実をたしかめることができる。万富には東大寺所用の屋瓦を実際に焼成した瓦窯が存在し、「東大寺大佛殿」の文字を入れた瓦の出土が古くから注意されており、昭和54年には発掘調査が行なわれた。  
註11  
註12

同じ紙背文書には、

梶取安清御瓦雜用請懸

魚住梶取清傍雜用請懸

の字句があり、万富で製作された屋瓦が「梶取」すなわち船頭によって輸送されたことが知られる。万富の地の方には吉井川が流れているが、吉井川を下って瀬戸内海に出、瀬戸内海を

東進し、淀川・木津川をさか上って東大寺に運ばれたことは、重源につながる他の資財と同様である。

ここでもう一つ、「魚住梶取」の登場することに注意しておきたい。魚住は播磨国明石郡に所在する港津であることは先に述べたが、東大寺瓦の輸送に当たっても寄港地であり、魚住の船頭が中繼の役割を果たしていたとも考えられるのである。

以上のことから、魚住古窯址で生産された片口鉢や甕あるいは屋瓦等の物質は、魚住泊から各地にはこぼれたと考えられることはもちろん、重源による魚住泊の修築を通じて、播磨国の窯業生産と流通の背景の一端を求めるのがよいと思うのである。

なお、まったくの余談であるが、重源の支配した播磨国大部庄は、南北朝時代になって悪党とよばれる楠木氏の拠点として有名である。大部庄を中心とするこの地域が、中世を通じて物資の生産と流通のきかんであった地域であったということとのつながりから考えるのも一つの視点であることを附記しておきたい。

註1. 岡山県倉敷市に所在する古窯址、西川 宏氏「龜山焼の再評価」(『考古学研究』11-3)

2. 岡山県勝田郡勝央町勝間田に所在する古窯址。

3. 香川県綾歌郡綾歌町に所在する古窯址。森 清一・伊藤秀輔氏「香川県綾歌町十瓶山北麓窯跡調査報告」

4. 是川 長氏「三木市の古窯群」(『三木市史』)

5. 貞野 修氏「鷹取山周辺の古窯址—神山古窯跡(1)」(『神戸市古代史』1-3および別紙「神出古窯跡考」)、『歴史と神戸』93

6. 上原真久氏「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』13・14、昭和53年5月)

7. 魚住古窯跡群については、昭和54年にに行なわれた発掘調査の際、現地を訪ね、大村敬通氏から多くのご教示を得た。

その他の、「魚住古窯ニュース」1~9・10を参照した。

8. 千田 稔氏「古代港津の歴史地理学的考察—瀬戸内における港津址比定を中心として—」(『史林』53-1、昭和45年)

同氏「埋れた港」(昭和49年5月、学生社)

9. 小林 剛氏「後東坊重源の研究」(昭和46年6月、有斐閣)

10前掲上原真久氏論文

11前田 幹氏「備前國と後東坊重源」(『佛教藝術』105号、昭和51年1月)

12岡山県教育委員会「泉瓦窯跡・方富東大寺瓦窯跡(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告)」37、昭和55年3月)

## 2. 陶磁器をめぐって

如意谷遺跡から出土した陶磁器のうち、陶器としては、前節にも述べたように、常滑・備前の甕・播鉢と丹波の甕等がある。これらの陶器は、畿内地方の古代末期から中世にかけての諸遺跡一寺院跡、城館跡をはじめ、集落遺跡等もふくむ一における一般的な出土遺物であって、調査報告書の中でも、単に常滑の一、備前の一が出土したということと、そのもの自身についての説明が加えられることはあっても、それらの陶器の存在することの意味について、とくに考えられたことは少ない。

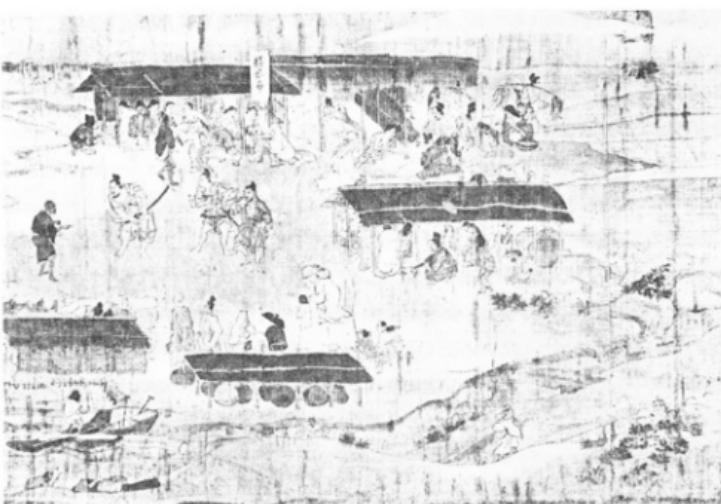
戦後における歴史時代考古学の大きな成果の一つとして、窯業生産遺跡の調査と、それにもとづく各地での陶磁器の編年作業をあげることができる。その成果によって、古代における須恵器の生産体制の解明や須恵器の編年が試みられるとともに、尾張、美濃地方における灰釉陶器の生産のように、古代末期に須恵器の生産から変容し、さらに中世陶器を生み出す素地となつた地域、あるいはそれとは逆に、河内・和泉にひろがる陶器の古窯のように、中世につながることなく9世紀代に終焉する地域等の相違のあることが明確にされて来た。

古代末期に須恵器の生産から転換して各地域独特の陶器を生み出し、中世さらに近世につづく古窯として、從来、瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前の各窯を「六古窯」と呼称して來たが、それだけに限らず、渥美・知多の古窯、能登半島珠州の古窯など、現在のところ全国に20数ヶ所の古窯の存在が知られるようになった。<sup>註1</sup>

古代・中世に限らず、これらの窯業地帯では、中世末期から近世にかけて、その時代の文化を反映して茶器の生産がさかんに行なわれるようになり、東日本では瀬戸・美濃、西日本では丹波・備前のように、古くからの窯業地帯の中で近世のいわゆる施釉陶器がつくられるようになり、肥前唐津のように近世になって発達した窯業地帯もある。

古代・中世はもとより近世にあっても、これらの窯業地帯で生産された陶器・施釉陶器は、諸地域に供給され、それぞれの地域において使用されたのであり、全国各地の遺跡での陶器の存在がそのことを単に物語っているのである。しかし、現在の考古学では、土器・陶器等の生産遺跡が調査され、窯跡の構造や生産方法については十分把握され、土器・陶器の編年が精緻なまでに大きな成果をおさめているのに対して、どのようにして各地にはこぼれたのか、どういう流通機構があったのかということについては意外に無関心であった。考古学ばかりではなく、文献歴史学の面からも同様のこと�이えるが、それは土器・陶器の生産に関する文献史料がほとんどないことに起因しているのかも知れない。こうした意味で、紫崎勇夫氏による尾張・三河・美濃地方の古陶研究や、吉岡康暢氏による珠州を中心とする生産と流通をめぐる労作は<sup>註2</sup>画期的な成果であり、今後における歴史時代考古学の方向を示すすぐれた業績である。<sup>註3</sup>

中世において、一つの遺跡にどこでつくられた『やきもの』がどのように出土しているのかということを示す代表的な遺跡として、広島県福山市の草戸千軒町遺跡がある。ここは福山市を流れる芦田川の下流、その三角洲上に存在する遺跡で、芦田川の川床から出土するおびただしい遺物によってその存在が知られ、昭和48年以降、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が設置され、逐年発掘調査がつづけられている。その詳細はこの遺跡を紹介している書物や報告書にゆずるが、地元といえる備前をはじめ、遠く瀬戸・常滑の製品や、中国製の磁器、時代の新しいところでは唐津、さらに国産の磁器である伊万里に至るまで、全国各地の窯業地帯で生産されたさまざまな『やきもの』が出土しているのである。



第2図『一遍聖絵』に見える福岡の市

この草戸千軒町遺跡の西側には、現在もそのおもかげをつたえる真言宗明王院があり、鎌倉時代から室町時代、さらに江戸時代の初期に至るまで、門前町・市場町としてさかえた。従つて、草戸千軒町遺跡は、はじめて考古学的にとらえることのできた都市遺跡なのである。芦田川の氾濫によって水没したが、かっての川口は遺跡の所在地からそう遠くないところにあったと考えており、瀬戸内海に通じる港町でもあったのである。

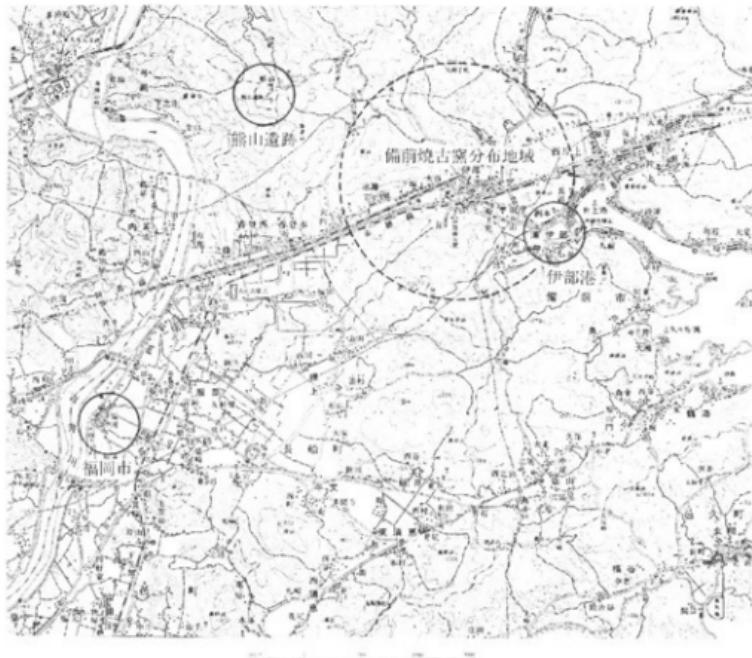
中世における市場の情景を伝えるものとして、しかも、おそらく備前の鹽・壺などを商う店先の場面として、つとに知られているのは『一遍聖絵』（京都市、歓喜光寺所蔵）巻四の第三景である。鎌倉時代に浄土教に敬信し、諸国を廻ってその教えを弘めた一遍上人の伝記絵巻で、この場面は、弘安元年（1278）の冬、備前國の吉備津宮神主の子息の嫁が一遍に帰依し、夫の留守中に出家した。帰宅した夫はこれを知って大いに怒り、一遍を追いかけ、福岡の市で一遍になじり寄ったが、かえって輸されて出家をした。というくだりの背景として登場するのが、備前國福岡の市である。同じ場面は『一遍上人絵詞伝』の巻三の第二景にも描かれているが、波の打ち寄せる岸部（吉井川と考えられる）に近いところに、おそらく草葺で掘立柱の吹き流しの小屋が並んでいる中に壺を並べた店が見られる（第2図）。備前國福岡は現在の岡山県邑久郡長船町であるが、その所在地から見てここに並べられている『やきもの』が備前であったと考えられている。

備前焼は中世古窯を代表する「やきもの」の一つであるが、現在の岡山県備前市伊部を中心とする地域で生産された。元来備前国は、須恵器生産の伝統をもつ国であり、古墳時代以来、邑久郡を中心とする地域に窯跡の存在が知られている。備前焼のはじまつたのは平安後期から鎌倉初期とされ、初期には備前市伊部の南北に連なる山麓で窯が築かれていたが、鎌倉中期になって、豊富な燃料を陶土を求めて、北方にそびえる熊山の山間部に入ったところに多くの窯が築かれた（第3図）。

註4

こうして生産された備前焼は、全国各地にはこぼれたのであり、福岡の市はその交易の実際を、草戸千軒町遺跡でのあり方や全国各地からの豊富な出土例は、備前焼の交易圏を単的に示しているのである。昭和54年に岡山県立博物館で開催された特別展「備前焼—その流通と時代的特色」は、備前焼の流通をあとづける試みとして、全国から出土している備前焼の資料が集められた。それによると、東は千葉県から、南は鹿児島県に及んでいることがわかる。窯の所在する生産地に近い備前・備中・備後・美作の諸国において出土するのは当然であるが、遠く

註5



第3図 備前古窯址群と福岡市・伊部港の位置

房総半島や九州の最南端まで及んでいることは、備前焼に限ったことではないが、当時における陶器の生産と交易についての問題を考える上において重要な事実なのである。

この時期における備前焼の種類というか器形としては、甕・壺・播鉢が主であり、日常の雑器として使用されたが、壺には、「三石」「二石」等のヘラ書き文字の入った大壺がある。和歌山県那賀郡岩出町に所在する根来寺僧坊跡の発掘調査では、この大壺が貯蔵の容器としていくつも並べられた状態で出土し、最近調査の行なわれた兵庫県三木市三木城跡でも同様な例<sup>註6</sup>が報じられている。福井市・乗谷に所在する朝倉氏の館跡では越前焼の大壺が同じように使用されているが、寺院の僧坊または城館において穀物あるいは酒・油等を保存・備蓄する容器としてはこれらの陶器が選ばれその役割を担っていたことがわかる。こうした場合、大量の大壺が備前から紀伊の根来寺にまではるばるはこぼれたのであり、大がかりな流通機構の存在を考えなければならないのである。

最後に、直接流通機構を示すものではないが、中世における陶磁器のうち、備前焼の流通の一端を物語る注目すべき史料として、最近刊行された『兵庫北関入船納帳』について触れておく。

註7 この『兵庫北関入船納帳』は、室町時代の文安2年（1445）の一年間、兵庫北関を通過する入船の記録で、船籍地・積載品目・数量・關料・納入月日・船頭・船主（問丸）が充明に記されている。兵庫津は、瀬戸内海における重要な港津の一つで、古くは大輪田泊とよばれ、平清盛の修築ののち日宋貿易の拠点として繁栄し中世に及んだ。兵庫関は、この兵庫津に設けられた關所で、俊乗坊重源が築港の費用として關料の徵収を許されてからは、東大寺が徵収権を掌握していた。南北朝時代に、足利尊氏によって興福寺にも徵収権が与えられるようになって以後、両寺がそれぞれ南北両関を掌管した。

さて、この『兵庫北関入船納帳』に見える品物の中に備前焼がある。すでに小林保夫氏によって紹介され、今谷 明氏も同書所載の『瀬戸内制海権の推移と入船納帳』でくわしく論及されているので、それを参考に要約して見る。

第4図に示したのはその一葉であるが、文安2年6月6日のところに、

伊謹 ツホ太小四斗 ツホ完上茶耕小 六月十四日 三郎太郎 二郎三郎  
註8 大麦廿石五斗 依 二百七十二文

というような表記で、12月までを摘要して表にすると次のようになる。

月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
積出港	伊部 片上	伊部	地下*	伊部 堺	伊部	伊部	伊部	
個数(回)	200	180	285	330	60	120	40	計1,215

\*地下とは兵庫関の地下のこと、兵庫港を船輸の場とする船頭の船で運ばれたことを意味している。



第4図 「兵庫北関入船納帳」

積出港の伊部は、いまでもなく現在の岡山県備前市伊部であり、片上も同様である。従つてここで積み込まれる「ツホ」は備前焼であることはもちろんであり、一年間を通じて大小合わせて1,215個の壺が積出され、兵庫津に運ばれたことが知られるのである（第3図参照）。

兵庫に運ばれてから後の動きはこの史料ではわからないが、この『兵庫北関入船納帳』は、積出港として西宮・尼崎・杭瀬・堺等、大阪湾に入りながらの港津の名も見えていることから、これらの港津に運ばれることもあったであろう。また兵庫あるいはその他の港で陸揚げされた後、陸路によって輸送されたことも当然考えられるのである。

いずれにしても、この史料は文安2年における備前焼の隆盛を物語ると同様、少くとも畿内への輸送経路を明示しているのであり、畿内地方ばかりではなく、備前焼の流通を裏づける重要な史料である。

陶磁器については、常滑・丹波等についても触れるつもりであったが、紙数の制限もあり不十分ではあるが備前だけに止めておくこととする。

註1. 陶磁器については多くの出版物があるが、横崎彰一氏『瀬戸・備前・珠州』（小学館ブック・オブ・ブックスの日本の美形43、昭和51年10月）を参考した。

2. 紫崎勇夫氏「古代窯業の発展—須恵器生産の展開と中世陶器の成立」（『古代の地方史4、東海・東山北陸編』所収）

3. 吉岡家輔氏「北東日本海域における中世陶器の流通」（『月刊文化財』215号、昭和56年8月）、同氏「中世陶器の生産と流通」（『考古学研究』28-2、昭和56年9月）

4. 関壁忠彦・関壁慶子氏「備前焼研究ノート」（1）「備前焼の研究」（『食文化考古学研究集録』第1号、昭和31年3月）同「備前焼研究ノート」（2）、（同第2号、昭和32年3月）同「備前焼研究ノート」（3）「備前焼窯跡の分布とその性格」（同第5号、昭和33年3月）

5. 岡山県立博物館『備前焼—その流通と時代の特色』（昭和54年10月）

6. 和歌山県教育委員会『根来寺跡発掘調査概報Ⅱ』(昭和53年3月)
7. 林麗辰三郎氏編『兵庫北開入郡納領』『中央公論美術出版』(昭和56年7月)
8. 小林保夫氏「中世の京都と備前窯」(『京都市史編さん通話』86)

### 3. 滑石製品をめぐって

全国各地の遺跡から出土する滑石製の遺物としては、5～6世紀の古墳時代中期から後期にかけて製作された石製品がある。中でも代表的なものとしては勾玉・白玉・小玉等の玉類であり、子持勾玉とよばれる特殊な製品もある。これらの玉類は、古墳の副葬品として石室の中におさめられていることもあり、また住居跡から出土することもあるが、一般的には祭祀に関係のある遺物とされ、これらの滑石製品が出土することによって、その場所が祭祀に関係のある遺跡と考えるのが通例となっている。大阪府堺市百舌鳥赤畠町に所在したカトンボ山古墳は、昭和2年に採土工事によって消滅したが、古墳と言っても埋葬設備ではなく、墳丘内から大量の滑石製品が出土した。また、玄海灘に浮かぶ孤島沖の島は、5世紀から9世紀にかけて、海上交通の安全を祈念して国家的な祭祀の行なわれたいわゆる「神の島」であるが、昭和44年から46年にかけて行なわれた調査によって、露天祭祀跡から滑石製の舟形石製品とよばれているもの、さらにこれも滑石製の人形が出土し、共に神の依代としてつくられた、祭祀に伴う遺物と考えられている。<sup>註1</sup>

平安時代になると、北九州とくに福岡・佐賀両県下に存在する經塚では、經典をおさめる容器すなわち経筒が使用されており、また經塚の上におかれた石塔にも滑石製のものがある。さらに、これはまったく数少ない例であるが、滑石でつくられた仏像が長崎県の巣岐に所在することが知られている。<sup>註2</sup>

ところで、如意谷遺跡から1点が出土し類例を加えることになった滑石製石鍋は、古く先学によって取上げられた遺物の一つで、それなりの研究史をもつものである。古代末期から中世平安時代末から鎌倉時代にかけて製作なしし使用されたと考えられているもので、その分布を見ると、九州西部に集中し、中国・四国・近畿等西日本各地に出土例があるが、最近出土例を見ている謙倉を除いては、東日本にはほとんど出土例がないという、分布の上では際立った特色をもつ遺物である。

これら、滑石を原材料とする石製品のうち、古墳時代の玉類を主とする製品についてはまた原材の採取地ないし生産地は知られていない。しかし、古代末期から中世にかけて製作された滑石製石鍋については、長崎県西彼杵半島に滑石を含有する鉱脈があり、ここで滑石が採取され、石鍋の生産・加工が行なわれていたということが、長崎県教育委員会関係の研究者諸氏の



第5図 滑石製石鍋出土遺跡 分布図

調査によって明らかになって来ている。とくに長崎県西彼杵郡大瀬戸町に所在するホゲット製作所跡では、山中に滑石の採取地があり、採取の方法や、石鍋に加工されるまでの工程のすべてがわかる未製品等が大量に発見され、西彼杵半島を中心に、ある時期に限って大量に石鍋を加工し、ここを根据地として各地に搬出されたことが明らかになったことは大きな成果である。<sup>註4</sup>

生産地における調査・研究は別として、日本の諸地域から出土している滑石製石鍋については、出土した遺跡の調査報告書の中で、応取上げ、遺物そのものについては解説されているが、遺跡の中での石鍋のあり方、滑石製石鍋を出土する遺跡の性格などについて考察の加えられたものはほとんどない。さらに遺跡からはなれて、一体滑石製石鍋というものが何の目的でつくられ、何に使用されたのかという点についても、明治時代の先駆によって主張された所説から一步も出ていないというのが実情なのである。

滑石製石鍋との出会いは、十数年も前東大阪市上四条町の生駒山中に所在する神感寺跡で私自身採集した経験があり、昭和47年に調査が行なわれた東大阪市若江南町の若江城跡でも出土したことを知っていたが、私自身でさえ、これまで無関心であった。如意谷遺跡では2点の滑石製品が出土したが、そのうち板状の製品についてはまだ検討を加えていないが、滑石製石鍋については、前にも述べたように出土する遺跡の分布が限られていること、原石の採取地が長崎県西彼杵半島にあって現地で生産遺跡が確認されていることなどから、考古学いう遺物を使って物資の生産と供給、ならびに流通を考える上では恰好の資料である。

現在においても避遠の地といえる長崎県の西彼杵半島でつくられた滑石製の石鍋が、はるかに海をへだてた横河泉をはじめとする地域にはこぼれたのである。滑石製石鍋そのものの用途はまだ明らかではないが、はるか海を越えてはこぼれる理由があったのに相違ない。肥前国の一隅で、これの生産が行なわれ、畿内をこえて東国にまで運ばれたこの製品の背後には、それなりの機構と体制のあったことが想定されるのである。このことについては、機会を改めて考えて見ることにしたい。

最後に、上田桂子氏（大手前女子大学）の手に成る、滑石製石鍋出土遺跡分布図を掲載することとした。

註1.森 浩一・宮川 渉氏『堺市カトンボ山古墳の研究』(古代学研究会)

2.奈良大社祭祀遺跡調査会『沖ノ島Ⅱ—奈良大社沖津宮祭祀遺跡昭和45年度調査概報』(昭和46年10月)

3.小田富士雄氏「西日本の石製経筒」(『九州考古学研究、歴史時代雑誌』所収、昭和52年11月) 1月学生社)

4.正林 譲・下川達彌氏「長崎県ホゲット遺跡の石鍋製作跡」(『月刊文化財』194号、昭和54年11月)、長崎県大瀬戸町教育委員会『大瀬戸町石鍋製作所跡』(『大瀬戸町文化財調査報告書』第1集、昭和55年3月)

## 如意谷遺跡の建物遺構

青山 賢信

### 1. 建物遺跡について

発掘地区からは多数の掘立柱の柱穴等を検出したが、検出面である地山は後世の造成により相当深くけずり取られているため、検出された柱穴の年代的な前後関係は捉えられなかった。

柱穴等が検出された場所は発掘地区により特性をみせる。第1区では全域にわたり柱穴が存在し、第2区東では南半部、第2区西では東南部と西北部に集中し、その他では殆んど検出されなかった。

これらの中では柱穴の組み合わせにより建物として明確に捉えられたのは、第2区西の東南部の1棟（建物A）と、それに隣接する第2区東の西南部の1棟（建物B）にすぎない。その他では多数の柱穴が検出された第2区東の東南部でようやく2棟（建物C・D）が想定されたにとどまり、同様多数の柱穴を検出した第2区西の西北部及び、第2区より柱が太く柱の据え付けもよかっただとみられる第1区では柱穴の年代的前後関係が不明なこともあって、1棟も想定し得なかった。

これらの建物A～Dは、ほぼ地形の等高線に平行した形で検出された。

**掘立柱建物A** 最も明確な建物址で、柱穴の状態から建て替えたことが明らかなものである。

建物は東側で北に7度程振れた桁行柱間3間、梁行柱間2間の東西棟の建物である。柱間寸法は桁行212楓（7尺）、梁行182楓（6尺）の等間である。なお建物内部にも柱穴とみられるものがあり、西より2本目は側柱と柱筋が通るが、3本目は桁行柱筋から30楓程南へずれている。また四隅側柱の外には隅木を支えたとみられる柱穴（柱の太さは主屋と同すらしい）が存在するが、南側のみは中央2本の柱筋にも軒柱とみられる柱穴が検出された。なおこれに類するものが東側の北1間にも認められる。これら支柱の主屋側柱心からの出は、南側で75.8楓（2.5尺）程、西側で45.5楓（1.5尺）程、北側と東側では60.6楓（2尺）程である。

**掘立柱建物B** 建物Aの東に212楓（7尺）離れて検出された桁行柱間2間（6尺等間）、梁行柱間1間（7尺）の南北棟の建物址である。

建物Bは建物Aに対して逆方向に少し振れており、柱の太さも約12楓（4寸）程と建物Aに比べて小柄であるが、柱筋は建物Aとほぼ揃い、建物間隔も建物Aの桁行柱間寸法で取られ、その寸法は建物Bの梁行寸法となるなど、寸法の取り方が同じであることから見ても、建物Aと同時期に建てられた建物Aの附属屋と考えられる。なお建物Bは柱穴の検出状態から、建て

替えが一回行なわれたことが知られる。

#### 掘立柱建物C・D 建物Bの西12米程離れた処に位置する。

前述したように、この場所はけずり取られた地山面に多数の柱穴が検出され、一つの建物にまとめる困難な状況にあったところで、かろうじて建物一棟を想定したのが東西柱間227.3 横（7.5尺）、南北柱間287.9 横（9.5尺）の方1間の建物Cである

ところで、南側の柱筋は少しずれるが、西へ257.6 横（8.5尺）離れて検出された柱穴が生きるとすれば（南北柱間は同様8.5尺となるが、想定した建物Cの南北柱間とは1尺程異なる）、ここに、桁行2間、梁行1間の東西棟の建物が想定されることになる。柱間寸法は先の建物A・Bより広くなるのは柱が18根（6寸）程と太かったとみられることで了解するとしても、柱間にばらつきがある点で不確定といわねばならない。

また、桁行2間の建物として生かそうとした東北端の柱穴から197横（6.5尺）の柱間3間分が建物Cと重複して方位を逆に振った形で検出されている。この南側にはこれに見合う柱穴の検出がないものの、丁度その部分に当る処は地山が南下がりにけずり取られているので、柱穴もその時にけずられたものとすれば、前後関係は不明ながら、ここに別の建物Dが想定される。

いずれにしても、ここには何らかの建物があったことは確かである。

## 2. 建物に対する考察

発掘地区のすぐ西隣りの高みには宝珠院の本堂である如意輪観音堂があり、また東に離れて同院の庫裏がある。

宝珠院は縁起によれば、弘法大師の開創になり、元慶4年（880）陽成天皇より荘園を賜わり、七堂伽藍を具備し、数十の坊舎を有していたが、応仁年中（1467～68）に兵火に罹り堂舍ことごとく灰燼に帰した摩尼山如意輪寺の塔中であったものといい、発掘地附近は如意輪寺の堂坊のあったところと伝えている（『大阪府全志』）。

現宝珠院の本堂と庫裏との関係からすれば、縁起にいう堂坊の位置を発掘地とすることが可能ではあるが、地山から検出された遺構からはこれを積極的に推すものは見出されていない。むしろ、建物址の検出された第2区東の東側、つまり第1区の西半には大きな谷間が南北に通っていたことが発掘により確められているし、検出地山は西へ延び現宝珠院本堂下に及ぶと考えられることからみても、この地は谷により東西に分断され、宝珠院の本堂も動くことになるので、谷の東西では性格の異なった地域であったと見られるのである。検出された柱穴の状態が谷の東西で異なるのもこの事を物語る。

谷の東である第1区東半に検出された柱穴は、第2区より柱も太く据え方もしっかりし、ま

た柱穴が多数みられることから（建物の復原は不可能であったが）、如意輪寺がこの附近にあったとすれば、谷の東から宝珠院庫裏あたりにかけての処であったと推考される。

柱穴の大きさもそのことをしのばせる。ちなみに、この附近は小字を「寺前」と称していた。

ところで、検出された地山の上層は出土物から15世紀頃に造成されたもので、谷もその時に埋め立てられたと見られるのである。とすれば、15世紀頃に極めて大規模な造成を行なったことになる。

如意輪寺の本尊であり、創建当時に製作されたと伝えられた如意輪観音像は、様式的にみて室町時代初期頃に製作されたものと考えられている（『箕面市史』）。また発掘遺物もこの頃とみられるものが多いことからすると、この頃に寺の再建が行なわれ、発掘地区附近に堂宇が建てられたのかも知れない。しかし、この時の造成地も後にけずり取られているため、この点を確めることは不可能であった。

ところで、正和3年（1314）の勝尾寺の常行堂敷所田畠注文に菅野分として、  
田一段所當二斗<sub>菅野分</sub>法名成仮  
<sub>寺前</sub>作人惣官馬允入道とあり、14世紀初め頃の如意輪寺の寺勢の一端をうかがわせる。

では第2区で検出された建物はどのような性格のものであったろうか。この建物は出土遺物からみると13世紀末頃と考えられるものである。

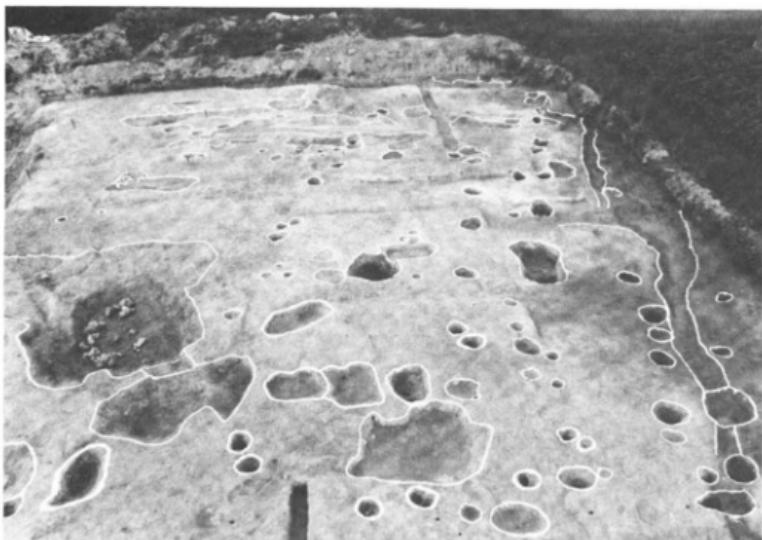
最も明確な建物AとBは先述したように一組の建物であったし、建物Aには隅木受けの柱を有するのである。したがって、建物Aは草葺か桧皮葺かは明らかに出来ないが、隅木を持つことから、庇を持つ軒の出の深い建物であったろう。また建物Aはその東北隅に物入状の突出を持った床張りの建物であり、建物Bは上間だけの建物で、炊事場として使用されたものと推考される。建物Bが一度建て替えられているのもそうしたことによろう。

なお、これらに離れて東側と西北にみられる柱穴は雜舎であったものではなかろうか。建物A・Bの背後から東にかけて建物址がみられないのは、山櫻がせまっていたことによろうか。

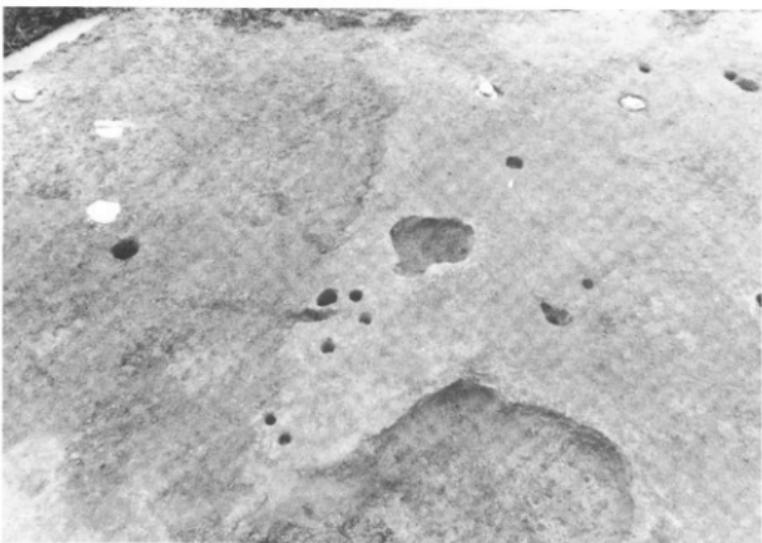
建物Aは決して格の低い建物ではなく、また第2区は一屋敷地であったとみられることからすれば、この地でかなりの勢力を有した者の屋敷地であった可能性が強い。

ところで建物Aの建てられた時期を13世紀末頃とみて、谷を埋め立てた大規模造成の時期を15世紀頃とすれば、この間は約1世紀となる。とすれば、建物Aは建て替えられたことがないから、造成までの間に倒壊してしまったとみなければならぬ。しかし、この地形条件、或いは柱穴の検出状況からみると、造成のために建物をこわし、その間に附屬屋である建物Bが建て替えられる期間があったとみた方が妥当のように思われる。建物の建てられた時期と造成の時期を今少し狭めて考えることも必要であろう。

# 図 版



1 北半部遺構検出状況



2 南半部遺構検出状況



1 井戸



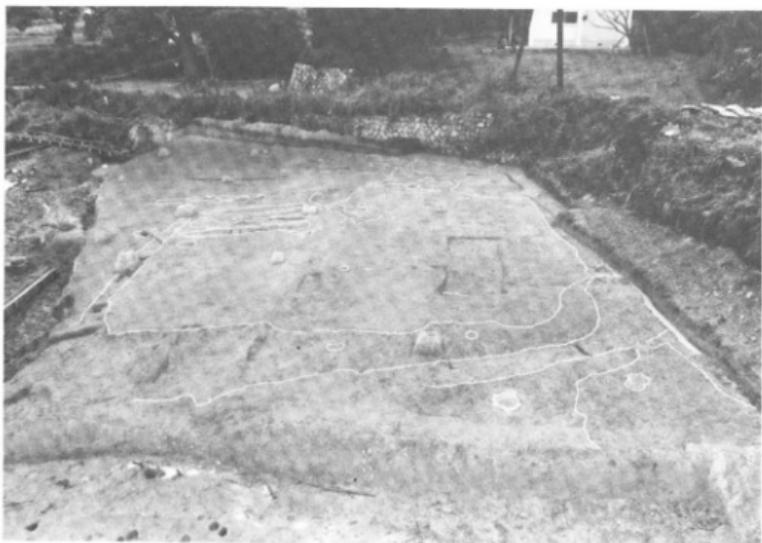
2 水路状遺構（北側より）



1 造構検出状況（西寄り）



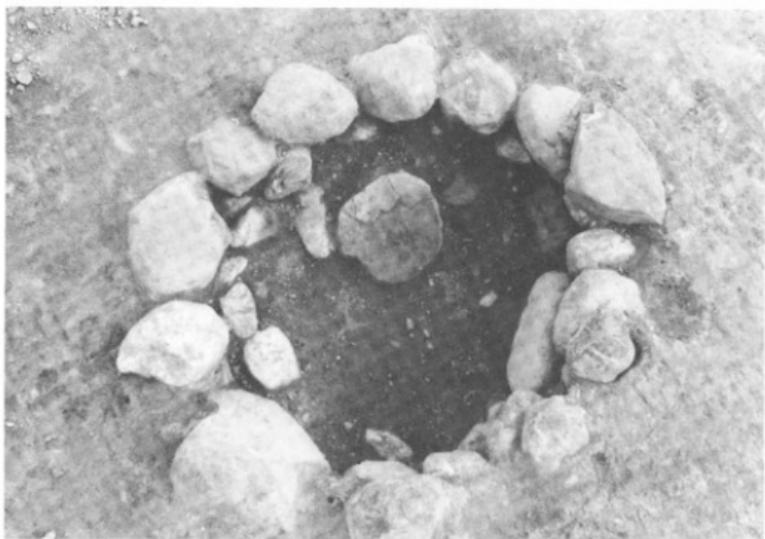
2 造構検出状況（東寄り）



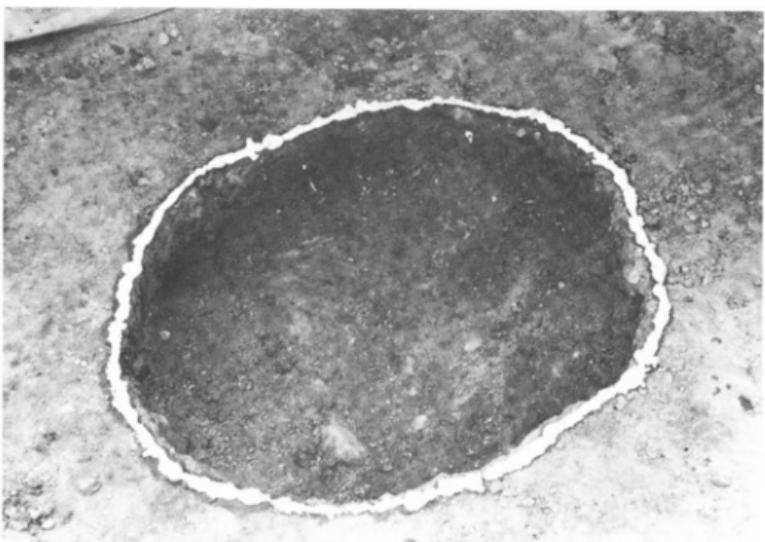
1 遺構検出状況（上面）



2 遺構検出状況（上面掘り下げ）



1 井戸状遺構



2 井戸状遺構（掘りかた）



1 鉢 出土状況



2 瓦器楕 出土状況



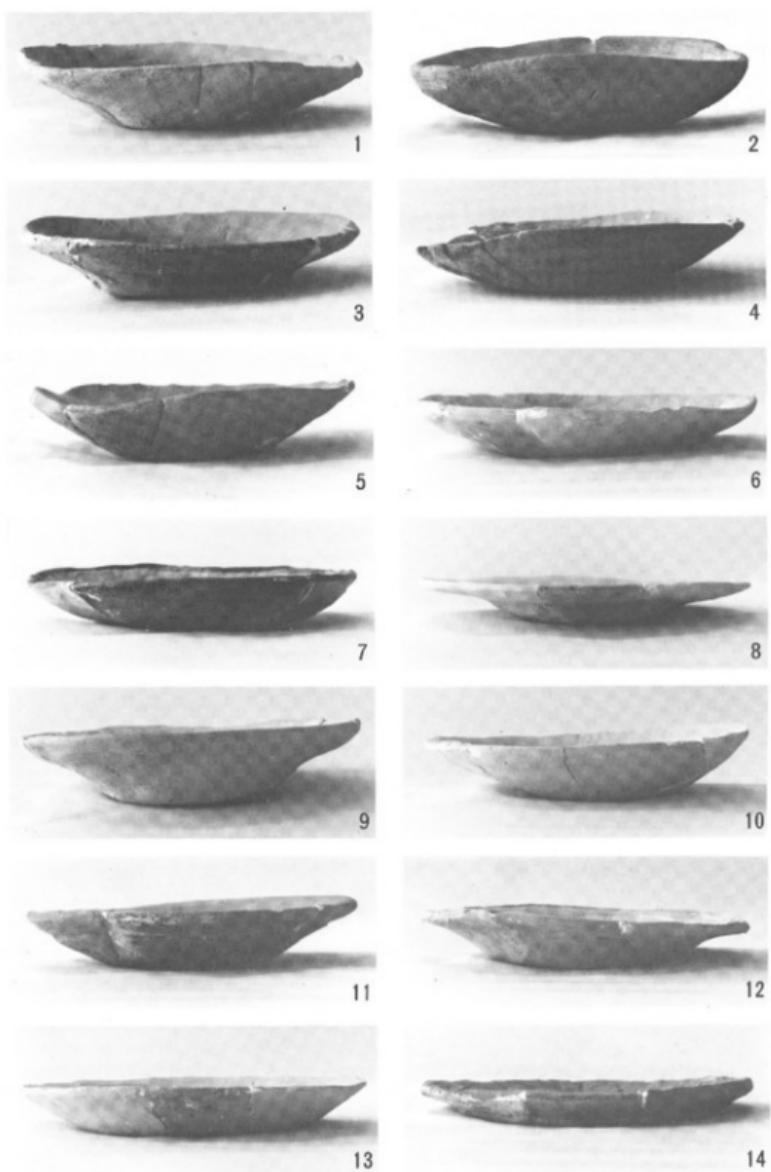
1 土師質皿 出土状況



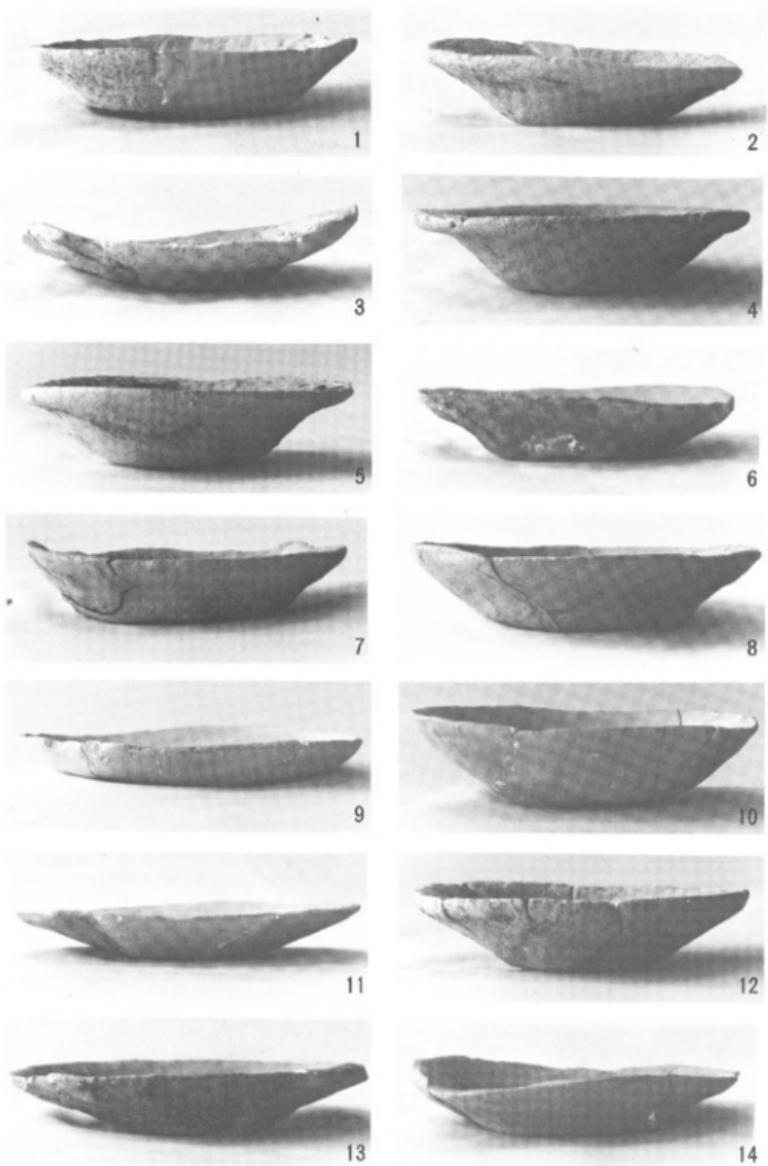
2 滑石製品 出土状況



暗渠木組検出状況



土師質土器 1 ~14 井戸



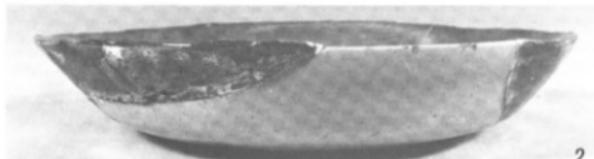
土師質土器 1~8 土塙8、12~14 土塙2



1



2'

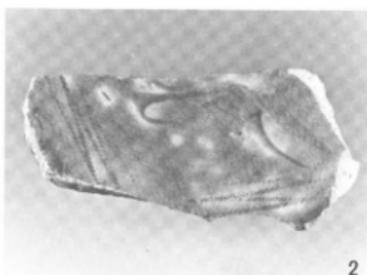


2

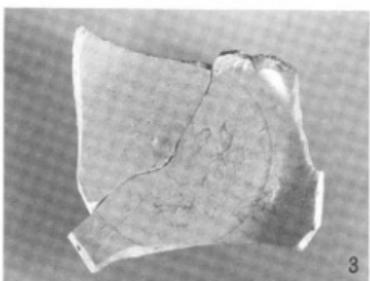
磁器



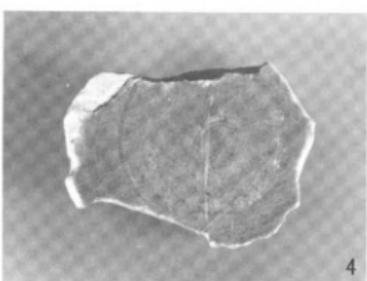
1



2



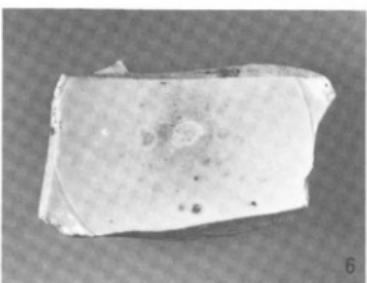
3



4



5

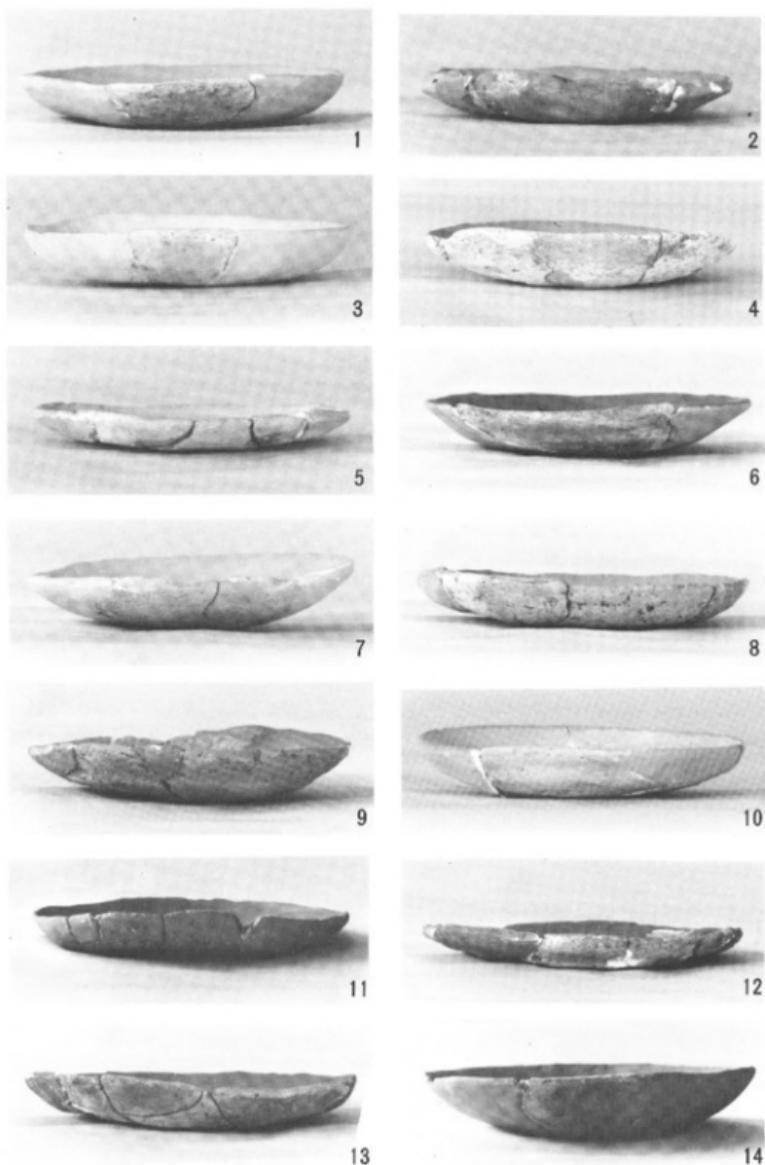


6

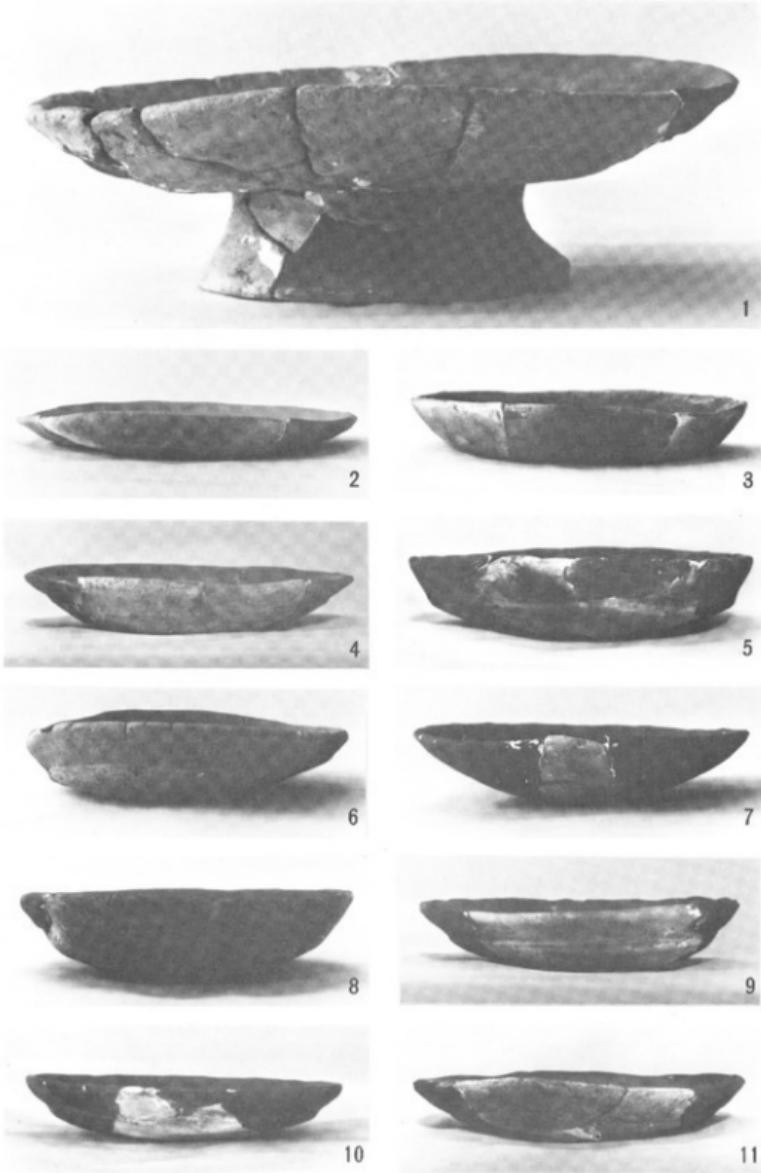


7

陶磁器類



土師質土器



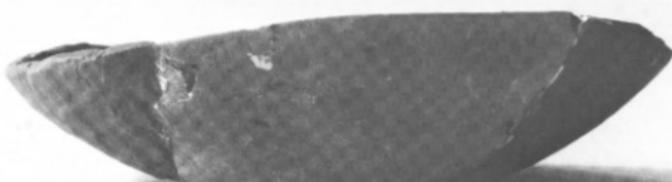
土師質脚台付皿、瓦器皿



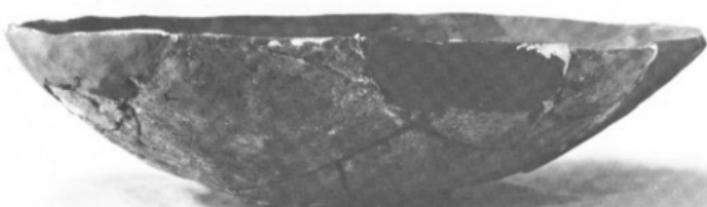
1



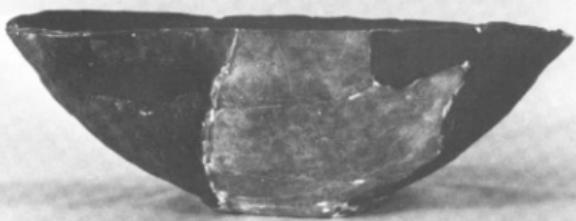
2



3



4

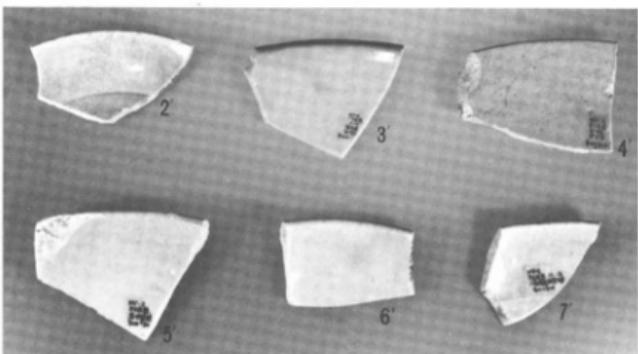
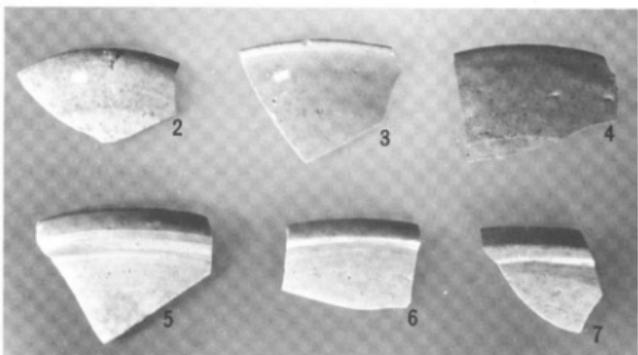


5

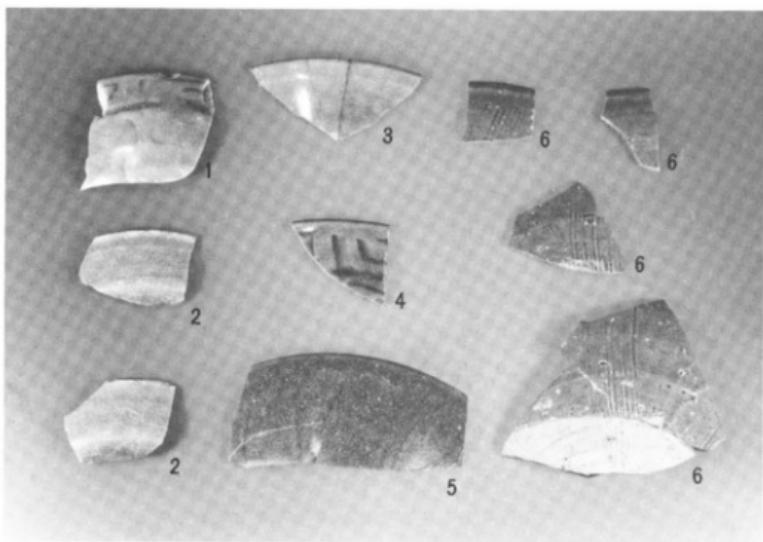


6

瓦器皿、瓦器碗



磁器

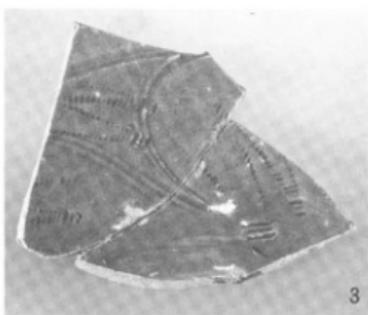




1



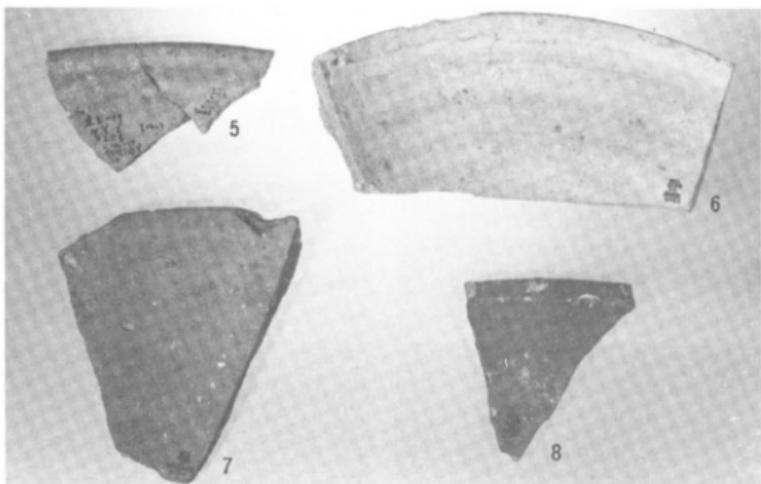
2



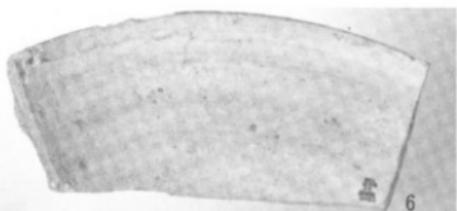
3



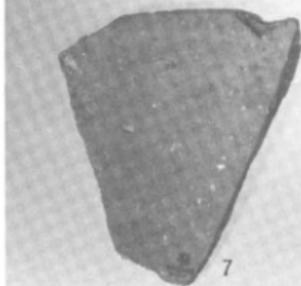
4



5



6

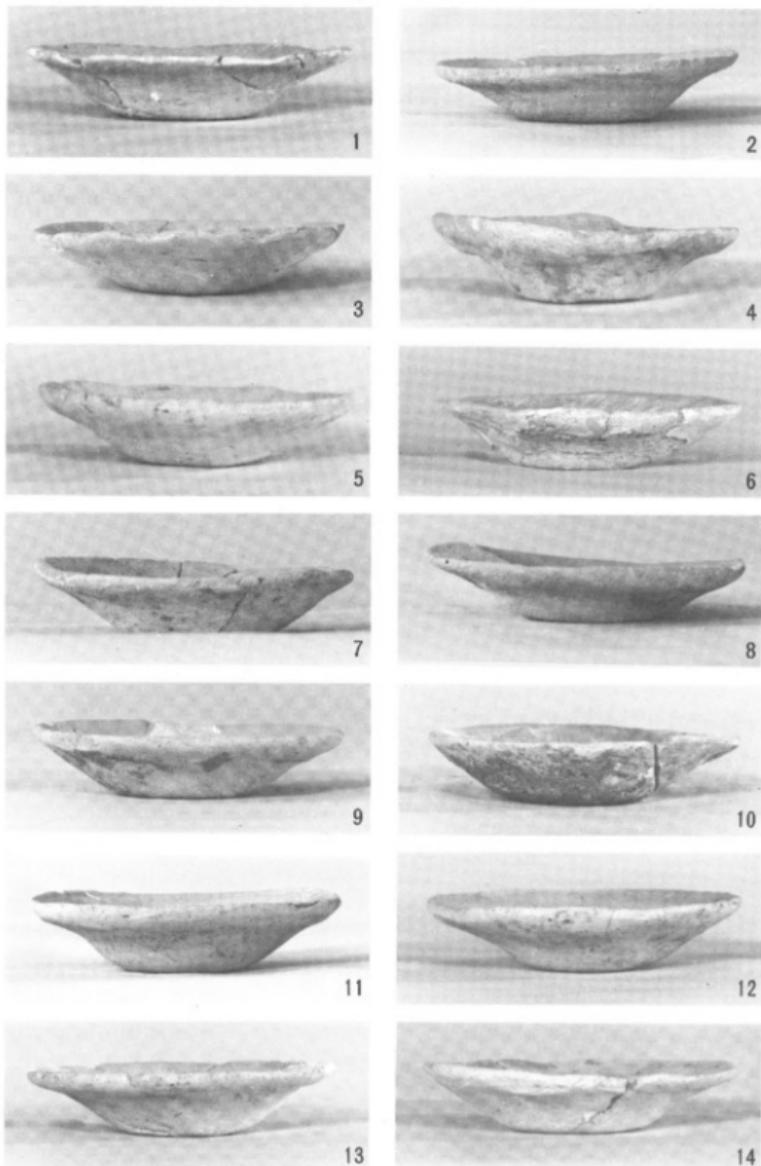


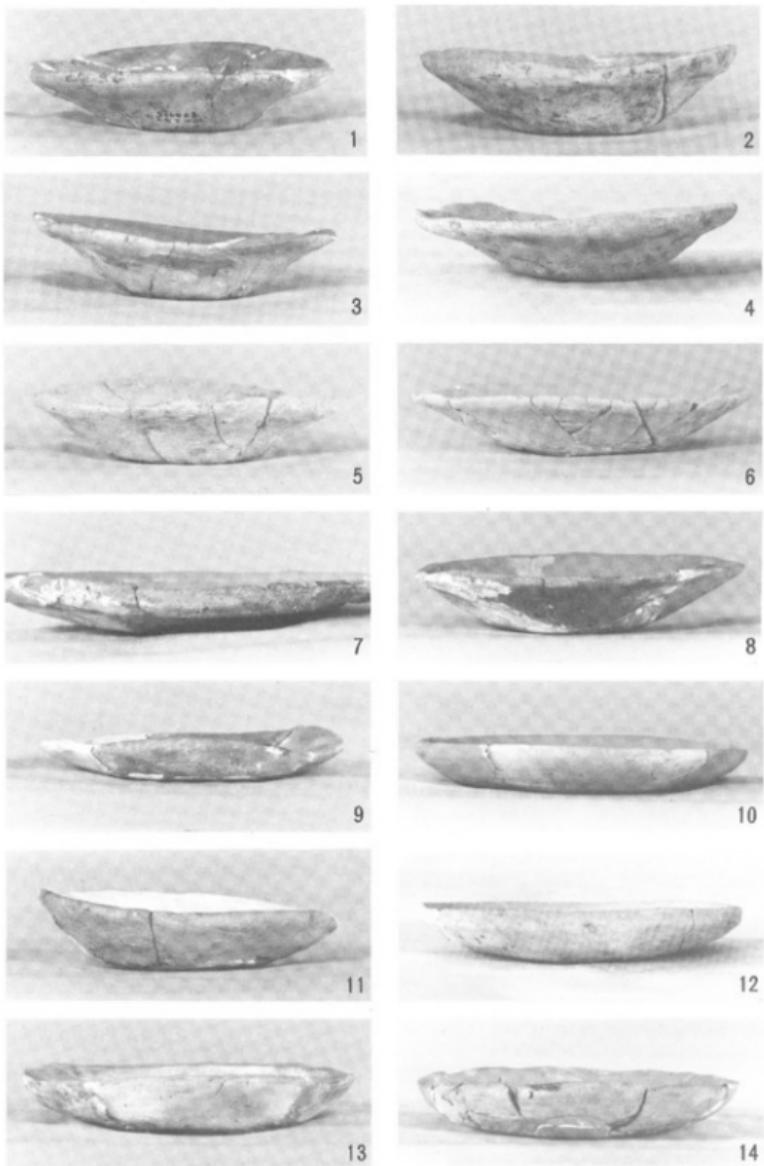
7



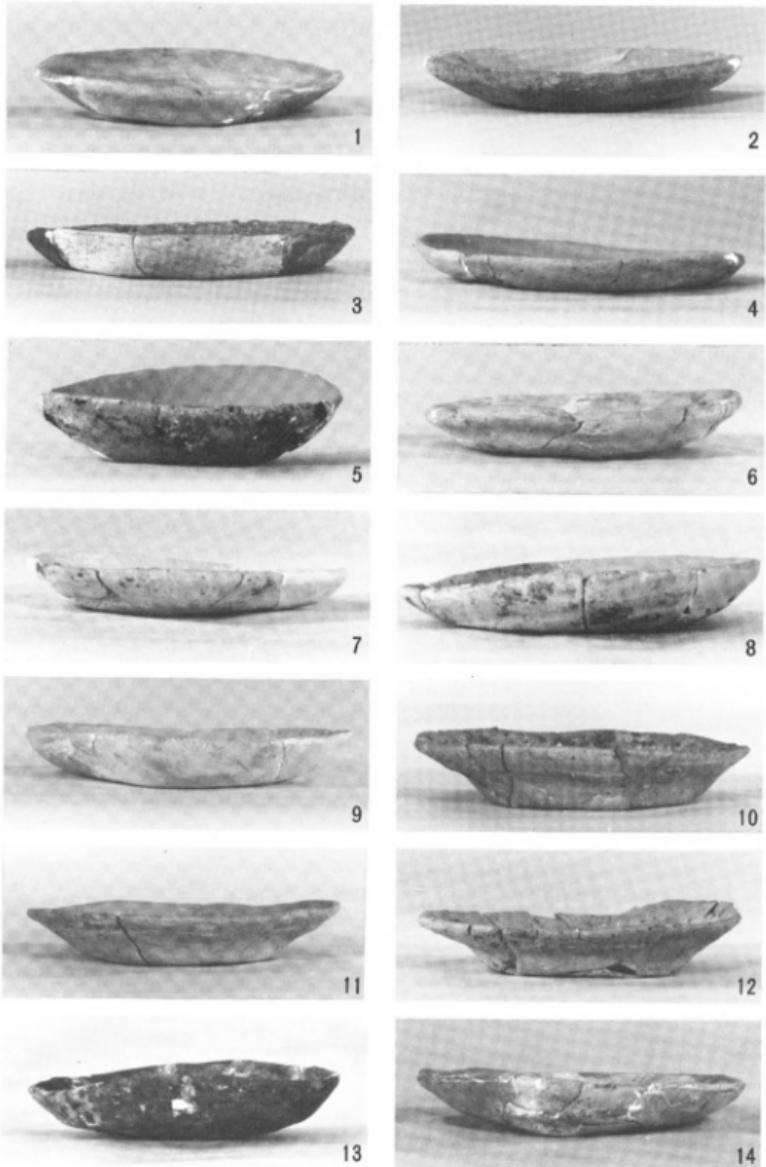
8

鉢・土釜・磁器





土師質土器



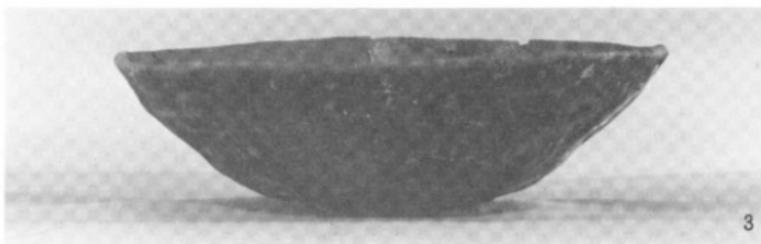
土師質土器



1



2



3



4

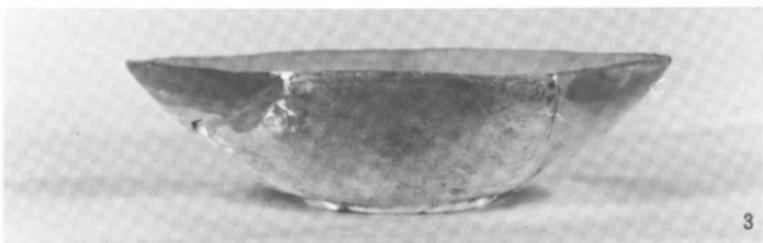
瓦器片



1



2



3

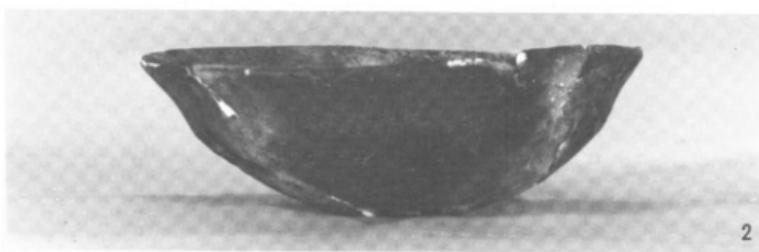


4

瓦器碗



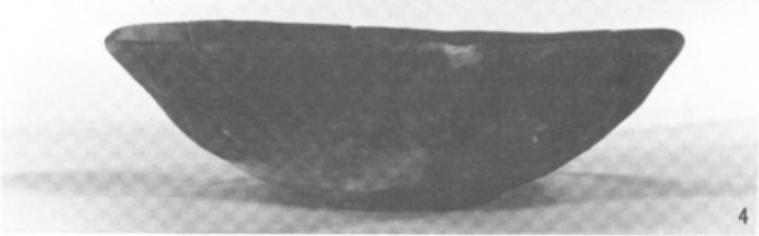
1



2



3



4

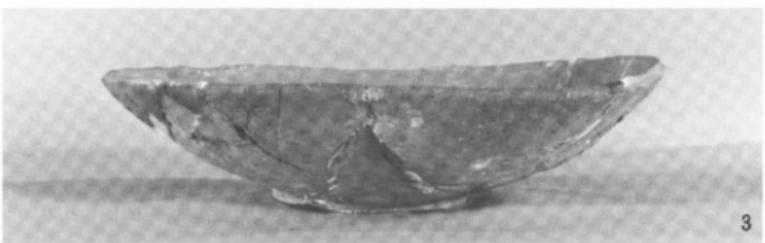
瓦器檢



1



2

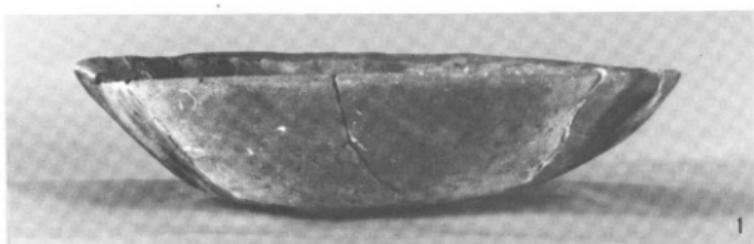


3



4

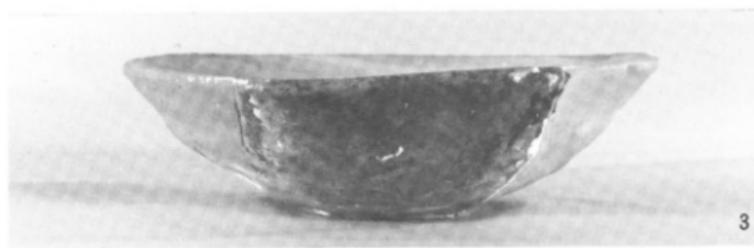
瓦器楓



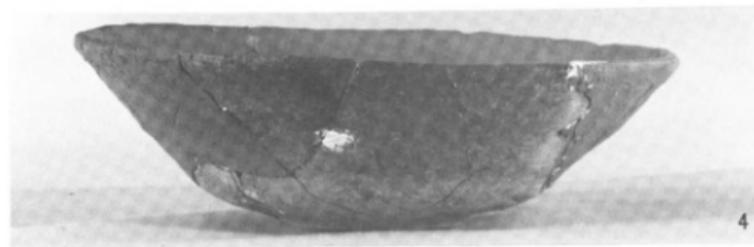
1



2

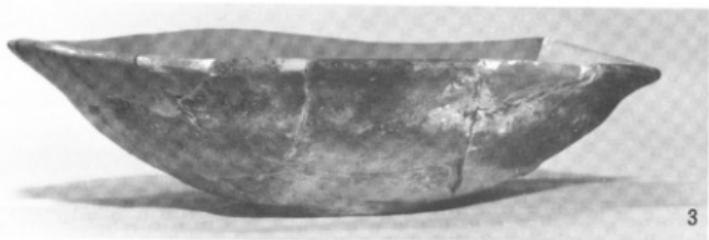
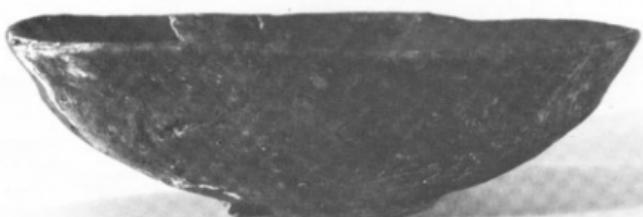
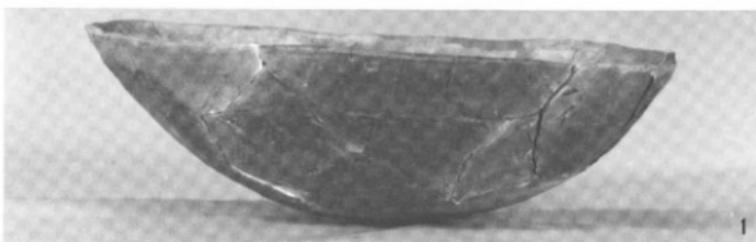


3

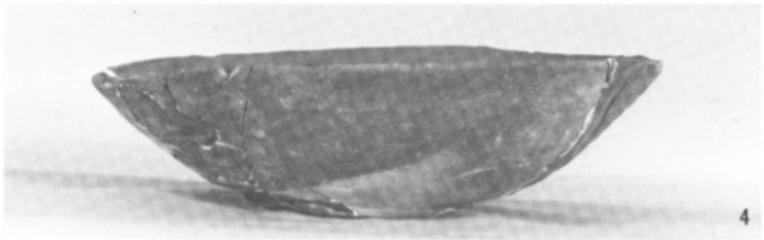
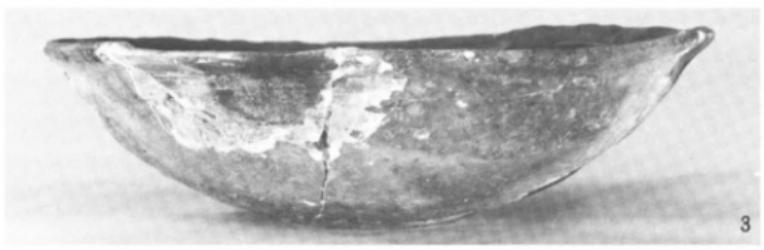


4

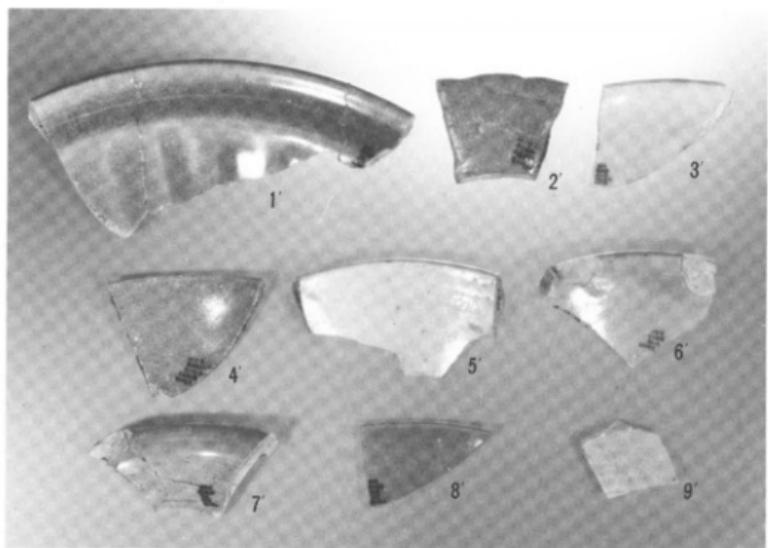
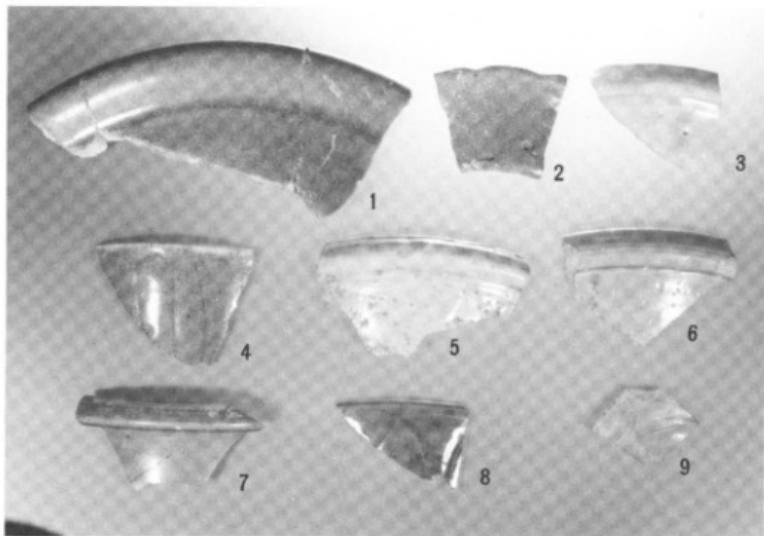
瓦器碗



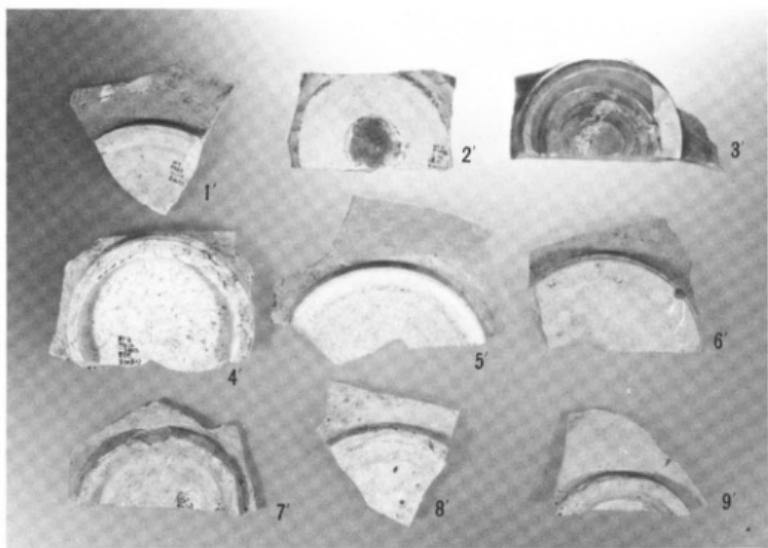
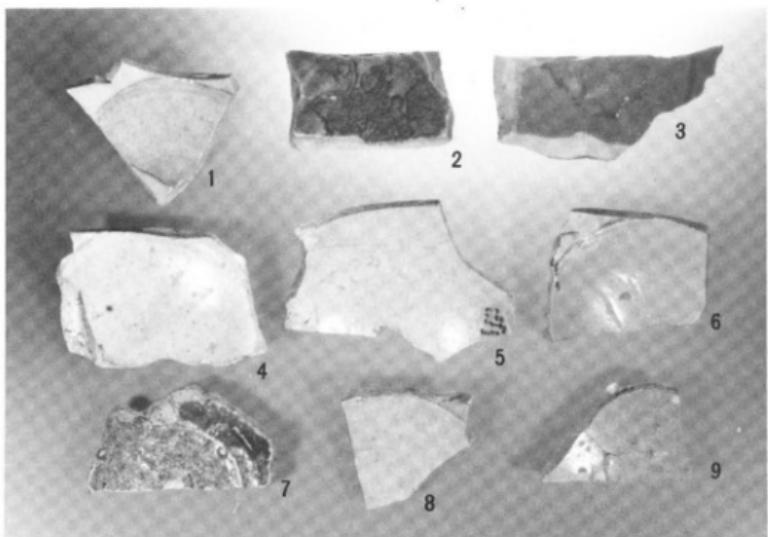
瓦器碗



瓦器碗



磁器





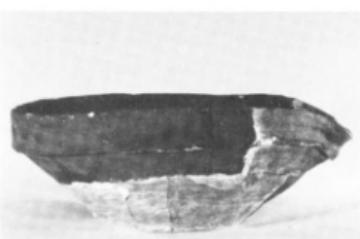
1



4



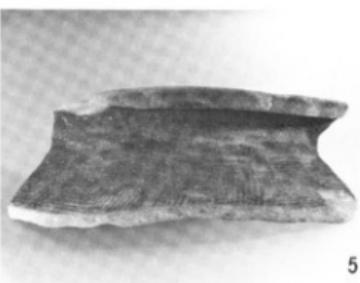
1'



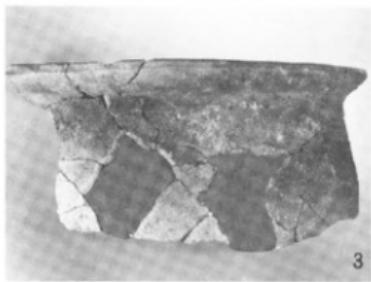
4'



2



5



3



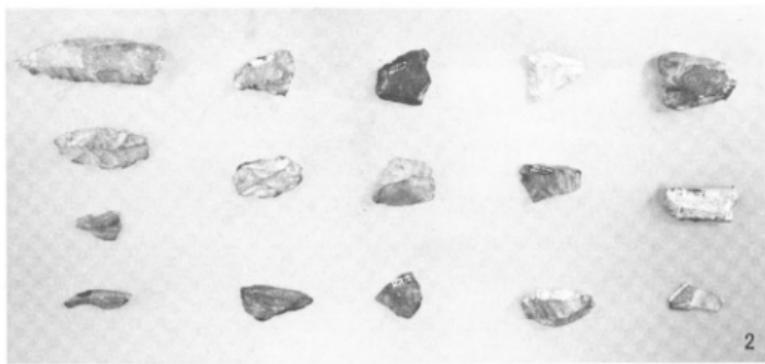
6

鉢・土釜・甕・香合





1



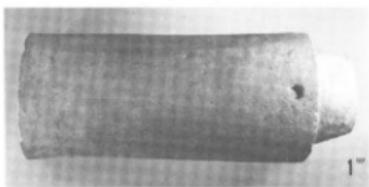
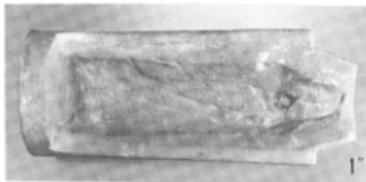
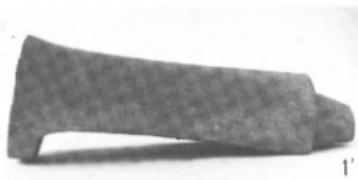
2



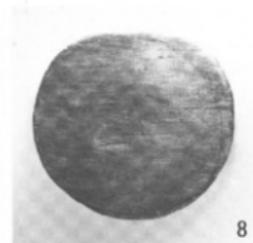
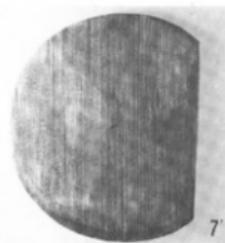
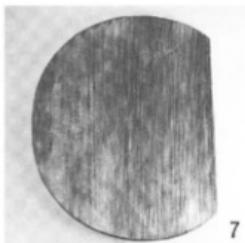
3



石器類



1～3 軒丸瓦、4・5 軒平瓦



1～3 瓦類、4～6 古錢、7・8 曲物蓋・底

昭和57年3月1日印刷

昭和57年3月20日発行

如意谷遺跡

編集  
発行

如意谷遺跡発掘調査団

印刷

大信美術印刷株式会社

